皇國記

真崎優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
皇國記

【Ｎコード】
Ｎ３８４５Ｄ

【作者名】
真崎優

【あらすじ】
伊藤玲司、２４歳。図書館勤務。趣味は読書で特技は速読。本さえあれば幸せ……そう思っていたのに、知らない世界で目が覚めた。俺はそこで出会った少女と共に、悪虐を尽くす皇帝を倒すべく戦いに身を投じる。※※現在更新停止・改稿中です※※

第一話　夏の終わり

「何だ、貴様は」

針葉樹らしい木々が見える。

植物の知識に乏しい俺には、それがクリスマスツリーに使われているものによく似た種であることぐらいしか判らなかったが、細く重なりあった葉の上に厚く被っているものは雪だと判った。

頬は錯覚で熱く感じるほど冷えているし、何より動かした指に触れた感触を知っていた。

最近は年に一度積もるか積もらないかといったところに住んでいるが、昔はよく雪だるまやかまくらをつくって遊んだものだ。

雪合戦で女の子を泣かせてしまい、とても慌てたことを思い出して口もとが緩んだ。

「寒さで気が触れたか？」

そうだ、その子もこんなふうに勝気で、余計に涙を見せたことが信じられなかったのだ。

今にして思えば、一歳年上だった彼女は俺たちのグループでは最年長で、年下の前だからと気丈に振舞っていたのかもしれない……。

「……ここはどこだ」

俺は雪に埋もれている。

しかもジーンズに半そでのシャツで。
いや、おかしいのは俺の格好ではないはずだ。
何故なら今は七月も終わろうとしている、頑固に日本列島を覆っていた梅雨前線も態度を軟化し、日々気温が上昇していく季節だ。
雲ひとつない休日にちょっと古書店巡りをしようと思い立った図書館勤務の男性としては、そうおかしくない格好だろう。

それが何故、積雪にはしゃいだ子供が完全防備で遊ぶように寝転んでいるのか。
誰かの悪戯にしても手が込みすぎている。
人を騙して喜んでいるような下品なバラエティ番組ならやるかもしれないが、俺にはそんなことをされる知名度の持ち合わせなど欠片も無かった。

「おい貴様、聞こえているのか」
「あ、ああ……」

少女が俺を見下ろしていた。
何かの毛皮で作られたフードから覗くクリーム色の髪、凛々しいというには可憐すぎるエメラルドの瞳。
バランスの取れた、一般的には美少女と呼ばれるであろうその顔を、怪訝そうにしかめている。
目鼻立ちのつくりをみれば、血統的に日本人でないことは想像できた。
という事はここは南半球のどこかなのだろうか。
しかし言葉が通じている。
一応文学部は出たが外国語はあまり得意ではなかったので、自然に英語を話しているはずもない。
かと言って国内でこれほどの雪が残っているというのはよほどの高地でもなければ存在しないはずだし、それもほとんどは根雪であ

り、まるで昨晩に降り積もったかのようなやわらかい雪が残っているとは思えない。

そんなことを考えながら立ち上がり、体の雪を落とす。

背中が濡れていないのは、それほど長くここに埋まっていたのではないからだろう。

猛烈に寒い、という以外怪我などは無いようだ。

「このあたりはこの時期、誰も近寄らない。こんなところでその格好、自殺志願者か」

「よくわからないんだ、気が付いたらここにいた」

「何だと？」

「ここはどこなんだ？　オーストラリアか、それとも北極か南極に近い国か。日本は夏なのに雪が降るはずないからな、そうじゃないと説明がつかない」

「……何を言っているのかわからないが、とりあえず近くに小屋がある。死にたくはないのだろう？」

少女はそう言い放つと踵を返し、付いてくるように合図した。

俺の疑問はすげなく無視された形だが、確かにこのままではそう遠くない将来、凍死するのは目に見えている。

「狼に見つからなくて良かったな。運が悪ければ今頃奴らのランチになっていたぞ」

先を歩く少女が似合わないものを持っているのに、いまさら気付いた。

鈍い光沢を持つ筒状の棒の片方に持ち手と引き金が付いている。

猟銃のようだ。

――このあたりはこの時期、誰も近寄らない――。

そんなものを持たねば動き回れない場所に、何故彼女がいるのかを聞きたかったが、今は後を追うことのほうが重要に思えた。

やがて丸太で建てられた小屋に辿り着いた。
彼女の言う「すぐ近く」というのは歩いて三十分ほどのことを指すらしい。
雪道で歩く速度はたかが知れているものの、慣れない俺にしてみれば年端も行かないような少女に着いていくので精一杯だった。
俺は日本人男性の平均身長よりは十センチメートルほど背が高いが、それでも俺の胸の辺りに頭がある少女は小柄な部類に入るのではないか。
歩幅も体力も、普通に考えれば俺のほうがあるはずなのだが、運動不足だった最近の生活には見直しが必要なようだ。

「入れ」

小屋の中は暖かかった。
中央に薪をくべた鉄製ストーブのようなものがあり、排気の大部分ははパイプを通して屋外に出されている。
壁際にはこの小屋を建てたときのものだろうか、鉈や鋸といった道具たちが無造作に立てかけられていたが、手入れは行き届いているように見える。
テーブルの上には毛皮や猟銃の弾薬らしきもの、無骨なナイフ、頑丈そうなより紐など、恐らく狩猟に使うものが雑多に置かれていた。
奥にも部屋があるようだが、寝室だろうか。

「おい、これで体を拭いてそこにある服を着ろ。そんな馬鹿みたいな服では寒いだろう」
「ありがとう、助かるよ」

手渡された布はストーブの横にかけてあったケトルの湯で絞られ、心地よい湯気を出している。
冷え切った手を急激に暖めるとむずがゆいように感じるのは、収縮していた血管が一気に開いていくからしい。
早速、ここに着くまでに汗を吸って重くなった服を脱ぐ。

「ば、馬鹿者！　女の前で脱ぎ出すやつがあるか！」

少女は耳まで赤くして隣の部屋に駆け込んでしまった。
……耳が赤かったのは寒さで……ではないだろうな。

「つい、早く脱ぎたくて考えが回らなかった、ごめん」
「いいから早く服を着ろ！」

「意外と純情なんだな」
などと擦れた大人のような感想を口にするのはやめ、手早く椅子に掛けられた服を広げる。
何枚もの布や毛皮が複雑に縫い合わされ、一見しただけではどこが袖口なのかさえわからない。
これは……どうやって着るのだろう？

試行錯誤を繰り返していると背後で扉の開く音がした。
冷気のかたまりが温まりつつあった肌に突き刺さってくる。

体ごと扉へ視線を向けると、そこには男が立っていた。
身長は俺の目線ほどだが、体の厚みは倍ほどあるだろうか。

彫りの深い顔に伸ばしっぱなしの髭をたくわえ、奥まった目は鋭く俺を睨み付けている。
手にはやや大きめの鉈。
赤い液体がこびりついているようだが、それが何なのか詳しくは知りたくない。

きっと俺は悲鳴を上げたと思う。
きっと、と言うのはそんな記憶がないからだが、もしかしたら声が出ていなかっただけかもしれない。

「誰だ、てめえは」

今日二度目の誰何。
そういえば今年、厄年だったことを思い出した。

第二話　さよなら安息の日々

「がははは！　驚かせちまったみたいで悪かったな」

本当に漫画のように笑う人間を見たのは初めてだったが、そんなことは瑣末な事象でしかない。

着替え中に突然血の付いた鉈を持った髭男が入ってきて、獲物を狙う鷹のような目で睨み付けられるという、平和で美しい国ニッポンではなかなか出来ない体験に比べれば、エアーズ・ロックを前にした小石も同然だろう。

何故俺が生きているのかというと、ありがちなことではあるが、この髭男は少女の知り合いだった。

不穏な気配に慌てて出てきた少女は、髭男に事情を説明すると半裸の俺に気付いてまた慌てて逃げていったのだ。

尤も、あと数秒遅かったらどうなっていたかは考えたくない。

俺の頭部から左斜め上一メートル付近に、急停止した鉈があったことだけ記しておこう。

今は何とか服を着込み、正面に頭は綺麗に禿げ上がった赤銅色の髭の男、右手には緩いウエーブがかったクリーム色の髪の少女という配置で、ざっと片付けられたテーブルを囲んでいる。

目の前に置かれたカップからは湯気と、甘いような香ばしいような香りが立ち上っている。

蒸留酒を湯で割って、バターと黒胡椒を混ぜたものだと説明された。

髭男が見た目から想像するのと誤差の少ない、ざらついたバリトンの声で、呆れたように俺に話しかける。

「しかしなんだってあんな格好でこの雪の中寝転がってるかね」

ちらりとストーブの前で乾かされている俺の着ていた服を見やり、訝しそうな表情に変えてから視線を正面に戻す。

「軽装にしても見慣れねえ形だしな」

「それは私も気になっていた。あれはどこの様式だ？」

「様式と言われても、そこらの店で買った安物だからブランド品なんかじゃないですよ」

少女と髭男は顔を見合わせ、若干ではあるが警戒の色を強くした。俺としては、わずかでも警戒を解いてほしくて正直に話しているのだが、どうにも見解に相違があるようだ。

「髪も目も両方黒いってのは見たことねえし、どこから来たんだ」

「日本です。ジャパン、ヤポンとか国によって色々言い方はあるでしょうけど」

「ニホン……聞いたことあるか？」

「いや、私は知らない」

日本を知らない？

いや、そんな地域もあるのか。

良くも悪くも、結構有名だと思っていたのだけれど。

「ここは何と言う国なんですか」

「アヴェストリア」

アヴェストリア。
響きはヨーロッパ系に聞こえるが、耳慣れない固有名詞だ。
知っている国なら多少の安心も出来たのだが。
不勉強ゆえ詳しくは知らないが、もしかしたらソビエト連邦の崩壊後に独立した国家群のひとつだろうか。
だとすると情勢が不安定だったりしたら、密入国が露見するといささかまずいことになるかもしれない。
友好国なら強制送還ぐらいで済むかと思ったりしたのだが……。

「知らない国だ」
「アヴェストリアを知らない？　二十の小国を従える近隣に並ぶものなき大国だぞ」

緊張か焦燥か、恐らく両方だろうが、喉が粘つくほど渇いていく。
まさか、そんなわけはない。
そんな大きな国を知らないわけがない。
動揺と混乱が器用にスキップで駆け回る脳を落ち着かせようとカップを取り、熱い液体を流し込む。

「！」

むせた。
居酒屋で出されるようなお湯割りかと思ったら、半分はアルコールで構成されていそうな雪国用の飲み物だった。
喉に火がついたように熱い。
それでも胃にまで達した熱さは俺をある程度冷静にさせてもくれたようだ。
本当は冷静になったと思い込んでいるだけかもしれない。
ほんの少し吸収されたアルコールが、思考機能に障害をもたらし

ているのかもしれない。
何故なら、ふと思いついたこの状況の答えは、あまりにも突拍子のないものだからだ。

「大丈夫か、おい」

髭男は初めてこっそり子供にアルコールを飲ませたときの父親のような、悪戯っぽい目を向ける。
そう言えばまだ二人の名前も知らない。

「すいません、酒はあんまり飲まないもので」
「だらしのないことだな、男だろう貴様は」

男なら飲めるというのはどうだろう。

「玲司」
「ん？」
「名前。伊藤玲司。だから貴様はやめてほしいな」
「イトーレイジ？」
「レイジが名で、イトウが姓だ。レイジでかまわないよ」
「面白い名前だな、貴様」
「ちゃんと名前で呼んでやれよ。俺はスヴェン・カッセル、スヴェンでいい」
「クリス。クリスティナ・アッテルベリ」
「助けてくれてありがとう、クリス。スヴェンも迷惑を掛けた」

癖なのかスヴェンは左頬だけをぐいっと上げて笑った。
クリスは何故か肩をいからせて隣の部屋に行ってしまったが、照れてるんだろうよ、とのことだ。

「ところでよ、これからどうするんだ。どこから来たのかもわからねえんじゃ、ここに行け、あそこに行けとも言えねえ」
「そのことですが、さっきから考えていました。……スヴェン、神隠し、というのはご存知ですか。名称は違うかもしれませんが、家出や事件ではなく突然人が居なくなったりすることです」
「ああ、昔話なんかでよくあったりするな」
「その神隠しに遭った人は、一体どこに行くんでしょう？」

馬鹿なことを、と笑いかけ、俺の目を見てやめた。

「……まさかおめえ……」
「そうではないか、と思っているだけです。俺はここで目覚めるまで、あの格好で快適に過ごせる場所に居ました。眠らせて移動させるにしても膨大な手間が掛かります。何よりお互いの国の名を知らない」
「うむ……」

ストーブの薪が一際大きく爆ぜる。
神妙な空気に気付いたのか、クリスも戻ってきて俺の声に耳を傾けている。
容易く信じられることではない。
現に俺だって半信半疑だ。
しかしそうでもないと説明が付かないように思う。

「何故言葉は通じているのか、何故ここにいるのか、それはわかりません。でも俺はここにいて、帰り方を知らないことはわかる」
「威張って言うことではないな」
「チャチャ入れるんじゃねえ」

苦笑するしかないのが歯がゆい。

「そこで、もし、俺に何か出来ることがあるなら、手伝わせて欲しい」

何かを考えるように腕を組み、窓の外の一点を凝視する。

ついでクリスに目を向け、俺を掠めて再び窓へ。

嘆息か溜息か判別できない空気の塊を吐き出し、禿げた頭を掻く。

「まあ確かに、人手が欲しいことはないこともないんだが」

「本当ですか」

「おい、あれのことか？　私は余所者はどうかと思うが」

「おめえが拾って来といて言うかよ」

「ではこいつの所有権は私にある！」

所有権って、俺は物ですか。

「使ってみて駄目ならまた考えればいいじゃねえか」

「しかし……」

「よし、決まりだ、レイジ。しばらく俺らを手伝ってもらうことにする。いいか？」

「俺はありがたいんですが」

クリスは不服そうだ。

椅子を前後ろに座って、聞き取れないほどの声で何かを呟いている。

この可愛げがいつもあればいいのに、と思うが、それはどうやら微妙な顔をしているスヴェンも同じらしい。

「なに、明日になれば機嫌は直ってるさ」

「ところで具体的には何をしたらいいんですか？」

もうすっかり日も落ちて、白かった雪も闇と同化して黒くしか見えない。
何をするにしても明日からだろう。
今晩中に気構えが出来るなら大抵のことならできそうだ。
「どう言えばいいだろうな、そう、わかりやすく言うとな」
「戦争だ」

第三話　戦乱への序曲

空が高い。
申し訳程度に細く裂いた綿のような雲が見えるが、快晴と言えるだろう。
控えめな角度から存在を主張する太陽は、見渡す限りの雪を細かく砕いて敷き詰めた白金のように輝かせている。

その自然の美しさの中に、明らかに人の手が加えられた区画があった。
東西に伸びた二つの山肌の合流点。
野生の獣の進入を阻むためにしては大げさにも見える木の柵が二重に配置され、その中に五十ほどの家屋が比較的なだらかな斜面を選んで建てられている。
一軒一軒が足場として組まれた丸太の上に建っているので、リゾート地のログハウス群にも見える。
決定的な違いはあまりに生活感に溢れていることだろうか。
子供がそこかしこで走り回り、母親らしい者たちは朝の煩雑な仕事を終えて世間話に花を咲かせている。

主だった男は今、集落の中で最も大きな家に集まっていた。
狩猟を糧とする民族らしく、みな筋骨逞しく、顔つきも精悍なものだ。
十四人の男と、一人の女が肴と酒の乗った長机を囲んで座っている。

雰囲気は和やかで定例の寄り合いの様相だったが、今日は常よりも一人多い。

「そんな訳でな、俺の補佐をしてもらうことになった」

上座と思われる場所にいた赤銅色の髭の男がそう言うと、直前まで俺に向けられていた興味の視線が一斉に険しいものに変容する。

ほとんどは猜疑のものだったが、その中に一つだけ嫌悪が混じっているのを感じた。

「俺は反対だスヴェン、どこの馬の骨かもわからねえ奴をあんたの傍に置くなんてのは」

「おめえ、クリスの時は大喜びだったじゃねえか」

「それは……」

俺と同じくらいの歳だろうか、長く伸ばした銀灰色の髪を後ろで一つに纏めた男が憎々しげに俺を見て矛先を収めたが、その意見に賛同するざわめきも少なからず出てきた。

間諜ではないのか。或いは直截的に暗殺を担う工作員かもしれない。

確かにそれらの可能性は否定できない。

何せ俺はこの世界で自己を証明できる術を待たないのだから。

ここでは何の役にも立ちそうにないが、財布や携帯電話など、普段身に着けていたものは俺の服には入っていなかった。

ざわめきは次第に大きくなり、先ほどまでとは打って変わって剣呑な空気が場に流れる。

「聞いてもらっていいか」

喧騒を鎮めたのはそれまで一言も発さずに腕を組んで座っていた

クリスだった。
立ち上がり、それぞれの顔を確認するように見回してから語を次ぐ。
「私もかつて、ひとり死にかけているところをスヴェンに助けられここに来た。どこの馬の骨とも知れぬ私を皆は暖かく歓迎してくれたが、しかし、何故私は小娘にも関わらず、他の女たちとは違いここにこうしているのか」
銀灰色の髪の男を見据える。
「……戦ったからだ」
「そうだ。私は戦った。武器を手に取り、この村に攻め入ろうとする皇国軍を追い返すために幾度も戦場に出た。それは私の望みでもあったが、ここで暮らす人々への恩返しでもあった。その結果、私は皆に認められここにいる。では、同じ余所者にも我々に認めさせる機会を与えてやればよいではないか」
俺に一瞥をくれて再び席に着く。
これが十六、七歳の少女だろうか。
凛々しく高貴で、威厳と慈愛を備えた、まるで女王のようではないか。
男たちも程度の差こそあれ、容認の方向に心の秤が傾いているように見える。
「まあそういうこった。この件は俺が全て預かる。それで文句ねえだろ」
まだ納得のいかない者もそこまで言われては、と引き下がる他になく、これで今回の寄り合いは散会となった。

クリスが皆を送り出すと広い室内は三人だけになる。
俺は気付かれないように浅く溜め息を吐き出した。
戦争。
ここでは当たり前のように起きているそれは、規模としてはそれほど大したものではないのかも知れない。
しかし仮初めとはいえ平和な日本で生まれた俺にしてみれば、規模の大小を問わず、過去の歴史やニュースで見る遠い出来事でしかなかった。
少なくとも、これまでは。
戦わねば自分の命を守れない。
今の状況に戦慄さえ覚えるが、現実として受け止めなくてはそれこそ命を落とすことになるだろう。

「……他の地域にも我々のように村の全てが反皇国組織、というのは少なからず存在するが、その中でもこの辺りは流通の要ということもあってかなり警戒されているようだ……どうした、思い詰めたような顔をしているぞ」

せっかく丁寧に説明してくれていたのだが、正直覚え切れるかどうか。

「ああ……いや、大丈夫だ。それにしても、真っ先に反対されるものだと思ってたから驚いたよ」
「反対だよ、私は」
「ならどうして？」
「クリスはヒューゴが嫌いなんだ」

にやにやとスヴェンは笑っているが、決して悪意のあるものではないのがわかる。

ヒューゴというのは恐らくあの銀灰色の髪の男だろう。
つい反抗したくなったということなのか。

「嫌いというわけではない！ただ、馴れ馴れしいというか、その……」
「苦手？」
「そう、苦手なだけだ！」

むきになって取り繕おうとする姿は、ついさっき堂々と演説していた少女と同一人物とは思えない。
実際はどう思っているかまでは俺のわずかな経験値では窺い知れないことだが、その動揺ぶりに年齢相応のものが感じられて少し安心する。

「それに、聞いていただろう、私も余所者だからな。きっかけを作ってやるぐらいはいいかと思ったのさ」
「助かったよ。まあ、これからが大変そうだけどね」

本当に俺は彼らに認めさせることができるだろうか。
ここにいる理由を、ここにいることの意味を。

「とりあえずレイジ、おめえはこっちで必要な時以外は好きにして構わねえ。ここの生活にも慣れねえといけねえしな。戦い方を教わるのもいいだろうよ」
「武器はどんなものを使ってるんですか」
「そうだな、斧とか鉈、棍棒に弓、あと少しだが銃もある」
「銃は数もないが弾だってそう多くはないからな、貴様に使わせるわけにはいかないぞ」
「ひととおり使ってみて、合うものを選べばいいさ」

弓か……。
学生のころは弓道部だったが、時間をかけて全神経を集中させるスタイルが戦闘に向いているとは思えない。
やはり他の物も見せてもらってからのほうがいいかもしれない。

その時、無遠慮に扉を開けて部屋に駆け込んできた者がいる。
先刻までこの部屋にいた銀灰色の髪の男、ヒューゴだ。
何やら尋常ではない雰囲気を感じ取り、室内は一瞬で緊張に満たされる。

「物見から緊急の知らせだ。あと二時間ぐらいで来るだろうってよ」
「性懲りもなくよく来やがるな」
「それがどうやら今回はなかなか本気らしいぜ」
「どういうことだ？」
「その数五百、ってところだ」

第四話　雪原の戦い

これまで幾度にもわたって討伐隊が編成されたが、そのことごとくが失敗に終わっている。

そもそも無理矢理徴兵された民間人である現地兵と、雪山行軍にも慣れていない正規の新兵との混成部隊が、地理を熟知している反乱勢力の拠点を制圧するのに困難を極めるのは自明とも言えた。

指令官はこの地域を領地とする貴族の次男で、代々受け継がれてきた権勢を己のものと勘違いした無能を絵に描いたような男であり、愚鈍に同じ編成、兵力での派兵を繰り返していたことでもその見識の低さを窺える。

それでもさすがに気付いたのか、混乱を避けるために正規兵のみで、さらに人員もこれまでのおよそ五倍となる五百六十人を揃えた。

これ以上失態が続けば討伐命令を出した中央も見逃すわけにはいかない。

重装歩兵を中心とし、鈍重であっても殲滅戦に特化した編成を組んだ。

必勝を期しての布陣である。

――というのが今回の背景らしい。

女子供や戦えないものは山腹の隠れ処に避難し、残っているのは七十人ほどだけだ。

俺たちはこの如何ともしがたい戦力差をどうにか覆さなくてはならない。

二時間前。

「奇襲をかけるしかないだろう、正面からぶつかったら一網打尽だからな」
「しかし後背から攻めるにしても挟撃するにしても、この数では……」
「何もせずに黙って殺されろとでも言うのか！」
「一旦退いて機会を待つべきでは」
「我々には退くべき場所などないではないか」
「退くにしても女子供もいては追撃を振り切れない」

再び広間に集まった十六人は口々に今後の方策を話し合っていたが、やはり圧倒的な数の差を埋めるほどの良策は出るべくもない。
徹底抗戦を主張するもの、死んでは意味がないと叫ぶもの、どちらともつかず困惑するもの。
このままでは何をするにしても手遅れになってしまう。
喧騒の中、隣に座っていたクリスと不意に目が合った。

「貴様はどう考える？」

真剣ではあるが、明快な解の出ない問題で生徒を困らせて楽しむ教師の目だ。

「そうだな、やっぱり無駄に死ぬのは嫌だな。かと言って何もしないで逃げるのは不愉快だし、戦えない人を逃がすための時間稼ぎは必要だと思う」
「ふふ、私と同じ考えだ」

どうやら及第点は頂いたらしい。
それにしてもこの少女は悪戯っぽい表情がとても魅力的で困る。
ほんの少し感じていた生徒扱いの不快感がどうでもいいことのように思えてしまうのだから。

「まあ、問題は時間稼ぎの方法なのだがな……」

圧倒的戦力差を打破する作戦。
双方の部隊編成、行動目的。
数こそ違うが、俺はこれによく似た状況を知ってはいた。
しかしそれは所詮、知識として知っているだけで実際に見たり体験しているわけではない。
言ってもいいものだろうか。

「時間稼ぎ……」
「何かあるのか？」
「ないわけじゃないけど、参考程度に聞いてもらえるとありがたい」

いつの間にか周りは俺たちの話に耳を傾けていた。
クリスもそれに気付き、頷くスヴェンを確認すると最上級の翡翠を溶かし込んだような瞳に力を込めた。

「言ってくれ」

北に崖と呼んでも差し支えのなさそうな山肌と、南はトウヒの立ち並ぶ深い森に挟まれた、村へと続く一本道。

それを抜けると村まではいくつかの木々が立つだけの開けた雪原に出る。
奇襲のセオリーからすれば、一本道での側面強襲が最も成功率が高いだろう。
だがその策を採るには戦力が少なすぎる。
中央部を分断したところを挟撃されては逃げ道もなくなってしまう。
奇襲部隊のほかに本隊があってこそ意味のある戦術なのだ。
ではどうするか。

「そろそろ先陣が抜けてくるぞ」
「陣容を整えるまで待て」

後続も次々と森を抜け、雪原東部で陣形を組む。
五十人ほどの横列がこちらからの攻撃を警戒して前方に、その後ろに並ぶ横列が上方に盾を構える。
堅固な守りで着実に進軍し、攻城戦や防衛専守に長けた陣形。
ローマの歩兵戦術の一つ、テストゥドだ。
今までの経験で弓に対する防御を優先させた結果だろう。
以前からこういった戦法が使われていたかはわからないが、少しは考えてきたと見える。
村の人間は初見のようだったが、この種の陣形を採ることは物見の情報によって装備を聞いていたので想像に難くなかった。
ここまでは完璧に予想通りに進んでいる。

「そろそろ雪原の中央だ」
「よし、では始めるぞ。当たっても何てことなさそうだが、一応当てるように撃てよ！」

スヴェンの合図で一斉に矢が放たれた。
進行方向の逆、先程抜けてきた道の崖上からの射撃に皇国軍は慌しくこちらに向けて隊列を組み直そうとする。
その間にも第二射、第三射と矢の雨が降り注ぐ。
一本道での奇襲がなかったために後背への備えを怠っていたようだ。
当然それもできたが、敢えて不利にも思える雪原での戦闘を選んだ。

隊列が整う頃には既に俺たちは場所を移動している。
二手に分かれ、一方は山肌沿いに高度を維持したまま迂回するように西へ。
もう一方はほんの少し後退し身を隠す。
クリスが指揮する迂回した部隊が再び弓を射る。
数が減ったことを悟らせないように先程よりも激しく攻勢をかける。
皇国軍の弓兵も盾の隙間から反撃するが、姿が見えない上に重力の影響もあり、物資の浪費でしかなくなっている。
こちらの矢も瞬く間に減っていくが、行動予定進路に予め大量に準備されている。
さらにじりじりと西に移動しつつ射撃の手は緩めない。
隊列の再編を繰り返す皇国軍が注意を引き付けられたのを見計らい、伏せていたスヴェン隊も攻撃を再開する。
完全に意表を突かれ、堅牢なはずのテストゥドに綻びが生じた。

その後も小刻みな移動と激烈な射撃を繰り返し、敵を翻弄していく。
そもそも何故弓に強いはずのテストゥドに対し、執拗なまでに弓での攻撃を繰り返しているのか。
目的は弓によるダメージではない。

不慣れな雪原、その雪原を重装備で遠征してきて、頭まで使って支える巨大な盾。
間断なく降り注ぐ矢、そして有効な攻撃の手段がないという絶望。
心身ともに疲労を蓄積させることこそがこの作戦の狙いだった。

「あちらさんの矢、尽きたみたいだぜ」

始めは難色を示していたヒューゴも、ここまで予定通りの展開になっては仕方ない、といった風情でいる。
ではそろそろこの戦いを終わらせようではないか。

「クリス、スヴェンに連絡を」
「いいのか？」
「もう彼らに戦う気力はないよ。早く逃げる理由をあげよう」
「虫も殺さないような顔をして、なかなかえげつない奴だな、貴様は」

正規兵に対する侮辱と取ったのだろう。
些細な悪戯をした子供を叱る母親のように苦笑する。
生徒から格下げされたようだが、その件については後程ゆっくり語り合うことにしよう。

クリスの目配せを受けたヒューゴが弓に蟇目の鏑矢をつがえ、日の傾きかけた空に放した。

第五話　宴の夜

かつて強勢を誇ったローマ。
有名なユリウス・カエサル、英名ジュリアス・シーザーの時代であるが、当時はカエサルの他クラッスス、ポンペイウスが元老院を蔑ろにし権力を振るっていた。
しかし戦果、功績を挙げ続けるカエサル、ポンペイウスに比べ、クラッススはさしたる業績も残せずにいたため、手近に思えた隣国パルティアへの侵攻を開始する。
クラッスス軍五万余、パルティア軍一万余と、戦う前から勝敗は決しているようにも思えたが、カルラエ近郊での戦いはパルティアの圧勝に終わった。
平地という大軍でも機動性を活かせる地形にも拘らず、一万に満たない騎馬弓兵の一撃離脱射撃により密集形態を取らされたクラッスス軍は、半年にも及ぶ遠征の疲労と、矢を防ぐために盾を支え続けたことによる脱水症状や熱中症によって衰弱していった。
満を持して突撃した千騎余りの重装騎兵は白兵戦に弱いテストゥドを縦横無尽に切り裂いたと伝えられている。
死者二万、負傷者五千、捕虜にされた者一万を数え、死者にはクラッススの息子プブリウスも含まれていた。
クラッスス自身もその後間もなく死亡する。
首級がパルティア王に献上されたことから部下に殺されたとの見方が強い。

さして多くないローマ大敗の記録だ。
以降何度もパルティアと戦っているが、勝敗つかず、ということも多くあった。
基本パルティアの戦術は「負けない」ためのものであり、近接戦闘を苦手とするために会戦となると退却し、それを追って長征してきたローマ軍の長く伸びた補給線を絶って撤退させたりするのがその最たるものだ。
こうした戦い方は何もパルティアに限るわけではない。
スキタイやモンゴル帝国などの遊牧国家でも同じような戦術が展開されているが、ローマが初めて戦った遊牧民族がパルティアであったため、講じる対策がなかったのが戦争が長期化した一因といえるだろう。
このカルラエの戦いも本来はもっと長い時間をかけた持久戦だったのだが、今回は思いの他効果的に働いてくれた。

俺は一人で部屋を抜け出した。
夜の風は身を切り裂くほど冷たいが、火照った体を冷ますには丁度いい。
しかし、こんなところで読み漁った本の内容が役に立つとは思いもしなかった。
昔から持っている金銭はほぼ全て書物へと姿を変えた。
子供の頃の小遣い、学生の頃のアルバイト代、就職してからの給料。
総額が幾らになるかなど恐ろしくて計算できない。
つい最近も思い余って十二冊組の古書を購入してしまい、家賃の納入が遅れるという失態をやらかした。
こんな社会生活不適合者でも、その無駄だった知識が役立てられるなら、この世界に来たのもあながち悪いことでもなかったかもしれない。

「レイジ、ここにいたのか」
「すいません、勝手に出歩いて」
「今日の主役がいねえと始まらねえんだよ」
「俺は何もしてませんよ。ほんの少し口を出しただけで……」
「がははは！　そんなこと言ってねえでさっさと来い！」

半ば引き摺られるように連れ戻される。
室内はアルコールの匂いが充満し、人は所狭しと床に座って酒を酌み交わしている。
スヴェンは俺が酒に弱いことを忘れているようだ。
そして傍らに座る少女はそれ知っていてなお飲ませようとする。
果たしてよりどちらが性質が悪いだろうか。

あの後の戦いはヒューゴの放った合図に呼応したスヴェンたちが疾風の如く敵陣に切り込み、敵の指揮官、貴族の馬鹿息子を討ち取ったことで終結した。
作戦通り弱りきった皇国軍はたちまち瓦解し、指揮官を失った兵士たちは先を争って戦場を離脱していった。
我々のリーダーであるところのスヴェンは、追撃しようとする若者らを諌め負傷した数人を連れて村に凱旋するという高潔ぶりを見せたかと思うと、呼び戻した非戦闘要員が集まるのも待たずに宴を始めたのだった。
皇国軍が引き返して来たらどうするんだ、とクリスと笑い合ったのは秘密である。

既に夜も深くなり、騒いでいるのは派手に顔まで赤くした赤銅色の髭男以下十数人。
他はちびちびと肴をつまみつつ談笑したり、苦しそうに重なりあって眠っていたりする。
俺も断りきれずに過去最多量のアルコールを体内に溜め込んでいたが、こんな気分もたまにはいいか、と流れに身を委ねていた。
皆本当に嬉しそうだった。
怪我をした六人もかすり傷程度の軽傷だったし、何より敵兵にも死んだ者がいないというのは上出来だ。
それにきっと、この大騒ぎも近いうちにここを離れなくてはならないことがわかっているからだろう。

「……飲め」

いつの間にか隣に座っていたヒューゴがなみなみと注がれた杯を突き付けてきた。

「いや、俺はもういいよ」
「いいから飲めよ」

わけもわからず杯を受け取り、舐めるように口をつけた。
するとそのまま立ち上がり、ふらっと部屋から出て行ってしまった。

「……何なんだ？」
「何だ、ヒューゴに気に入られたのか？」
「気に？」

それは衝撃的な発言だ。

ヒューゴと入れ替わりにクリスが座り込む。

「あいつは気に入った奴にはこうするのだ」

「クリスもそうだったのか？」

「そうだな、しつこい程に」

「それは災難だったな……」

クリスはあきれたような表情でアルコールではない飲み物を傾けていたが、突然硬直した俺を不審に思ったようだ。

「どうした？」

「俺は普通に女の子が好きなんだが」

可憐な美少女は盛大に吹き出しあそばされた。

その後も取り憑かれたように笑い続け、何事かと皆が集まってもしばらくは収まらなかった。

やはりこういうことは珍しいらしく、クリスもこんな風に笑うんだ、などという声もちらほら聞こえてくる。

どうしたんだ、と聞かれたので経緯を説明すると、何かに取り憑かれた人間が増えてしまった。

……俺はそんなに面白いことを言ったのだろうか。

半数以上が酔い潰れてしまったので毛布を掛けて回り、動けるものは自分の家へ帰っていった。

俺はクリスと協力してスヴェンをベッドに運び、宛がわれていた部屋に戻ろうとした所で呼び止められた。

「話って？」
「いや、先刻は悪かったな、と、もうひとつ」
改めて差し向かいに座っていると、気恥ずかしいような気もする。
広間とは反対側の、廊下を広げたようなところに椅子が二脚と小さなテーブルが置かれていて、正面の椅子には優雅に脚を組んだクリスがいる。
照明はテーブルに置かれたオイルランプと、外から差し込む月の光だけだ。
「何故私たちが戦っているか言っていないと思うが」
「そう言われてみればそうだね」
「もしかしたら我々のほうが悪人かもしれないぞ」
「でもそうは思えなかったし、それを今、教えてくれるんだろう？
ならいいじゃないか」
「……本当におかしな奴だ、貴様は」
まだ俺の夜は終わらないようだった。

第六話　決意

アルヴィーカの奴らが十倍にもなろうかという正規軍を撃破した。

その噂は近隣の町村にも流れ始め、人々は僅かながらも暗く厳しい圧政から開放されるかもしれない、という光を見出そうとしていた。

しかし見せしめ、反乱の芽を摘むとして無関係の町や村が攻撃されないとは限らない。

余計な真似をしやがって、と毒づく者も少数ではあるが存在する。

その少数は或いは誇るべきだろうか。

雪原の戦いの三日後、この機に乗じて蜂起しようと画策していた別の村が襲撃される。

勢力としては周辺でも最大級と目されていたその村は、千人余りもの戦力を持ちながらただ一戦で壊滅した。

息子を喪った貴族は保有する全兵力七千を動員し、領内の反乱勢力を根絶やしにするべく行軍を開始したのだった。

皇国軍が身じろぎをしただけで踏み潰されそうな小勢力は、発端となったアルヴィーカに希望を求めて集結しようとしていた。

「やっぱりこうなっちまったな」

「仕方のないことだ。勝ち続けていればいずれこうなることはわかっていた。まあ、今回は予想以上に勝ち過ぎではあったのだが」

皇国軍が兵を集め出した、という連絡を受けた時の二人はそうなることが予定通りだったように落ち着いていた。
誤算はそのままこちらに攻めて来ると思っていたこと、その影響で身動きが取りづらくなってしまったことだろう。
本来なら身軽に動ける少人数のほうが行動しやすかったのだが、民衆を助けることを目的とする以上、頼ってくるものを無下にはできない。

先帝は厳格だが至誠に溢れた賢君だったらしい。
しかし心不全による急死によって、当時第一皇子だったアルブレクトが十九歳の若さで跡を継いで皇帝となった。
民は嘆き悲しんだが、アルブレクトは父に似て聡明と謳われており、国を総じて新帝の誕生を喜んだ。
事実、即位したアルブレクトは臣下や民衆の意見をよく聞き入れ、先帝の施政を効率化し、能動的な警察機能を発展させるなど文句のつけようがない善政を布いた。
しかし即位から三年が経ったころ、その態度が急変する。
以前からの主な重臣が謂われもない罪で次々に投獄され、いかに遠戚であっても帝位継承権を持つ可能性がある者は全てが反逆罪として死を賜った。
運よく逃亡できた者もいたが、半数は捕らえられた後に殺され、もう半数は見つかり次第殺されている。
民衆に対しても税はそれまでの十倍になり、払えない者や反抗する者は容赦なく殺された。
廃止されていた後宮の封も解かれ、集められた子女は一説に五千とも一万とも言われている。
不要な建築や再建には延べ二百五十万人が動員されたが、無事に

帰ってきた者は十万にも満たない。
人々は悲嘆に暮れた。
何故人が変わられたように暴虐を尽くされるのか。
もしや先帝の急死も仕組まれたものではなかったか。
そうした悲観や疑念はやがて怒りや憎しみに取って代わり、把握しきるのも困難なほどの反抗勢力を生み出すことになった。
それらは無造作な弾圧によって壊滅させられていくが、弾圧は新たな勢力を生み出す温床となり、無限に続くかとも思われる連鎖は疲弊しきったまま現在まで続けられている。

そして今その連鎖を断ち切ろうとして足掻いている……というのが先日クリスに聞いた「戦う理由」だった。
間接的に多くの歴史を知る俺にしてみれば全く平凡な理由だ。
善き支配者として始まったものが悪しき支配者として終わった例など、それこそ掃いて捨てるほど存在する。
しかしそれは平凡に思えるほど多くの歴史に根付いた悲惨な理由なのだろう。
俺にそれを否定することはできなかったし、する気もなかった。
虐げられる民衆を救うために反旗を翻す、なんて劇的な状況にヒロイズムを感じてないといえば嘘になるし、単純に権力を持った傲慢な人間が嫌い、ということもある。
強いて言うならばここが気に入った、とでも言うべきか。

集まった勢力は大小併せて十三、総勢二千人にもなった。
数は確かに力だが、だがこれは諸刃の剣でもある。
指揮系統のまとまらない兵力など戦力に計算できないし、何より食料や資材が足りなくなる。

勢いだけで何とかなるものならそれほど構いはしないが、持久戦になると圧倒的に不利なのだ。

各勢力の長を集めて会議が開かれる。

こちらの代表はスヴェン、実質的な総司令官としてクリス、そして軍師、作戦参謀を拝命した俺、と順次紹介された。

大層な肩書を付けられて何となく居心地の悪い思いだが、実際、俺やクリスを見てあからさまに舐めて掛かっている者もいるようなので、格上であることを示さなくてはならないのは仕方のないことか。

今回の議長役はスヴェンが務める。

「ここに集まった理由の大まかなところは察してるつもりだが、その真意を詳しく聞きたい」

「あんたのとこは十倍の敵に勝ったんだろう？　ならその威光に乗っかりたいと思うのは普通じゃないかね」

「少しでも勝てる可能性が欲しいからな。負けるのがわかりきってる戦いなんて意味がない」

「……それは俺らに全ての指揮権を委ねると取っていいんだな？」

そう言うと幾人かが難色を示した。

「うむ、最初はな、そのつもりだったんだが、小娘や青二才に任せるというのは下が納得しないのだ」

「揺ぎ無い実績や名声でもなければ全面的に従うのは無理というものだよ」

にやにやと値踏みするような嫌な目つきで俺とクリスを嘗め回す。

あわよくば失敗したら責任を取らせて、上手くいったら手柄だけせしめようという魂胆だろうか。

くだらない。
どこにでも腐った人間というのはいるものだ。
表情を消して悪寒に耐えていたクリスが立ち上がり、扉に向って声を掛ける。

「ヒューゴ、そこにいるか」
「はい、ここに」

扉が開かれ、妙に畏まった態で頭を下げる。
頭の固い長たちにクリスが絶対的上位者であることを印象付けるための小細工だ。
それが少しは功を奏したのか、軽い動揺が室内を駆け巡る。

「帰られる方がいらっしゃる。案内して差し上げろ」
「は」
「ちょっと待て、誰も帰るとは言っとらんぞ」
「我々を信用しない者がいては今後の指揮系統に不安が残る。それにより全員の命に危険が及ぶことも有りうる。数で劣る我々は団結に拠らねばならないが、信じられない者とそれができるとお思いか？　私たちは反乱ごっこをしているわけでは無いのだ」

狼狽する者を切って捨てる。
そうだ。
駄々をこねる子供のような「反乱」では国は変えられないことを、俺は知っている。

「俺たちがするのは反乱じゃない」
「レイジ？」
「反乱やテロリズムでは歴史は変えられない。もっと大きな、強い意思の力でなければ国というのは動かせない。国というのは、思っ

ている以上に重いんだ」

三十二個の視線が俺に突き刺さる。

予定に無い俺の発言にスヴェンやヒューゴが戸惑っているのがわかる。

クリスだけは知っていた。

ここで言うとは思ってなかったかもしれないが、その目には期待が込められている。

「では、どうしろと……」

押し出したように掠れた声が俺に先を促す。

用意していた言葉なのになかなか喉から出てこない。

それほどまでに重い。

一度深い呼吸を挟んで意を決める。

「俺たちがやらなければいけないのは、革命だ」

第七話　示される道程

結局残ったのは四百人程度だった。
それでも予想以上の数ではある。
部隊の再編に二日を要した事を考えると、あのまま二千人が残っていたら大仕事になっていたかもしれない。
現時点ではこのぐらいが適正だろう。
そろそろ行動を起こさなければならないことでもある。
今日は午後にクリスが、全軍に向けてこれからの展望を説明することになっていた。

「それにしてもレイジ、あんたがあんなことを考えてたなんて知らなかった」
「いや、調子に乗りすぎたよ」
「そんなことはない。俺たちの目的がより明確になったんだ、感謝してる」

そう言って笑われてはこちらも苦笑するしかない。
編成の指揮はほとんどヒューゴに任せていたが、僅かな説明でも俺の意図をよく汲んでくれているし、その迅速な処理能力は意外な才能を見せ付けられた思いだった。
性格は直情的で好戦的だが、本質としては指導力と事務能力を兼ね備えた補佐役に向く人材のようだ。
そんなことを考えていると、作戦本部として使っている一室にスヴェンがやってきた。

「厄介なことになった」
「どうしたんです？」
厄介ごとを持ち込んだにしてもさすがに慌ててはいないが、その深刻さは十分伝わってくる。
「抜けて行った連中な、一戦やらかす気らしい。オーシャの近郊で準備してる」
「オーシャというと……すぐ東の町でしたね。いつごろになりそうですか」
「皇国軍もこっちに向かって来てるからな、明日の朝にはぶつかるだろう」
まずい。
非情に徹するなら好機ともなりえるが、それができないからスヴェンも「厄介」と言ったのだ。
袂を分かったとはいえ、同胞を見殺しに出来るはずも無い。
先を思えば無駄な戦闘は避けたいのだが……。
「クリスには言わずに予定通り進めちまうか」
「隠し通せるものですかね」
「私がどうしたのだ」
完璧なタイミングだ。
どうやら神は意地悪く、どうあってもより困難な路を往かせるつもりらしい。
ただ面白がっているだけかもしれないが。
当然、安全策はあっさりと却下された。

冬の勢力も一時的に余暇を楽しんでいるのだろうか。
雪はじわりと解け始め、軒先の氷柱は時折落ちてはその音で人々を驚かす。
ぬかるんだ地面を踏みしめ、整然と四百人が並び立っていた。

「総司令官のクリスティナ・アッテルベリだ」

特別にあつらえられた台の上から凛と響く声が周囲の静寂を際立てる。
もしかしたら、まだ少女に指揮されることに不満を持つ者がいたかもしれないが、この瞬間にそう思っていた己を恥じていることだろう。
それほどまでに今のクリスは威厳に満ちている。

「これより我々はヴィッテルスバッハ辺境伯領へ向かう」

ざわめきが広がる。
戦うんじゃないのか、逃げ出すのか……？
戸惑うのも仕方の無いことだろう、皆戦うために集まったのだから。

「厳重に隠匿しているがヴィッテルスバッハ辺境伯は反皇国派であり、保有する騎兵部隊は我々にとって重要な戦力となりうる。さらに彼の地の守りは堅く、拠点とするには最上のものであるとともに、家族の安全を容易に確保できる点も見過ごせない。以上からこれは皇国打倒へ欠かせない条件であることは理解できるだろう」

既に残してきた家族のある者のところには辺境伯領へ赴くように連絡を入れてある。
アルヴィーカの者たちも先刻出立した。
それらを告げた後、もう知っている者もいるかもしれないが、と一呼吸置いて再び口を開く。
見識の高さを思い知らされたのだろう、もう疑問を持つものはいなくなっていた。

「先日別れた一団がオーシャの東で皇国軍と衝突する。我々は今出ればそれを囮に無事抜けることが出来るが、私は敢えて彼らを救いたいと思う」

毅然とした美しい総司令官に賛同の声が連なる。
我々の手で平和を！
光溢れる自由を！
戦女神の祝福があらんことを！
堰を切ったかに思える声は波濤となり、音は実体を持ったかのように周囲の木々を揺らしている。
この熱狂の渦を作り出した張本人は、台の上で少しだけはにかんだように見えた。

夜半に村を出発した俺たちは、日の昇る直前に戦場になるであろう地点を見渡す丘の反対側に陣を構えた。

「さて、作戦参謀の意見を聞こうか」
「その呼び方はやめてほしいんだけど……この戦力で出来ることは多くないよ。広さと戦力差を考えれば、皇国軍は鶴翼かそれに近い

陣形で一気に決めようとするはずだ。そうすると意外と脆いのは翼の付け根。そこを横から貫くように一撃して離脱し、そのまま辺境伯領に向かう」

恐らくそれが限界だろう。

二撃目は警戒もされるし、もし捉まったら紙屑より容易く握り潰されてしまう。

俺たちの奇襲に合わせて同胞が退いてくれるのを祈るしかない。

「もし奴らが勢いづいて攻撃を続けたらどうする」

「……残念だけど」

できれば助けたいのは俺も同じだ。

しかしそれでこちらまで全滅したのでは話にならない。

考え込んでいたクリスが溜息をついて顔を上げる。

「仕方ないな。我々はできるだけのことをして、奴らの戦術的センスに期待しよう」

日が昇ってからおよそ二時間が過ぎた頃、両軍が姿を現した。

皇国軍は予想通りV字型に陣を敷き、中央に誘い込んで包囲撃滅しようとしている。

一方の反乱軍はまとまりも無く、ただ漫然と戦意だけが先走っているようにも見えた。

矢と投擲による牽制の後、皇国軍の偽装の後退に釣られた反乱軍は意気軒昂と前進する。

この時皇国軍の両翼はほとんど後退していない。

完璧な形で鶴翼陣が機能していた。
気付いた頃にはもう遅い。
両翼から挟撃される恐怖でパニックを起こす寸前だ。
皇国軍は勝利を、反乱軍は敗北を、それぞれ確信したに違いない。

「今だ！」

気の緩みに乗じて、騎乗兵を中心とした俺たちの部隊が楔型の突撃陣で側面から強襲する。
楔は一瞬ごとに敵を切り裂いていくが、恐れ入るのはその先端で槍を振るうのがクリスだったことだ。

「私に続け！」

勇ましくも美しく敵陣を駆け抜け、後続も遅れまいと喰らい付く。
ものの数分で中央突破を完遂し、敵が動揺から抜け切れていないと見るや馬頭を巡らせて再び突撃する。
さらにもう一撃加え、反乱軍が退くのを確認して戦場を離脱した。

あきれた顔を作って馬に揺られていると、クリスが隣に馬を寄せる。
戦前の一撃して離脱、というのを無視し、三度にわたって突撃をかけたことを気にしているのだろう、こちらを窺うようにして声をかけてきた。

「怒っているのか？」
「……あきれているだけだよ」

「本当に怒っていないな？」
「成功したものまで怒るほど心が狭くはないつもりだけど」
「ならいい……でも、すまなかった」

徐々に小さくなる声だけ残し、顔を背けて離れてしまった。
この少女には敵わないな、と思う。
同時に彼女さえいればどんな困難でも乗り切れるような、そんな気もしていた。

第八話　突然の訪問

ヴィッテルスバッハ辺境伯領。
アルヴィーカから南へ一ヶ月と少し。
日に日に気温は上昇し、雪を見かけなくなり、俺の感覚では春に差し掛かる季節になってようやく、新しく芽吹く森の緑と、上流からの雪解け水を湛えた湖の青に囲まれた山間の天然要塞に辿り着いた。
家族の一群と合流して遅くなったとはいえ、かなりの距離を踏破したことになる。
この間にも様々な出来事があったが、特筆すべき問題が発生しなかったのは幸いといえた。
強いて挙げるなら、せいぜいヒューゴが一分の隙もないほど完璧に振られたことぐらいか。
そろそろ立ち直ってくれないと困るのだが。

ここまで来て、俺にはある疑念が生じた。
いや、実は以前から感じてはいたが、あまり考えないようにしていた、というのが正しい。
果たしてヴィッテルスバッハ辺境伯とやらは俺たちに会ってくれるのだろうか。
反皇国派とはいえ、広大な領地を持つ為政者が革命軍を名乗る庶民に目通りを適わせるとは思えない。
そのあたりはどう考えているのだろう。

「クリス、聞いていいか」
「答えられる問いには答えよう」
「どうやって辺境伯の協力を取り付ける気なんだ」
「何だ、そんなことか。貴様は心配せずともよい」
「そんなわけにはいかないよ」
「今から教えてやる。城には貴様も連れて行くからな、多少は見れる格好にしておけ」

要領を掴ませてくれないまま、颯爽と身を翻していった。
こうなったら信じてみるしかないではないか。

身支度を整えているとヒューゴが来た。

「本当に三人で行くのか？」
「そうみたいだな」
「せめて護衛に俺ぐらい連れて行けよ、もし何かあったらスヴェンだけじゃどうにもならないだろ」
「大勢連れて行って警戒させるよりはいいと思うけど」
「じゃあ三人が四人になるくらい……」

そんなに行きたいのか。
まあ別に俺は構わないのだけれど、クリスがどうしても三人で、と言うからには何か理由があるのだろう。
本音を言えば少しどころではなく不安だ。
信頼しているといえ、盲目的な狂信者ではないのだから。
それにしても俺を戦力に計算していないのはどうだろう、或いは正解なのだろうか。
納得いかない様子のヒューゴをどうにか宥めて支度を終わらせる。
とは言っても、正装や盛装を持っているわけでもない。
少し伸びた髭を剃って、汚れていない服に着替えただけだ。

クリスとスヴェンは既に城門前の広場にいた。
スヴェンは白いシャツの上に綺麗になめした革チョッキを着込み、伸ばし放題にしていた髭もきちんと整えられている。
好意的に見れば貴族に仕える執事兼ボディーガードのようだ。
一方クリスはといえば、ドレスとまではいかないが上品に裾を広げたワンピースだ。
普段はそのままか一つに括るだけの髪も結い上げられ、さりげなく宝石をあしらった髪飾りで留められている。
そういえばここまで女性らしい出で立ちのクリスを見るのは初めてだった。

「……クリス、女の子だったんだ」

つい軽口を叩いてしまい、向こう脛を思い切り蹴られたが、今回は甘んじて受けよう。
一頻り大笑いしていたスヴェンからひったくるようにしてクリスが濃紺の布を投げて寄越した。
片側の肩で留める形のマントだった。
子供の頃のヒーローごっこを思い出してしまって恥ずかしくもあるが、ここではそれが普通なのだ。
クリスが微妙な表情の変化に気付いたらしいが、何でもないよ、と苦笑してマントを広げる。

「さて、馬鹿をやってないで行くとするかね」

城門には二人の衛兵が四メートルはあろうかという装飾槍を掲げて立っている。
我々が近付くと槍を頭上で交差させて警戒するが、実際その長さの槍では戦えないのではないだろうか。

「あれは守るためにいるのではないからな。門の飾りだ」
「そんなものか？」
「門のすぐ裏には屯所があって、そこの兵士が来るまでの数秒を保たせるための長槍でもあるがな」

一応そういう目的もあるのさ、とさして興味もなさそうに俺に教える。
槍が交差したままゆっくり下ろされ、それに阻まれて足が止まった。

「何用だ」
「ヴィッテルスバッハ辺境伯はおられるか」
「今日は特に訪問者があるとは聞いておらぬ。出直すがよかろう」

当然だ。
それがわからないわけはないだろうに、何故こうも堂々としていられるのだろう。
するとクリスは無造作に首のペンダントを摘み上げた。

「これを見ても同じ台詞が言えるか？」
「……それが何だと……」

訝しげに確認しようとした衛兵の体に緊張が走ったかと思うと、スローモーションに見えるほどの素早さで槍を引き上げ、最敬礼を取った。

「失礼致しました！　直ちにご案内させて頂きます！」
「急がなくてもいい」

衛兵の一人が伝令のためだろうか、槍を置いて駆け出していく。
何が起きたのか理解できずに呆然としていた俺をスヴェンが促して城内へと進む。
すぐに案内係らしい女性がやってきて応接室へと通された。
クリスがその女性と何か親しげに会話をしていたようだったが、会話の内容は聞き取れなかった。
室内は適度に広々としていて、余計なものが置かれていない。
どの調度品も質素に見えるが、よく見ると繊細な彫刻が施されている。
高級、というのはこういった押し付けがましくないさりげなさを言うのだろう。
依然として俺は混乱の渦中にいたが、今の状況が尋常でないことは理解できている。

「さっき見せたものは何だったんだ？」
「もう少しだけ待て。黙っていれば何れわかる」
「そういうこった。そんなでは理解できるものもできなくなるぞ」

確かにそうだ。
多少落ち着いたが、今一度大きく深呼吸をする。
空気を全て吐き出すのと、樫の扉が開くのはどちらが早かっただろう。
入ってきたのは三十歳ほどに見える青年だった。
肩まで伸ばした鋭い金色の髪から額の銀鎖が覗き、透明度の高い湖のような澄んだ水色の瞳が整った顔立ちに生気を与えている。
黒を基調とした装飾の少ない機能的な服に身を包み、立ち姿も嫌味なく実に美しい。
恐らくこの人物がヴィッテルスバッハ辺境伯なのだろう。
飾り気がないことを除けば、俺の想像していた貴族像とほとんど違わない。

「どなたがいらしたのかと思えば、クリスティナじゃないか。随分と久し振りだが、また一段と可憐になった」
「あなたは相変わらずだな、ヴィッテルスバッハ卿」
「手厳しいな。今日こそ名前で呼んでくれるかと期待していたのに」
「もう婚約は解消されたのだ、その必要はないだろう。それにこんなことを話しに来たのではない」

……婚約？
既に混乱を通り越し、理解することを半ば諦めて後で聞きなおそうと思っていた俺の耳に飛び込んできた単語。
さらに追い討ちをかけるように辺境伯が言葉を紡ぐ。

「それは残念。ではクリスティナ・エリーザベト・メクレンブルク皇女殿下。貴女は私に何を望むのですか」

第九話　その女、危険につき

人間とは、混乱していても重要な案件であれば理解できるものらしい。
理解と言うと偉そうに聞こえるが、つまりは現状確認に過ぎない。
目の前の男が放った見えざる矢は俺を一瞬の自失に追いやったが、それが逆に、僅かではあるが冷静さを取り戻す契機にもなったようだ。

会談の中でわかったことがいくつかある。
クリスが皇女であること。
三年前に出奔して行方不明になっていたこと。
それがヴィッテルスバッハ辺境伯によって手引きされていたこと。
名を隠し、信頼に足るものを集めるために野に下ったこと。
確かにクリスの言動は庶民のそれではなかったが、せいぜい役人や下級貴族の娘程度だろうと思っていた俺には衝撃的な事実だった。
衝撃と言えばまだ存在する。
俺たちはひとまず辺境伯の所有する軍に編入されること。
主に新兵ではあるが千五百人を配下として加えること。
その部隊は連隊として大佐待遇のクリスに全権が委任されること。
第一大隊隊長としてスヴェンが、副官として俺が、それぞれ中佐相当官となること。
大まかに打ち合わせを終えると、雑務があるので申し訳ないが、とヴィッテルスバッハ卿は席を辞した。

それぞれ個室を用意されたが、スヴェンは皆を兵舎へ誘導するために町に戻った。
クリスは別のフロアの部屋をあてがわれたし、城内で迷子になるのも馬鹿らしいので、俺はこれからのことについて一人で考えることにした。
どうやらヴィッテルスバッハ卿は信用しても問題はなさそうだ。
少し軽薄な感じはするが、意図的にそう振舞っているようにも見えた。
それにしても、と椅子に座ったまま軽く伸びをする。
俺たちを公式に所属させるとは思わなかった。
万事うまく事が進んだとしても、多少戦力の補強をする程度で独立した遊撃部隊として扱うと踏んでいた。
万が一俺たちの存在が露見しても切り捨てやすいようにしておくだろうと考えていたのだが、或いは皇女のいる部隊をぞんざいに扱うわけにはいかないから、というだけかもしれない。
皇女。
盛大な家出をしたものだ、とは思うが、ではその家出の理由はといえば、未ださっぱりわからない。
クリスからしてみれば父親を倒そうとしているわけで、生半可な理由であるはずもない。

「イトウ様、いらっしゃいますか」

控えめなノックの後に何となく聞き覚えのある声が続く。
居留守を使う意味も目的もないので、扉を開いた。
磨いた銅のような瞳と、同じ色の髪を肩で揃えた知的な雰囲気を持つ女性が、俺を確認して一礼する。

「ああ、さっき案内してくれた……」
「ベアトリクス・ヤケヴォと申します。ヴィッテルスバッハ卿の主

席秘書官を務めさせていただいております」
「ヤケヴォさん、俺に何か？」
「クリスティナ様がお待ちです。それと、わたくしのことはどうぞベッテとお呼び下さい」
「クリスが？　ええと、ベッテ、どこに行けばいいのかな」
「ご案内いたしますわ」

少しだけ笑顔を覗かせ、先に立って歩き出す。
無理なく背筋を伸ばして歩く姿は、クリスとは違う種類の凛々しさを感じる。
そういえばクリスと親しげに話をしていたようだったが……。

「ベッテ、クリスとは知り合いのようだったけど」
「はい、クリスティナ様がご幼少の頃、お世話係と遊び相手を拝命しておりました」
「皇族の世話係って、それなら君も貴族じゃないのか。俺なんかが愛称で呼んでしまっていいのかな」
「貴族と言ってもヤケヴォ家は傍流ですから。イトウ様はクリスティナ様を愛称で呼んでおられますし、対外的にも私をそう呼んで問題ないご身分をお持ちになりましたわ」
「参ったな……。じゃあベッテも、俺のことはレイジでお願いするよ」
「かしこまりました、レイジ様」
「様……は外れないんだね」
「申し訳ございませんが。さあ、こちらです」

何かの紋章が彫り付けられた両開きの扉の前で足が止まる。
ベッテがノックと用件を伝えると、興味のないような声が入室を許可する。
何やらとてつもなく豪奢な部屋だった。

至る所に金銀宝石がちりばめられ、目を開けているのが拷問に思えるほどだ。
その中央のソファの上に、我らが皇女殿下は無作法にも寝そべってあらせられた。

「やっと来たか。ベッテ、ありがとう」
「ありがとう、じゃないわこの馬鹿娘！　せめて城にいる間くらいちゃんとしてなさいよ！」

……ベッテさん？
先程俺が感じていた知的な雰囲気や凛々しさはどこに行ったのだろう。
だらしなく腰紐を緩め、せっかく結い上げられた髪も跡形なく崩してしまっている皇女殿下に詰め寄っている。

「この部屋には誰も近付かないからって緩めすぎよ！」
「いいではないか、今日はもう出歩かないと決めたのだから」
「あたしの言うことが聞けないって言うの？」
「……早急に整えるとしよう」

……子供の頃の力関係というのは意外と年を重ねても変わらないものだ。
そういえば俺も、一歳年上の幼馴染に高校の頃までしっかり頭が上がらなかったことを思い出した。
封印してあったおぞましい記憶が蘇りかけて、嫌な感じの汗が滲んでくる。
クリスも何かトラウマがあるに違いない。
俺はこれまでにない親近感を覚えていた。

「よし、完成。レイジ君、後はよろしくね」

「……ベッテはそれが素？」
「さあ、どうでしょう。レイジ様、クリスティナ様にお手を出してはいけませんよ？」

話している間に表情と態度を一瞬毎に造り替え、最後に物騒なことを言って扉を閉めた。
言われなくても手を出す気などないのだが。
ベッテによって有無を言わさず手早く服装を整えられたクリスが仏頂面で脚を組んでいる。

「さて、ベッテのせいで騒がしくなってしまったが、貴様、私に聞きたいことがあるだろう」
「かなりね」
「私も話すことがあって呼んだのだ。先に私が話したほうがいいと思うが、特に確認しておきたいことはあるか」
「そうだな、昔ベッテに何をされたのかを詳しく……」

怒り。
俺に向けられているクリスの視線は、他に紛うことなきそれだった。
何種類かの感情も微量ながら混入しているようだが、少なくとも今の俺に詮索する余裕があるようには思えなかった。
恐らくその怒りによってだろう、顔を紅潮させたクリスが小刻みに震えながら声を絞り出す。

「ベッテに何か聞いたのか」
「昔クリスの世話係兼遊び相手だった、くらいしか聞いていないよ」
「……本当だな？」
「いるかどうかは知らないけど、神に誓って」
「もしそれが嘘であったならば思い付く限りの処刑法を試してやる

からな」
「御意」
……処刑法は一つ試したら終わりなんだが、黙っておこう。
しばらく深呼吸を続けた後、ゆっくりと、だが明確に、言葉を紡ぎ始めた。

第十話　クリスティナ

国のため。
民衆のため。
皇帝の娘として、父の非道を看過するわけにはいかない。
一人の人間として、強者の悪逆を容認するわけにはいかない。
例えそれが、虚飾で塗り固めた個人的な感情に起因するものだとしても。

母は第二后妃エリーザベト・オクセンシェルナ。
二人目の后妃の、二人目の娘として私は生を享けた。
先帝までの時代であれば庶出子としてオクセンシェルナ姓を名乗り、せいぜい政略の道具として使われるぐらいであっただろう。
だが父は、皇帝は、本来ただ一人のみが正妻とされる制度を廃し、複数の女性に后妃の地位を与えた。
それはつまり、私にも嫡出子として帝位継承権が付与されることを意味する。
複数の后妃を立てた理由はわからない。
多くの帝位継承者の中から、より優秀なものを次の皇帝とするためかもしれない。
或いはただ自らの権力を誇示するためだけの手段であったかもしれない。

……今の状況を鑑みれば、前者である可能性は限りなく零に近いが、な。

しかし原因はどうあれ、現在二十一人の后妃と、三十六人もの帝位継承者が存在し、それぞれの皇子、皇女にはその数だけ有力貴族の後ろ盾が付いている。

後々皇帝になるかもしれない者を擁立し、要職を、あわよくば摂政として国を支配することを夢見ているわけだ。

第一皇子が最有力候補なのは間違いないが、より欲の深いものは幼い皇女や愚鈍な皇子を傀儡として操ることに精力を傾けた。

宮廷は陰謀が跋扈し、腹を探りながらも誰を陥れるか、という雑談が社交的な会話の大半を占めるようになる。

私は幸い、オクセンシェルナ家と縁があり、権力に固執しないヴィッテルスバッハ卿の支援を受けることになった。

優しく穏やかな母と姉とともに比較的自由に、派閥争いとは遠いところで生活していたが、成長するに従って周囲は姉や私を危険視するようになる。

権力闘争からは退いて傍観していたために路傍の石とされてきたが、ヴィッテルスバッハは大貴族といっても差し支えない有力な家でもあるし、何より問題とされたのは継承権の順列だ。

第二后妃から生まれたのは二人とも女児であったが、姉は第三帝位継承者であり、私自身も第八位という、順列で可能性が左右されるのであれば特に姉は、かなり帝冠に近い存在と言えるだろう。

過去に公式な女帝はいないが、百年ほど前にウルリカ・エレオノーラが当時五歳の息子ヨハンを帝位に就け、実質的に国事を取り仕

切った例があり、ヨハンが成人するまでの十数年を「女帝の時代」と見る歴史家も多く存在する。
ウルリカには正式な夫がおらず、ヨハンの帝位継承についても正統性が疑われたが、ヨハンの父とされるプファルツ卿の政治力によって疑惑は沈静化された。
プファルツ卿自身は候から公へ爵位を上げ、宰相としてウルリカとヨハンをよく補佐した。

そうした前例もあることから、当時十二歳だった姉ルクレティア・エリーザベト・メクレンブルクの元には数多の結婚希望者が訪問してくるようになる。
皆名だたる大貴族の子弟であったが、目的が姉との結婚ではなく、帝位継承権と結婚するためであることは、隠すほど滑稽に見える事実であった。
肩書きありきの婚姻を由としない姉は、結婚する場合は帝位継承権を放棄する旨を公表した。
するとそれまで美辞麗句の洪水をもって姉を靡(なび)かせようと必死だった貴族たちが、思わず笑ってしまうほどにあっさりと音信を途絶えさせたのだ。

私は心の中で嘲笑した。
身分や役職がそれほどまでに欲しいのかと。
同時に疑念も生まれた。
人はそれほどまでに、身分や役職がなければ生きられないのだろうかと。
着るものも食べるものも住むところもある。
母の意向でそれらは皇族にしてはかなり質素なものだったが、不

満を感じたことはなかった。
今思えばそれも贅沢なものではあったが、少なくとも周囲にいた貴族たちも、同様に生活に不足があるようには見えなかった。
では我らに傅(かしず)いて生きているという平民はどうなのだろう。
その疑問はすぐに解決した。
無理を言って世話係だったベッテを伴い、城を抜け出したからだ。

そこは想像していたものとは違い、あまりにもひどいものだった。
人々の目には活力がなく、動きは緩慢としている。
道端に寝ているものや、商店の品物をくすねようとして鞭打たれているものもいる。
服装も一枚の布を被って、腰紐で縛っているようなものが多く見かけられた。
私には本で読んだ地獄のようにしか思えなかった。
それは全て先帝が、私の祖父が亡くなってからのことだと知らされ、愕然とする。
ただいくつかの石が詰まれた城壁の外に広がっていた世界は、幼なかった私に少なくない衝撃をもたらした。

以後、警備の目を盗んではベッテを連れて町に出ることが多くなった。
幼いながらも何か自分にできることをしなければ、と思ったのだ。
余分に食事を作らせて布袋に詰め込み、汚れが落ちにくくなると捨てられる服も持てるだけ持って、路地裏で配って回った。
不審な目で見ていたものもいたが、何となく皆も私の素性に気付いていたのだろう。
しかし何度もそうしていると、気を許してくれた子供たちが私を友達だと言ってくれた。
今まで生きてきて、これほどに嬉しいと思ったことはなかった。

そんなことを一年ほど続けただろうか。
ある日、私と母は父に呼び出された。
何事だろうと指定された広場に向かい、そこで目に飛び込んできたあまりの光景に言葉を失った。

私と仲良くなったものたち、私を友達だと言ってくれたものたちが、首から下を失くした姿で、そこにいた。

立っていることさえ困難なほどに視界が揺さぶられ、涙と鼻水と胃の中のものが溢れて止まらなかった。
母が私の名を呼び続けていた気がしたが、ほどなく意識は闇に沈んだ。

薄い青地に銀で縁取りされている紗で囲まれた、自分のベッドの上で目を覚ました。
目と喉の奥が痛かった。
どれほどの時間寝ていたのか、頭の中も靄がかかったようにすっきりしない。
徐々に意識がはっきりしてくると、記憶の中の映像が鮮明に蘇ってきた。
友達が死んだ。
殺された。
父によって。
皇帝によって。
虚脱感と怒りが体の中で膨れ上がり、皮膚を食い破ろうとしているかのような熱を感じた。
枕に顔を押し付けて漏れそうになる嗚咽を食い縛り、体が暴れないように手で足を抱え込んで蹲(うずくま)る。
私が彼らを助けたからか。

皇帝の財産のほんの僅かを掠め取ったからか。
ならば何故私を罰さない！
死なねばならないとしたら私ではないか……。

ふと気付いた。
私に罰がないわけがない。
あの父が、あの男が、あの皇帝が、彼らを殺して私を苛（さいな）ませるだけで済むわけがない。
涙も拭かずに部屋を飛び出し、ノックもせずに母の寝室の扉を開く。
そこには姉がいた。
ベッドに顔を伏せ、泣いている。
私に気付いた姉は無理に笑おうとして失敗し、再び泣き崩れる。
まさか。
その想像は音に気付いてやってきたベッテによって、現実であることを伝えられた。

母は、私の身代わりとして死を賜った。
私の、そして姉の変わらない日々を守るために。

もう泣くことしかできなくなっていたが、ベッテから母の遺言を渡された。
綺麗な母の字で、私へ宛てた文章が連ねられている。

「愛しい娘クリスティナ」
「私は、あなたをとても誇りに思います」
「貧しい人々を助けたいと思うのは簡単ですが、実際にできる人は多くはないのですから」
「だから今回は、私があなたを助けます」
「もっと世の中を知って、多くの人に会って、より多くの人を助け

てあげなさい」
「あなたは優しい子だから、きっと皆に愛されることでしょう」
「でも、無理はしないで。ちゃんと体に気を付けるんですよ」
「一緒にいられなくなってごめんね」
「……エリーザベト」

私は、姉と、ベッテと、三人で抱き合いながら、疲れ果てて眠ってしまうまで泣いた。

第十一話　誓いの言葉

「……そしてその後、ほどなくして私は城を出た。母の望みとは違った形になってしまうのだろうが、もはや根底から覆さねばならないと、私は感じたのだ」

俺は何度目かの息を飲み込んだ。
十六歳の少女が背負うには、この話は重すぎる。
よくもこれほど気丈に振舞えるものだ。
いや、だからこそ、なのかもしれない。
そうであるとしたら、聞いておかねばならないことがあるように思えた。

「目的は復讐、ということになるのかな」

一通りを話し終え、達成感にも似た感慨を手に持ったグラスの中で回していた少女は、動きはそのままに節目がちにした目を俺に向ける。

「……それがないと言えば嘘になる。だが」

立ち上がり、窓に向かって歩いていく。
硝子で隔てられた向こう側では闇が鈍重な帳を下ろしているが、その隙間からは人が存在していることを証明するように、あちこちから光が漏れている。

「何よりも私は、これ以上私の、母の、友人たちのような思いを作りたくない。こんな思いをする人がいない国を作りたい」
「ああ」

張り詰めていたものが、俺に話したことによって一時的に緩んでいるのだろう。
その声は普段の凛々しさからは想像もつかないほど、年齢相応の少女が独り暗闇で怯えているような印象で耳に伝わってくる。
語を継げば継ぐほど、その傾向は強くなっていく。

「しかし、そのために戦うのは許されるのだろうか。希望を掴むために流れる血は、私を許してくれるのだろうか」

後半は言葉なのか嗚咽なのか判然としない。
窓を飾るために取り付けられているカーテンに縋り、必死に座り込むまいと肩を震わせている。
平和のために戦う、というのは確かに矛盾しているが、戦わないことで事態が好転するというのは極めて事例が少ない。
しかし戦争となれば、普通は「いかに効率よく人を殺すか」を最優先に考えて行うものだ。
その事実は、まだ十六歳の少女には耐え難い残酷に違いない。
こういう時にどうすればいいのか、知識では知っていても、実際行動できるかと言うと、これが難しい。
戸惑いながらも、中途半端にクリスの隣まで歩を進め、外を眺めるようにして足を止めた。

「……気の利かない奴だな」
「結構頑張ってるんだけど」
「ならば貴様は今からただの人形だ、いいな」

「仰せのままに」

俯いたままカーテンから俺の背中へと縋る対象を変更し、思った以上に軽い体重の殆どを預けてくる。

俺は今、人形だ。

だから背中が熱く濡れたとしても、激しく空気を振動させる音が聞こえたとしても、少女を抱き締めるわけにはいかない。

それは俺がこの世界に来て決めた、唯一のルールを遵守するためでもあった。

もっと短かったかもしれないが、俺の感覚では一時間ほどが過ぎたころ、突然背中の存在感が弱くなった。

「クリス？」

反射的に、倒れ込む体の下に腕を差し入れて床との抱擁を回避させる。

もしかしたら今まで生きてきた中で最速の動きだったかもしれない。

どうやら眠ってしまったようだ。

そのまま抱き上げ、寝室らしい扉を開く。

「……」

「……ベッテ？」

「……何でしょう、レイジ様」

思った通りそこは寝室だったが、何故かそこには澄ました顔で立

つ首席秘書官の姿があった。
何事もなかったかのような表情で立っているが、それが何とも不自然である。

「いつからそこに？」
「はい、処刑法の話あたりからでございます」

……最初からですね。
というかどこから入ったのですか。
皇族専用の貴賓室の、最も奥まった位置にある寝室ですよ。
色々気になることはあるが、とりあえずは後回しにするとしよう。

「……クリスをベッドに寝かせてくれ」
「では着替えもいたしますので、わたくしにお任せください」
「頼むよ」
「レイジ君がやりたかった？」
「勘弁してください」

悪戯好きな子猫のような目を逃れ、後ろ手に扉を締める。
背中がマラソンを走り切った後のように濡れていて、椅子に座ることはできそうにない。
しばらくそのまま待っていると、思ったよりは早くベッテが出てきた。
いつの間にか出て行かれていたらどうしようかと思ったが。

「お茶を淹れますね」
「いや、いいよ」
「あたしが飲みたいの」
「……頼むからどちらかで統一してください」
「そう？　こうやってレイジ君をからか……戸惑わせるのも楽しい

んだけど」

一瞬本音が垣間見えたが、実は言い直してもさして変わっているわけではない。

恐ろしいほど優雅な手つきで紅茶を淹れ、テーブルに二組のカップが用意される。

詳しくは知らない俺にでも、その洗練された動きによって味や香りまでもが保証されているように思えた。

「君は何でも出来るんだね」

「でも、まだ一人で国を滅ぼしたりは出来ないのよ」

冗談には聞こえないあたり、どうやらこの美しい首席秘書官は相当な危険人物のようだ。

背中が濡れているからと固辞していたが、問答無用の態で椅子に押し付けられる。

「どうせこの部屋はクリスしか使わないもの」

「どうして？」

「ヴィッテルスバッハはクリスの家出の件で責任を取らされて公から辺境伯に格下げされたんだけど、体面とか気にする皇族はそういうところには足を運ばないものよ」

最初からそれも計算の内だったらしい。

主流から切り離され、首都から離れた土地で力を蓄えるために。

距離があれば正確な情報も伝わりにくいし、陰謀を巡らせるのもやりやすい。

既に周辺の地域は水面下で手を組み、反旗を翻す時期を計っているという。

二杯目の紅茶には少しだけブランデーが垂らされた。

「まあそれは、もう少し先の話ね」
「飾り物の皇女でないことを証明してから？」
「そういうこと。だからまだしばらくは皇女だということは内緒ね」

薄々気付いてはいたが、なるほど、だから三人だったわけだ。
ヒューゴが口外するとも思えないが、危険は少なければ少ないほどいい。
それにしても。

「何故俺には教えたんだろう」
「女はね、優秀な男を先物買いすることがあるの」
「本当にそうなれればいいけどね」
「あの子の人を見る目は確かよ。少なくても、その歳で中佐なんて貴族以外では有り得ないのよ」
「貰った地位に意味なんてないさ」
「意味なんて後から誰かが考えるわ」

ベッテはアルコールに弱いのか、顔に薄く赤みが刺し、目は慌しく焦点を合わせ直している。
だが、その言葉は正しいのかもしれない。
行動の意味や理由は後世の歴史家たちが上手く解説してくれるだろう。
ただ裏付けられた実績もないのに不相応な責任を負うというのは、正式な任官ではないが、善良な日本国民だった俺には正直荷が重い。
そんな俺の表情を察したのか、ベッテがことさら軽い様子で言う。

「小難しいことなんてやってから悩めばいいのよ。今はあなたにできることをするだけでしょう？」
「……そうだね。俺にできることは多くはないけど」

「その調子よ！　あの子が選んだ人だもの、絶対大丈夫！」

俺も少し酔っているのだろう。

先刻のクリスの話のせいもあるが、ベッテの調子に引き摺られて、より大胆な言葉を繋いでしまった。

「命に代えてもクリスを守るって、誓うよ」

第十二話　休暇は終わりぬ

山腹に残っていた雪もすっかり姿を消し、気の早い木々は先を争うように蕾を綻ばせている。
ヴィッテルスバッハ辺境伯領に辿り着いてからひと月ほどが、慌しく流れていた。

俺とクリスは隊の編成と、兵站も含めた演習の合間に主な士官たちと幾度か会合を持った。
一応簡単な顔合わせはしていたが、人となりを知っておくのは決して無駄になることではない。
意思の疎通と目的の統一を主眼に置いたものではあったが、成果は想像以上だったと言えるだろう。
特に第二、第三大隊を指揮することになる二人は、クリスと並ぶと祖父と孫娘にも見えるほどだが、常に先陣に立つことによって武名を馳せた有能な人物で、戦功を立てる機会さえあったなら既に将官になっていてもおかしくはない。
平民の出であるために出世が遅れてしまったが、皮肉にもそれで俺たちの隊に来てくれたのは幸運だった。
後日、俺はそのうちの一人、アンデルス・クリングヴァル中佐と会話する機会があったのだが、彼は儀礼的な挨拶の後にこう言った。

「大佐殿は若いが、それも軍人にしてはの話。もう結婚していてもおかしくない年齢なのに、危険を承知で国を良くしようと努力なさっている。たとえ素性がどうであれ、我々はそういう人物にこそ忠

誠を誓うものです」

年の功、とでも言うものか、長く生きれば人を見る目が養われるのだろうか。

薄々クリスの正体に気付いていながらも、先日の会合ではそんな様子をおくびにも出さない老獪さは見事と言う他ない。

確かに大多数の平民からすれば、皇族は敵以外の何者でもない。

それでもクリスならば、と期待を込めて忠誠を約束してくれたのだろう。

そのことを伝えると、忠誠に応えられる上官にならねばならないな、と決意を新たにしたようだった。

仕事の量からすれば、俺のそれはクリスに比べて圧倒的に多い。

何故ならば、敬愛すべき姫殿下が雑用のほとんどを俺に押しつけあそばしているからに他ならない。

それが副官の役目だと言えば確かにそうなのだが、何か度を越して嫌がらせにも思えてしまうのは俺の器の小ささ故なのか。

最近気付いたのだがこのところ目も合わせようとしないし、仕事が終わると逃げるように部屋に戻ってしまう。

人の感情は些細なことで変化するものだから、気付かないところで不快な思いをさせたのかもしれない。

普段話している感じは変わらないのに、本当に女性というのは恐ろしい。

「というわけで、恐ろしい女性の代表である君に相談したいんだ」

「それが人に相談する態度なのかしらレイジ君？」

「……何を考えているかわからない女性の代表である君に相談した

いんだ」
「その言い直しには悪意しか感じられないけど、頼られたら悪い気もしないのよね」
「助かるよ」
「じゃあ今度ニホン料理ね」

厨房を借りて何度か料理をしたことがあった。
やはり日本人は味噌汁が飲みたくなるものである。
別段日本に居た時には必要としなかったが、それがないとなるとどこか寂しく感じたのだ。
幸い市場で味噌と醤油によく似た調味料が売られていたので、味噌汁はもちろん味噌と醤油が使えそうなものは思いつくままに調理した。
これでも料理の腕はなかなかのものだと自負している。
もともと料理は好きだったし、六年間の一人暮らしは書籍代に消える生活費を補うためにほとんど自炊だった。
気が付くと所狭しと並べられていたはずの料理が、テーブルを囲む数人によってあらかた消化されてしまっていた。
興味深げに味を確かめながら食べているクリス。
とにかく美味いなら問題ないとばかりにスヴェン。
濃いだの薄いだの文句を言いながらも止まらないヒューゴ。
何やらご満悦な様子で腹部を撫で回すベッテ。
珍しいものが食べられると聞いてやってきたヴィッテルスバッハ卿。
何故かご相伴に預かっている料理人や給仕たち。
結局、毎回俺は残った味噌汁しか飲めなかったのだが、日本の料理が異国の土地で受け入れられたことについては素直に喜んだ。

「生の魚って食べられるかな」
「え？　魚を生で食べるの？」

「刺身って言って、生の切り身を醤油につけて食べるんだ。外国の人の中には苦手な人も多いけど、もし新鮮な魚が手に入ったら必ず食べさせてあげるよ」
「ショーユで煮たのも美味しかったものね。楽しみにしてるわ」
「それは約束するけど、帰ろうとしないでくれないかな」
「あら、ちゃっかり忘れてた」

ちゃっかりですか。
そんな悪戯が露見したときの子猫のような顔をされても騙されませんよ。

「でもそれはね、嫌ってるわけではないのよ、きっと」
「邪魔者扱いとか」
「まあ……それに近いと言えば近いけど、どちらかと言うと好意的な邪魔者扱いだわね」
「さっぱりわからん」
「わからないならそれでいいの。とにかく、もう少しすれば普通になるわよ」
「そんなおざなりで料理をせしめる気なのか」

すると仕方ないな、といった態で溜息を吐き、いくらか真面目な表情になって俺を見た。

「……レイジ君、女の子と付き合ったことある？」
「はあ？　何を急に」
「いいから答えて」

そんなことが何か関係あるのだろうか。
しかし相談している身としては悲しいかな、答えないわけにもいかないだろう。

「まあ、それなりに」
「全部振られて終わってるわよね」
「余計なお世話だ」
「要するにそういうことよ。一応クリスのほうは私がどうにかしてみるから、後は任せるわ」
「いや、ちょっと待て……」

俺の視界には軽やかな足取りで去って行くベッテの後ろ姿が残されている。
明確な解の出ないまま放置されたが、どうやらベッテには確信めいたものがあるようだ。
それを信用するならば、ひとまず静観する、というのが現時点での最上策であるように思われた。

ある日、俺はサロンでスヴェン、クリングヴァル中佐、もう一人の大隊長フェーンストレム中佐、連隊直属の中隊長に任命されたヒューゴと共に隊の運用について協議していた。
既に数回の演習で基本的な事項は押さえてあるが、いかんせん半数以上が新兵であることは不安材料と言える。
できれば実戦経験を積ませたいところだ。
しかしそう安易に軍事行動を起こすわけにもいかない。
幸か不幸か近隣では目立った反乱勢力がないため、中央からの討伐指令が来ることもない。
そもそも、周辺の反乱勢力の首魁が同胞を討ちに行くというのは馬鹿げたことではないか。
先のことを考えれば、実戦経験の有無は重要なウエイトを占めて

くる。
中世以前の戦争では新兵の二分の一が初陣で戦死し、さらに生き残った兵の三分の一は二度目で戦死したと言う。
もしそうなるならば俺たちの隊は実質半個連隊という、かなり厳しい状態になってしまう。

どうにかそれを打開できる手段は無いか、と頭を捻っていると、クリスがやってきた。
表情を隠してはいるが、それは余計に緊張感を高める結果になっている。

「大佐、どうかなさいましたか」

正規の両中佐は椅子から立ち上がり敬礼しつつ訊ねる。
慌てて俺たちもそれに倣う。
芸術的にさえ思える完璧な答礼の後、一瞬だけ俺を見て目の奥の色が変わった気がした。

「座ったままでいい」

日本人ならそう言われると座れないものだが、ここでは上官に逆らってまで立っているほうがいいのか、となるらしい。
皆着席し、白を基調として縁を銀であしらった士官用の軍服を着た少女が口を開くのを待つ。

「数日のうちに出兵することになるだろう。そのつもりで準備してくれ」
「まさか……」
「先程ヴィッテルスバッハ卿宛に皇帝から出頭命令が届いた。いくら無実を主張したところで行けば殺されるだけだ」

「疑わしきは罰せよ、ということですか」
「時期尚早ではあるが、こうなった以上雌伏していられる状況ではない」
「いたしかたありませんな。向こうもおとなしく出てくるとは思っておりますまい」
「先鋒はアルヴェーン伯だ。最初から出てくることなど考えてはいないようだな」
「了解しました。万事整えておきましょう」
「頼む。では私はこれから作戦本部に行かねばならないのでな」

そう言うと踵を返して出口に向かった。
そこでも慌てて敬礼をとっていると、クリスは振り向かないまま足を止めた。

「副官が来ないでどうする気なのだ」
「あ……」
「行くぞ！」

後になって思えば、これは彼女なりの和解のサインだったのかもしれない。

第十三話　作戦会議

フレゼリク・ベイセル・ゴトフリート・ヴィッテルスバッハ。
ヴィッテルスバッハ家の現当主にして辺境伯領主であり、軍務においては第四辺境方面軍司令官、階級は大将である。
独身で、年齢は数えで二十九歳。
軽薄な言動とは裏腹に政務、軍務ともに優秀で、その気になりさえすれば中央で要職に就くことも決して不可能ではない。
金色の髪と水色の瞳で飾る容姿は端々しく麗らかで、例えるなら高貴に咲き誇る紫陽花のよう。
こよなく女性を愛し、周囲は愛でられるのを期待する花々で埋め尽くされているが、一切浮ついた噂が流れないことから、実は男色家であることを悟らせないためのカムフラージュではないかとも言われている。

というのがクリスやベッテから聞いたヴィッテルスバッハ卿の情報をまとめたものだ。
どの情報がどちらから出たのか一目瞭然だが、きっと紫陽花に例えたのは何か裏があるのだろう。

その紫陽花の君は珍しく難しい表情で会議室の天井を見つめていた。

「……アッテルベリ大佐が囮として敵に陽動を仕掛ける、と？」
「もともと我々はそういう戦い方をしてきましたから、そういった

作戦行動には慣れています。被害を最小限に抑えるためにも、慣れた者が指揮を執るのは当然と思いますが」
「確かに戦力差からすれば陽動からの奇襲は常套と言える。しかし例え指揮官が慣れていたとしても、新兵が多い隊ではそれが満足に機能するかは未知数ではないか」
「新兵が多いからこそ、仮に全滅しても大きな損害にはなりません。それに主力に新兵がいることのほうが不安要素になるでしょう」
「それはそうだが……」

本来ならば皇女であり、後々は盟主となるであろうクリスを前線には出したくないのだろう。
もし彼女が戦死などしたら計画そのものが頓挫してしまう。
だがそれを知らされていない将兵の手前、一仕官の提案する上策を無下にするわけにもいかない。
恐らくクリスはそこまで計算に入れて発言しているのだろうが、ヴィッテルスバッハ卿の心中を察するには余りある。
俺としてもできることならば危険なことはさせたくないのだが、こうと決めればおいそれと枉げることがないのも事実だ。

それに一応、俺たちの連隊ではこうした戦局に対応するための演習を主にしてきた。
できるだけ早いうちに軍事的な成果を達成するために、前線での高機動運用を重視した編成を組んだのだ。
囮に専念するならば人的被害も極小で済むだろうとの思惑もある。
「閣下には閣下に、私には私に適した仕事というのがあります」
「……わかった。任せよう」

ついに観念したのか、大きく空気を吐き出してから提案を受諾した。

そもそも俺よりも付き合いが長いはずだ、これ以上の論議は無益と悟ったのだろう。

「では陽動作戦の細部を詰めたい。意見のあるものはいるか」

俺たちとっては今回も寡兵での戦となるが、本来兵法の第一は敵よりも多くの兵力を揃えることにある。

少数で多数を打ち負かすのは劇的な英雄譚に不可欠な要素ではあるが、本道からは外れているのだ。

それはつまり勝利の可能性が著しく低いことを意味する。

皇国軍の先鋒を担うアルヴェーン伯の兵力は三万五千、そのうちの五割が重装歩兵、三割が軽装歩兵、残る二割は騎兵である。

オーソドックスな陣容ではあるが、効果的だからこそのオーソドックスと言えるだろう。

対するこちらは一万七千、騎兵が半数以上を占め、残りは軽装歩兵と重装歩兵が六対四といったところだ。

機動力を重視した編成であるが、丘陵地帯の踏破性を考えれば必然なのかもしれない。

およそ二倍の敵と相対することになるわけだが、この状況で必勝を期さねばならないという重圧から、誰もが閉じたまま唇を動かそうとしない。

しかも「先鋒」と言うからには後続が存在するのが道理である。

当然、それ以前に先鋒で終わる可能性もあるのだが、次鋒以降の対応、つまりはいかに戦力を保ったままで勝利するか、までを考えて策を練らなくてはならないのだ。

「やはり難しいか……。時間的な猶予は多くはないが、昼食の時間も過ぎていることでもあるし、一旦休憩としよう」

日が暮れる時間に再開することにして、それぞれが一様に重い表情のまま作戦本部を後にした。

「満足に戦力が整っていないのは仕方ない。慎重に事を進めるために一極集中を避けていたからな、結果論ではあるがそれが裏目に出た」
「本当なら周辺の勢力も糾合してから行動を起こす予定だったからね」
「恐らく戦場は丘陵地帯か平野になるだろうから、奇襲といっても難しいな」

それはそうだ。
四方を見渡せる状態では奇襲は成功しない。
山や川、森といった障害物がなければ兵を伏せておくことができないのだから。

「俺の世界で二千五百年ぐらい昔の人がね、正攻法は負け難いが勝つためには奇襲が要る、と言ってたんだ」
「力押し同士では消耗戦になるということか」
「多分ね。奇襲というのは戦局を有利に変える手段のことだと思う」
「何も奇襲は伏兵に限らない、と？」
「それができれば一番なんだろうけどね」

俺が引用したのは孫子の一節だが、この解釈が正しいかどうかはわからない。
孫子という兵法書を著したのは紀元前五百年ごろの中国の思想家

である孫武だが、彼は基本的に戦争を否定しながらも、戦争のための戦略、戦術を初めて真剣に構築した人物だと言われている。
中国でのそれ以前の戦争は、勝敗の帰結は天運に左右されるものと考えられていたらしい。
現在よく知られる「敵を知り己を知れば百戦危うからず」「風林火山」「戦わずして勝つ」などは孫武の言である。
とにかく、今は記憶を手繰って先人の知恵を拝借できないかを考慮するべきだ。

「この辺りの地図ってあるかな」
「執務室にあったと思うが……。何か思いついたのか？」
「それはこれからだよ」

期待を込めた問いをはぐらかされて落胆の仮面を張り付かせるが、まだ確実でないことで喜ばせるのは不遇であるし、確たる自信があるわけでもない。
しかし言葉とは裏腹に、俺には一条の希望が差し込んだように感じていた。

地形を把握してそれを有効に活用すること。
情報こそが最大の生命線であること。

それらを十全に活かすことができるならば、自ずと勝機を見出すこともできるはずだ。
執務室ではクリスが呆れるほどの時間を費やして地図を睨み付け、町に出ては周辺の出身者を尋ね歩いて地理の確認と情報を集めた。
今までの人生で、ここまで精力的に何かを成そうとしたのは記憶にないかもしれない。

心地よいを通り越した疲労が、町の中央通りに置かれているベンチに座った俺にのしかかっている。
隣にいるクリスも俺に付き合って結構な距離を移動していたはずだが、まるでそんな様子は伺えない。
ここ数年で落ちた体力を取り戻すにはまだ暫くかかりそうだ。

「君は、どうしても勝ちたいのか？」
「何をいまさら」
「今回は勝てても次は負けるかもしれない」
「……次も勝たせてくれるんだろう？」

山際にさしかかった太陽の赤とオレンジが交互に重なりあったような光が、ほんの少しだけ笑い合っている俺たちを同じ色に染めていた。

第十四話　茶番劇と紅茶

「机上の空論だ！」

茜の残滓もとうに姿を消し、黒天鵞絨に宝石を散りばめたような空が大地を見下ろしている。

本来であれば大地はその柔らかな手触りに身を委ねて眠りにつくはずであるが、ささやかではあるものの自然界には存在しないはずの光が溢れ、ヒトという種族は傲慢にも安らかであるべき寝所を土足で蹂躙していた。

自然の摂理を歪めている者たちの一握りが、石造りの部屋の中で決して和やかではない様相を呈している。

ヒトと自称する生物が便宜的に名付けた呼称を使うとすれば、そこはアヴェストリア皇国ヴィッテルスバッハ辺境伯領、シュトルーヴェ城内の作戦本部会議室という。

そこには俺、伊藤玲司も存在する。

しかも現在のただならぬ雰囲気を作り出した張本人といってもいいだろう。

尤も、矢面に立っているのは俺ではなく、上司たるクリスティナ・アッテルベリ大佐なのだが。

彼女は俺の立案した作戦の是非を問うため、舌戦を展開させている。

それは年長者として、男として、歳若い彼女に代弁させていると

いうのは心苦しいことでもあった。
だが所詮おまけの副官として同席している以上、上官を差し置いて意見を述べるわけにもいかない。
少なくとも、今のところは。

「机上の空論とおっしゃいますが、何もせずに成果が出ることはありません」
「そのような作戦、前例がないではないか」

先程から執拗に常識論を振りかざしているのは古参の准将で、ベッテ曰く「頭の固いエセインテリジジイ」だそうだ。
その評が正しいのかどうかは個人の主観によるが、俺は全面的に賛同しようと思う。
前例とは作られなければならないものだ。
誰かがこれまでにない事柄を成したとき、それが前例となる。
それが偉業か愚行かは別の話だが。

「前例がなければ我々で作ればよいだけです。既存の作戦で多数を打ち破ることなど適いましょうか」
「やってみてできませんでした、では済まないのだよ、大佐」
「もちろん心得ています。私はこの作戦が最も成功率が高く、最も効果的であると考えています」

准将の言葉には小娘は大人しくしていろ、という揶揄も込められていたが、表向きは意に介しなかった。
最後は准将にではなく、最終的な決定権を持つ人物に向けられたものだ。
部下たちの議論を止めることなく傍観していたヴィッテルスバッハ卿が、今回始めて口を開く。

「その根拠は？」
「はい、それは……」
クリスは俺を一瞥して姿勢を正す。
「アルヴェーン伯軍の戦意が非常に高いからです」
「……私の見解とは逆だね。敵の戦意が高ければ成功し難いと思うのだが、できればもう少し詳しく説明してもらえるとありがたい」
クリスは先刻の俺との会話を、立場を入れ替えてそのまま再現した。
何故敵の戦意の高さが有利となり得るのか。
囮の意味と行動経路の理由。
本隊の役割と目的、その際の戦術的な利点。
総合的な戦略価値と戦後における行動選択の多様性。
簡潔に、だが明確にそれらを説明する。
ただ、これだけでは不完全だ。
この作戦に必要にして不可欠なのは、あと二つの案件をクリアすることにある。
「いくつか問題点もあります」
「問題とは？」
「この作戦においては何よりも連動のための情報伝達が重要な点。そして常に高速移動を強いられる兵の疲労、およびそれに伴う突破力の低下が懸念されることです」
「仮に全てが成功するならば勝利は容易いものとなるだろうが、その問題さえ無くなれば成功するものか」
「私はそう確信しております、閣下」

「うむ……」

俺には情報の伝達に当てがある。

複雑なことを伝えるわけではないため、単純なもので十分なのだ。

それがこちらの世界では使われていないことも確認してあった。

最大の問題は、移動で体力を奪われて攻撃力が下がってしまっては本末転倒であるということだが……。

「後者については問題にならないだろう。我が軍の騎兵は皇国一の精強を自負しているからな、一日や二日の全速行軍で音を上げるものはいまい」

それはこの部屋にいるものにとっては共通の認識でもある。

若干の誇張があるにしても、そういう矜持を持っているものが自ら不可能を宣言するはずはない。

つまり俺にしてみれば、問題など最初から無かったのだ。

実はこの会議自体にあまり意味がないとも言える。

何故ならば、ヴィッテルスバッハ卿がクリスの作戦を採用するのはある程度予定されていることだからだ。

極論を言ってしまえば、事前にこの策をヴィッテルスバッハ卿に伝えればよかっただけのことでもある。

しかし後々は皇女として全軍を統括する立場になるであろうクリスが、飾り物のお姫様ではないことを証明しなければならなかった。

そのために目に見える形で功績を立てるのは急務なのだ。

そういう意味では辺境伯の対応は完璧に近い。

懐疑的な視点から入り、説明には納得し、重箱の隅をつついてはさらに明快な答えを引き出す。

茶番ではあるが、頭の固い者を黙らせる程度には効果的と言える

だろう。
それも破綻の無い理論あってのものではあるが。
「しかし精強とはいっても、早馬には限界がある」
「それに関しては、私の副官に妙案があると聞いております」
クリスが目配せで俺を促した。
なるべく精悍に振る舞うように意識して立ち上がり、先ずヴィッテルスバッハ卿に、次いで列席する仕官に向けて敬礼を施す。
姓名、階級を名乗り、発言の許可を受ける。
「情報の伝達には狼煙を使いたいと考えているのです」
「ノロシ……とは何だ？」
耳慣れない単語に室内が僅かにざわめく。
「私の故郷に伝わる方法ですが、火を焚き、その煙によって合図とするものです。こちらでは使われていないと聞きましたので、敵にも悟られることはないでしょう」
「なるほど、煙であれば遠く離れていても伝えることができるな」
「天候に左右されるという欠点もあるのですが、この時期は比較的穏やかだと聞いておりますので」
「確かに、このひと月ほどは雨も少なく風も弱い。そのような手段で連絡を取るには絶好といえるだろう。ではそのノロシの準備は任せてもよいな？」
「はい、お任せください」
これで準備は整った。
相手がいることでもあるから確実とは言えないが、後は計画通りに進めるだけだ。

細かい配置や物資の配備などが決められ、月が地平線に落ちかかるころに会議が終わった。

俺とクリスは一旦執務室に戻り、俺がたどたどしい手つきで淹れた紅茶を飲んでいる。
味に関しては触れないでおく。

「ひとまず作戦は何とかなりそうだね」
「ああ、まだ何人か不満そうな奴はいたがな」
「何日か経てば考えも変わってるさ」
「そうだな……。それにしてもいつも貴様には驚かされる」

長い睫毛を半分伏せて、手に持ったカップから立ち上る湯気を見つめている。
そうしていると年齢相応のあどけない少女に戻るようだ。
普段は俺が計り知れないほどの気を張っているのだろう。

「俺は何もしてないよ。昔の人が考えたことを応用してるだけで」
「応用するのも知っていなくてはできないだろう。貴様の世界の人間が皆そうだとは思えないが」
「まあ……多くはないだろうけど」

多くはないだろうな、図書館に就職して一年ちょっとで蔵書の半分以上を読んでしまうような人間は。

「いつか貴様のいた世界の話をゆっくり聞いてみたいものだな」

「ここで役に立つこともあるかもしれないからね」
「そうではない、いや、なくはないが……ええい、いいから話せ、絶対だ！」
「わ、わかったよ。だからそんなに怒らなくても」
「もう寝る！」

見るからに不機嫌な背中が扉を抜ける瞬間、何かを言ったようだったが俺には聞き取れなかった。

第十五話　星に願いを

俺はこちらの世界に来て以来、慢性的な筋肉痛に苛まれている。
それは何故か。
もちろんそれまでの運動不足が祟っているのもあるが、何よりも馬に乗る機会ができたからに他ならない。

こちらでは馬に乗れないとどこにも行けない。
俺の地元、東北地方の田舎町における自動車のようなものだ。
いや、自転車がある分まだマシだろうか。
馬に乗れなければ馬車に乗る、という手段もあるにはあるが、それではあまりにも格好が悪い。
それに戦場に出る軍人がそんなことでは、いい物笑いの種になるだろう。

そういった事情から、アルヴィーカの村を出て以来、開いた時間には馬術の訓練を余儀なくされている。
最初の頃は、馬を触った経験など無く、競馬用のサラブレッドを遠目に見たことがある程度だった俺は、初めて補助輪を外した自転車に乗る子供のような状態だっただろう。
それでも今では訓練と言う名のしごきを経て、ようやく人並み程度には乗れるようになってきたと思う。
熟練者の集団から遅れずに行軍できている点から見ても、それほど大それた自信ではないはずだ。

今、俺たちは本隊から先行して、戦場となる予定地点へと北上していた。
夜明けと共に出立し、明後日の昼ごろには目的地に到着する。
通常の行軍速度であれば、おそらく六日ほどは要するであろう距離だ。
無謀にも思える強行軍だが、当然理由があってのことである。
無謀であるが故に敵はこの行軍速度を考慮しておらず、意表を突いて攻撃できるということ。
陽動が成功すれば、地理的な条件から本隊は有利に戦いを進められるということ。
どちらかだけでも決定的になり得るだけに、両方を兼ね備えるこの土地を選んだのは必然と言えた。

「ヒューゴ、間に合うと思うか」
「今のところ早すぎるくらいだけどな。まあ多分、大丈夫じゃねえか」
「そうか。それはよかったけど、一応回りも気にして敬語使ってくれないかな」
「……なら名前で呼ばないでくれますか、中佐」
「これは失礼した、アスプランド大尉」

ヒューゴ・アスプランド。
銀灰色の髪を首の後ろでひとつにまとめた、やや骨っぽい印象を与える青年の姓名である。
実は形式的に行われた任官式の席上で初めて、ヒューゴの姓を知ることになった。
だがどうやら俺だけでなく、クリスも知らなかったらしい。
既に振られているとはいえ、想い人に本名を知られていなかったのだ。
よほどショックだったのだろう、一週間ほどはまるで死体が歩い

ているかのようだった。

いよいよ明日には目的地が見えてくるという焦燥感も手伝って、日が落ちてもしばらくは進軍をやめなかったが、さすがに今夜ばかりは夜を徹して走るというわけにもいかなかった。

馬を休ませねばならなかったし、いざ戦うとなった時に体調不良では目も当てられない。

兵たちは素早く野営の準備を済ませ、主だったものはクリスのテントに集まっている。

「どうやら予定より早く行けそうだな。兵の様子はどうだ？」

「ニ交代で休むように指示しました。特に混乱や遅れなどは生じておりません」

「よし、では明日の作戦を確認する」

俺たちの最大の目的は敵の動揺を誘い、注意を引き付けることにある。

単純に戦力として三万五千対二千では話にならないが、問題はいかに本隊である一万五千が倍以上の敵を打ち崩せるか、ということだ。

そのための陽動作戦であり、その成否が以後の戦局を決定せしめるのだ。

地図を開き、予定されている行動線をなぞっていく。

「敵は北の山間部を抜けると、およそ一時間ほどで作戦地点の丘陵地帯に入ると推測される。山腹の宿営地からの進軍速度を考えると

恐らく太陽が中天から傾き始めるころになると思う」
「そうですな、歩兵の数が多いので若干遅れるかもしれませんが」
「あまり遅れられても困るのだがな、そこはアルヴェーン伯の手腕に期待しよう。そして問題はここだ」

指し示されるのは山岳地帯と丘陵地帯を東西に分断する二本の線。その線の幅は一定でないが、実際は特に名付けられているわけでもない河川が西から東へと向けて流れている。
名が無いとはいえ、その幅は最大三十メートルほどに及び、最小部でも十五メートルはあるという。
平均的な成人の膝下程度の深さしか無いために徒歩での渡河が可能であり、荒天時でもなければさしたる障害たりえないのだが、その些細な障害こそがこの作戦の重要な点でもある。

渡河を終えると向かって正面から左側にかけて、方位で言えば南から東側にかけて、丘と呼ぶには憚られる高さを持つ「丘」が聳(そび)え立っているため、それを避けて西側に回りこむように大きく迂回するのが常となる。
するとそこは一時的に北部と東部を河に、南部を丘に囲まれ、広い平野においてただ一箇所、大兵力を存分に行使できない地形へと変貌するのだ。
いざ戦闘となると、些細だったはずの障害が限りなく大きくなるものだ。
自動車に乗って時速五十キロメートルでは緩やかに思えたカーブも、時速百五十キロメートルでは恐怖感を刺激するものになる、と言えばいくらかわかりやすいだろうか。

「ここでは西側にしか戦線を展開できないため、兵力の多寡はそれほど重要なものではなくなる。つまり普通に戦っても負け難い状態になるわけだが、消耗戦となれば数に劣る我が軍はどうしても不利

となるだろう。いくら個々の力量で上回っていたとしても、な」

個人の戦闘力、技量とすれば、恐らくこちらのほうが上なのだろう。

それは精悍なるヴィッテルスバッハ兵としての矜持ではあるが、根拠も無くそう言えるほど思慮に欠ける人間に、少なくとも俺はまだ会っていない。

クリングヴァル中佐、フェーンストレム中佐は苦笑いを押し殺しつつ、聡明な孫娘を見るようにして頷く。

仮に同数の兵力であれば絶対に負けはしない、という信念の表れでもあるが、それを実証できないことを残念がっているようでもあった。

「そこで我々の出番、と相成るわけですな」

「そうだ。敵の後方を扼し、完全に注意を引き付けた上で離脱。その後本隊の支援に入る」

方法論としては以前、オーシャで鶴翼陣を突き崩したものに近い。戦力を一点に集中させて敵陣を掻き回すのだ。

これは新兵が多い編成でも統率が容易であるということが利点とされる。

しかし止めても聞かないことではあるが、クリスが先陣を切るのは頭痛の種でもある。

これがまた突破力に明らかな違いを生み出すから性質が悪い。

どうやら兵たちはうら若い美貌の女神を崇拝しているようであり、演習においても俺の主観で三倍ほど戦意が上昇しているようだった。

果たしてこれは喜ぶべきか、憂うべきか。

「それとこれは全軍に徹底させる事項だが、できるだけ殺さないよ

うに敵の戦闘力を奪うのだ」
「殺さないように、でありますか」
「敵とはいえ兵士のほとんどは平民だ。平民を助けるべく起つ我々が、それを害して何を大儀とするのか」
「……確かにその通りです。思慮が不足したことをお許しください」
「わかってくれればいい。だがそれは卿らにも言えることだということを忘れるな」

老いてなお剛勇を誇るフェーンストレム中佐は、恐縮と感激がない交ぜになった表情で敬礼を取った。
生粋の軍人であるが故に、政治的な配慮までは至らなかったのだろう。
クリングヴァル中佐も同様のようであったが、むしろそれは軍人としては正しいことなのだ。

「それでは配置についてだが……」

その後も滞りなく会議が進み、俺が要項を復唱して閉会した。
今は野営地から少し離れた丘の上で空を眺めている。
特に目的があるわけではない。
叙情的な雰囲気を出すならば、これからのことについて思いを馳せている、とでも言おうか。
ただ明確なことは、きっと明日もこうしているだろうということだけだ。
冷静に考えれば死んでしまうこともありえるのだが、それは俺にとってあまりにも現実味がないことでもある。

とりあえず、考えても始まらないことだけは確かだ。
一応でも明日に備えて休むことにしよう。

第十六話　戦場の踊り子

星霜をかけて緩やかに隆起したのであろう起伏と、それに取り残された形の平野とが、静謐な存在感を持って視界の大半を占めている。

この辺りにはまだ人類が足を踏み入れていない森林も多く、全てを把握するには年単位の調査が必要となるほどの昆虫や動物が棲息するらしい。

ジャングルの奥地で何年もの時間を費やしてやっと新種が見つかるかどうか、という世界にいた俺には見当も付かないことでもある。

その神秘的にさえ思える土地でまで醜く争おうとしている俺たち人間は、やはり業の深い生き物なのだ。

罪も無く棲家を追われ、踏み潰される彼らには俺たちがどう見えているのだろうか。

「よう、どうしたレイジ」

振り向くと赤銅色の髭を持つ男が歩いてきていた。

以前綺麗に揃えたはずの髭は、再び伸ばし放題になっている。

曰く、「戦士があんな髭では舐められる」らしいが、実際はただ面倒なだけだろう。

当初予定されていた副官の席に俺を推したのは、身なりにも配慮しなければならない公務を忌避したからに違いない。

確かに彼の性格からすれば、細々とした折衝もこなさねばならな

い副官よりも、大胆に敵を薙ぎ払う実戦隊長にこそ向いているのは疑いようもないが。
それに俺自身が実戦向きではないのは百も承知なので、こうなったのは適材適所というべきだろう。

「いえ、なんでもないですよ。ちょっと緊張してるぐらいで」

これまでの観察によって、主に若い者を茶化すときの癖だと断定した左頬を持ち上げる笑顔で俺を見る。

「俺らには幸運の女神が付いてるじゃねえか」
「……スヴェンもクリスティナ教の信者だったんですか」
「おう、第一号だ」
「信仰は自由ですがね、妄信は廃頽への最短経路ですよ」

意識的な軽口であるのはわかっているので、できるだけ呆れた顔を作ってみせた。
スヴェンは笑いながらも肩をすくめ、歩いてきた方向を一瞥して溜息を吐く。

「まあ若い奴らのはちょっと度が過ぎてるな。不安で仕方ねえから何かに縋りたいんだろうけどよ」
「信じるものがあるから争いが起きるんですが、争うために信じるのはどうかと思いますね」

それを利用して争いを引き起こそうとする人間も存在する。
宗教を掲げた戦争は凄絶なものとなるのが常でもある。
互いが己の唯一神を信じぬものは「人」ではない、と認識するからだ。

歴史においては、その顕著な例のひとつとして「再征服（レコンキスタ）」と呼ばれた十字軍による大量虐殺が挙げられるだろう。
相対的に善と悪が入れ替わるという点で、信仰というものは諸刃の剣なのだ。

「と言っても、縋りたい気持ちもわかりますけど」
「半分以上が初陣だからな。まあ、徐々に落ち着くだろうさ」
「そうだといいですね」
「難しいかもしれねえぞ、隠れ信者もいるみたいだしな」
「……」

俺が返答に窮するのを確認すると、からからと笑いながら自分の仕事へと戻っていった。
確かに信仰に近い感情を自覚してはいるが、公然と口外していないだけで別に隠しているわけではない。
……隠している、に限りなく近い気はするが。

俺たちはもはや山と呼ぶに相応しい丘の、河から向かって反対側で息をひそめている。
高度としては中腹よりもやや低く、正確には反対側といってもわずかに左だ。
山際から河辺を覗き込める位置といえばわかりやすいかもしれない。

つい先程、本隊が予定地点に到着した知らせがあった。
あとはこちらのタイミング次第となる。
敵が渡河を終え、西に転進したところで山を反時計回りに駆け下

りて後背を突く。
その後に本隊が一気に攻め寄せるのだが、それは速過ぎても、遅過ぎてもいけない。
速過ぎれば引き付けが儘ならなくなるし、遅過ぎれば俺たちが撃破されていることだろう。

しかし本隊も敵から死角になる位置で待機しているため、同様に死角となる敵の動きを確認することは難しい。
そこで俺が準備した狼煙が重要な役目を負うことになる。
ひとつは俺たちに本隊の到着を知らせるためのもの。
もうひとつは俺たちから本隊に向けての合図に使われる。
合図のタイミングも肝要になるが、半日前に到着していた俺たちには計算に必要な時間が十分にあった。

「アルヴェーン伯軍の八割ほどが渡河を終えました」
「わかった。それでは、進軍用意」

報告を受けたクリスが静かに号令をかけると、地面で澱んでいた緊張感が水位を増した。
全軍にその声が聞こえているはずはないのだが、数秒も置かずに体勢が整う。
これが神格化される人間の才能なのだろうか。

張り詰めているせいで何倍にも感じられる時間が流れ、ついに三万五千人の渡河が完了する。
クリスの目配せを受け、俺は最後方で準備させている狼煙に点火するよう指示を出した。
ほどなくして細い糸のような白い線が立ち上り、やや遅れて幾多もの紐に似た煙がそれに絡みつくように縒り集まる。

「大佐、行きましょう」

視線を前方に向けたままで小さく頷く。

だが、それ以上は動こうとしない。

……動けないのか。

どうにか馬を半歩分だけ寄せ、他には聞こえないように注意を払って声を掛ける。

「クリス、行こう。俺も離されないように付いて行くから」

「……副官が付いて来るのは当然だろう、馬鹿め」

前を向いたままなのは変わらなかったが、いくらか緊張も解けたようだ。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

背筋と共に指の先までまっすぐ空へ伸ばした右手を、視線の先めがけて振り下ろす。

「行くぞ！　全速前進！」

待ちかねていた兵士たちが一斉に鐙を締め、馬銜を噛ませる。

クリスが先頭に立ち、その横に俺が、後方を囲むように直属中隊が続く。

さらに真後ろにはカッセル大隊、右翼にクリングヴァル大隊、左翼にフェーンストレム大隊が付け、全体的にはクリスを頂点とする矢印状の陣形と言えるだろう。

奔流のような勢いで突き進み、俺の目算で一キロメートル弱を一分ほどで駆け抜けた。

半分ほどの地点で俺たちに気付いたアルヴェーン伯軍は、不意を突かれた衝撃から抜け切れないままに抗戦を余儀なくされている。

ある者は武器を取り落とし、ある者は自失のうちに突き倒され、中には恐慌から逃げ出す者もいた。
一馬身ほど先を行くクリスはほとんど速度を落とさず、騎馬用の長盾でもって次々と敵兵を薙ぎ倒して行く。
その様子はまるで馬上で踊っているようにも見えた。

馬蹄が轟き、剣戟が響き、雄叫びと悲鳴が重なり合う。
俺はといえばクリスに遅れないようにするのが精一杯で、時折降りかかる敵意をやり過ごすのにも苦労している。
だが、少なくとも俺たちの周囲に関しては敵を圧倒していた。

ではまだ遠い敵はどうか。
残念ながら今の俺では詳細に観察することは適わないが、どうやら戦前の予測に近いようだ。
敵の戦意は高い。
では何故それが有利に働くのか、というのがヴィッテルスバッハ卿も不審に感じたところである。

普通、集中して何かを為そうとする人間は、得てしてそれ以外が見え難くなるものだ。
この戦争においてもそれは適用される。
戦意に逸る兵士は眼前の敵を倒そうと躍起になるものだが、その意識が俺たちに向いてしまえば本隊にとっては有利になると言えないだろうか。
アルヴェーン伯軍にしてみれば連続で奇襲を受けるような気分だろう。

敵は時間の経過と共に、だが想定していたよりはいくらか速く、体勢を立て直しつつある。
つまりはそろそろ潮時、ということだ。

「クリス！　一度抜けよう！」
「そうだな、頃合いだ」

少しずつ左へと湾曲させていた進路だが、さらに曲率を増やすとやがて元いた方向へと向けて進撃することになる。
敵は俺たちを追う形になるが、後方に配置されていたのは歩兵であったため、追撃を振り切るのは容易い。

あと少しで離脱できる、といったところで状況が変化した。
戦場に本隊が到着したのだ。
落ち着いていればどうということもないのだろうが、思うさま掻き回された敵軍は秩序を放棄したようだった。

我先に逃げ出そうとするが、まだ戦おうとする者がいることと数が多いことが災いして各所で混乱が起きる。
運良く混乱を抜けても河に足を取られてなかなか進めない。
決定的なのは河に向かって下り坂になっていることで、足を縺れさせて転ぶものも少なくない。

本隊は下り坂も利して横隊で圧力をかけ、敵の戦意と戦力を削っていく。
俺たちも丘の頂上を頂点として放物線状に進路を取り直し、南西から横隊の列に加わる。
混乱は拡大し、指揮系統は分断され、その機能を全く果たしていない。
アルヴェーン伯は決して無能な指揮官というわけではないのだが、三万五千の軍を統率するには力不足だったようだ。

既に勝敗の帰趨は決していた。

第十七話　帰りは怖い

山岳地帯と丘陵地帯とを隔てる河辺で行われた戦い。
あれから六日が過ぎ、本来であれば今頃は勇躍してシュトルーヴェ城に凱旋していたことだろう。
だがしかし、俺たちは未だ帰路の途上にある。

それは何故か。

その問いの答えは明白であり、至極簡潔なものだ。
予定していたよりも行軍速度が遅いから、である。

俺たちは勝利した。
少数でもって多数を討ち倒し、被害らしい被害も無い。
何せ総勢一万五千人のうち、死傷者は一パーセントにも満たなかったのだから。
戦術的には驚異的な大勝利と言える。
故に疲労による遅れを鑑みるとしても、昨日辺りには余裕を持って到着しているはずだった。

しかし、ひとつだけ想定外の問題が発生したのだ。
数で俺たちを上回る捕虜の存在である。

アルヴェーン伯軍三万五千のうち、五千が戦死し、一万は河を越えて撤退したが、残る半分以上、実に二万人余が戦闘を放棄し捕虜

となった。
いくら元が平民であるとはいえ、一時的にでも軍籍にあるものを野放しにはできない。
解放するにしても、城に戻ってから然るべき手続きをし、その上で処遇を決めねばならないのだ。

これは思わぬ失態だった。
勝つつもりでおきながら、作戦通りに事が運べばこうなるであろうことを失念していた。
俺個人としては、そこまで関われる権力が無いと言えばそれまでなのだが。
クリスに進言していれば事前に対策を取れていたはずだと思うと、やりきれない。
電車で街に買い物に行ったとき、予定の品物分しか金を用意していなくて歩いて帰る羽目になったような感覚に近いかもしれない。
……まあ、そんな希少な経験を二度もしたのは俺くらいだろうが。

それにしても、彼女なら俺が言わずともこうしたことには気が回っていそうなものだ。
一応は名誉の為に、鬼の霍乱、とでも言っておこうか。

現在は道程も八分を越え、何事も起こらなければ明後日の夜には到着する。
捕虜の対応やら処遇やらは俺たち軍人の仕事ではないから、心苦しくも俺は暖かいベッドで睡眠を貪ってしまうだろう。
そのためにも今は「何事も起こらないように」細心の注意を払わねばならない。

食糧の問題は無い。
先に馬を走らせた部隊によって、数日前から補給物資が届くよう

になっている。
それなりに人数も派遣され、今のところ監視体制にも問題は無い。
だが今夜は、暴動、或いは脱走が起こる可能性が最も高い。
いくら両手を封じられていようが、敵に捕まっていることを由としない者は少なくないはずだ。
少しでも頭が働くなら、何も無い平原よりも山間部に入って見通しの悪くなる今夜を狙うだろう。

しかもよからぬ企みを持つ者にとって幸運なことに、今夜は新月でもある。
自然と俺たちの目も厳しくなるというものだ。

「こんなことまでしなきゃならんものかね」
「そうぼやくなよ。脱走されるだけならまだしも、本格的に暴動でも起きたらこの間より被害が出るかもしれないんだから」
「でもよ、あいつら平民だぜ？　大人しくしてれば解放する、って説明したじゃねえか」
「もしヒューゴは皇国軍に捕まってそう言われたら、信用するか？」
「……そりゃあ、できねえけどよ……」
「そういうことなんだよ、戦争っていうのは」

俺たち二人は野営の準備をしている人だかりから外れ、それぞれ両手では抱え込めない太さの木に体を預けながら、目だけを周囲の様子に彷徨わせている。
決してさぼっているわけではないが、何か居心地が悪いのも事実だ。
精力的に作業を手伝うクリスを休ませるために使った方便によって、俺もまた沙汰を無くしてしまったのだ。
上官が休まないと部下も休めないから。

我ながら小賢しいことを言ったものだが、それを聞きつけた下士官たちは体よく口煩い上官を排除にかかったのだった。

隣の男は納得がいったようないかないような、そんな明瞭としない表情で銀色の頭を掻き回している。

暴動対策。

万が一の場合の制圧を容易にするため、捕虜を小集団に分けて連動の恐れがなくなる程度に各々の間隔を取った。

確かにここまで露骨にやると逆に刺激しているような気がしないでもないが、俺としては喧騒が減った分だけ気は楽になった。

昔から人が多いのは苦手なんだよな……。

「イトウ中佐、こちらでしたか」

「どうかしたのか？」

駆け寄ってきた大柄な青年が、隣にいるヒューゴと似た表情を貼り付けて俺の前で敬礼を取った。

アメフト選手のようながっちりとした体を持ち、さわやかな笑顔が似合う顔には短く揃えた金色の髪で清涼感をさらに強調している。

この絵に描いたようなナイス・ガイの名はロベルト・トーマス・ヴェストベリ、階級は少尉である。

そのヴェストベリ少尉には似つかわしくない表情が、何か普通ではない事態を物語っている。

「お耳に入れるかも迷ったのですが、小官の一存では判断しかねると考えましたので、報告いたします」

「話してくれ」

「先日より円滑な事後処理の為に捕虜の名簿を作成していたのですが、その中で不審な者を発見しました」

「不審とは？」
「はい、不遜にも皇族に連なるものと主張するのですが、それらしき証拠は見当たらず、身なりも平民と変わるところはありません」
「……もしそれが嘘なら不敬罪になるかな？」
「皇国の法を適用するのであれば、そうなります」
「そうか」

ということは、馬鹿か本物かどちらかだろう。
馬鹿であると助かるのだが。

「このことは誰かに？」
「私と、始めに取り調べた下士官の二人だけです」
「他言無用を徹底してくれ。騒ぎになっても面倒だ」
「はい」
「ではその不審な者をアッテルベリ大佐のところへ連れて来てくれ。俺も向かう」
「了解しました」

ヴェストベリ少尉の背中を見送ってから、体を木から離した。
ヒューゴはまだ微妙な表情のまま動こうとしない。
話は聞こえていただろうが、興味が無いようだ。

「どう思う？」
「本物かどうかか？　どっちでもいいんじゃねえの。嘘なら処罰なんかしねえだろうし、本物なら殺すだけさ」
「殺すことはないだろう、利用できるかも……」

胸元に衝撃を感じ、声が詰まる。
ヒューゴに胸座を掴まれていることに気付いたのは、二度の瞬きを終えてからだった。

「殺すさ！　革命に交渉は要らねえだろう！」
「……そんなに憎いのか」
「当たり前だ！　できることなら俺がこの手でひとりずつ縊り殺してやりたいほどにな！」

その両眼には、かつて俺が見たことのないほどの憎悪が燃え盛っていた。
興味が無かったのではない。
そう割り切っていたからこそ、無関心だったのだ。
思えばこうした激情を秘めているものでなければ、国を覆すための戦いに身を投じることはないだろう。
そうでなければただの戦闘狂でしかない。

不意に俺を掴む力が抜けた。

「悪い、つい熱くなっちまった」
「いや、俺も軽はずみなことを言って悪かった」

ヒューゴはばつが悪そうに頭を掻き、再び木にもたれかかる。

「クリスのとこに行くんだろ？　急がねえとヴェストベリが先に着いちまうぜ」
「ああ、悪かったな」
「よせよ馬鹿野郎」

不機嫌そうに照れながら苦笑する、という器用なことをするヒューゴと別れ、足を速めてクリスの元に急ぐ。
それにしてもあの剣幕は尋常ではなかった。
過去に何かがあったには違いないが、俺はまだそれを知らない。
知るべきではないのかもしれない。
知ったところでどうにかできるとも限らないし、そもそも聞けば教えてくれるかも定かではない。
クリスが皇女であることをヒューゴに教えなかった理由が、少しだけわかったような気がした。

第十八話　闖入者

「大佐、よろしいですか」
「名前で呼べと何度言ったらわかるのだ」

仮にも総司令部とはいえ誰が聞いているかも知れない屋外であり、互いの公的な立場を考えて念のため名前では呼ばなかったのだが、また警備兵を追い払ったようだ。
いくら隠していても一国の姫なのだから、身の回りには気を遣えと言っているのに。
それにしても声だけでよくも俺だとわかるものだ。
女性が少ないこの場所で俺がクリスの声を聞き分けるのとは違うと思うのだが。

自然の木を利用して張った簡易型のテントには、先客の姿は無いようだった。
ヴェストベリ少尉が来る前にある程度の経緯を説明しなくてはならないが、どれほど時間に猶予があるだろうか。

「どうした？　休んでいるか確認しにでも来たのか」

無理矢理テントに押し込んだことを根に持っているのか、口調はあからさまに皮肉っぽい。
打ち合わせのために使う大きめのテーブルに腰を下ろし、所在無げに足をぶらつかせている。
外に遊びに行きたいのに留守番を仰せ遣った少年のようだ。

「それもあるけど、ちょっと面倒事を持ってきた」
「楽しいほうか、つまらぬほうか」

「俺は楽しいことを面倒とは思わない人間なんでね」
「なら聞こう」
「監督者としてそれはどうなんだ？」

暇を持て余していた所に訪れた口煩い幼馴染を歓迎するような顔で上体を乗り出すクリスに、牽制の意味も込めて強めの視線を投げかける。

留守番を反故にする口実ができれば嬉しいのもわかるが、その態度の豹変振りに一抹の不安を覚えずにはいられない。

この幼い部分をそのあたりの兵士たちにも見せてやりたいものだ。

いや、逆効果にもなりかねないか。

「それで、つまらない面倒事とは何だ」
「ああ、捕虜の名簿を作らせていただろう？　その中で不審者を発見したと連絡を受けたんだ」
「どのように不審なのだ？」
「なんでも自分は皇族だと言っているらしい」
「……皇族がこんな所にいるわけなかろう、馬鹿者」

あきれたような口調ではあるが、それは言外に微妙な成分を含んでいるように聞こえる。

それが何かは判然としない。

わかるのは決してプラスの感情ではない、ということだけだ。

「貴様はどう考えている？」
「いるわけないとは思うけど、万が一ということもある、かな」
「いつもながら慎重だな」
「それはそうだよ。クリスを失うわけにはいかないからね」

今回に限れば捕虜にしているわけだからそれほど危険はないと言

えるが、ここにクリスがいることは、まだしばらく知られてはいけない。
一軍人という立場のこともあって、今は警備体制も万全とはいえないのだ。
もしも暗殺者などが送り込まれてきたらひとたまりもないだろう。
そんなことになったら誰がこの国を救えるというのか。

と、ひと息にそこまで言って異変に気付いた。

「……」
「……クリス？」

薄桃の唇を真一文字に結び、翠玉の瞳は時折微風にはためくテントの一点を見つめて動かない。
先日の作戦前も似たような状態だったが、何か気に障ることでも口走っただろうか。

テントの外に人の気配が近付いてきた。
恐らくヴェストベリ少尉が不審者を連れてきたのだろう。
仕方ない、クリスがこんな状態では俺だけで話を聞くしかないか。

「失礼します、ヴェストベリ少尉でありま……あっ」

外に出ようとして出入り口に手をかけた瞬間、少尉の咎めるような声とともに何かが内側に転がり込む。
不審者。
そう認識したときにはすでに肩口を掴んで引き倒していた。
自分で把握している運動神経からは考えられない反射速度に戸惑いも感じているが、今はそれどころではない。
不覚を取るところだった焦りと、それを未然に防げた安堵をひと

まず押し留める。
慌てて飛び込んできたヴェストベリ少尉も無事であることを確認すると、律儀にも敬礼した後に下半身の拘束に移った。
「大佐！　しっかりしてください！」
落ち着かせたつもりだったが若干声が上擦った。
尋常ではない声に反応したのか、クリスが跳ねるようにして我に返る。
「な、何事だ？」
地面に押し付けられて唸る何者かと、その腕を捻り上げるようにして跨っている俺に駆け寄ってきた。
まだ状況の把握ができていないのだろう、目は忙しなく動き回り、手足の動作もどこかたどたどしい。
しかし。
眼前に現れた闖入者と目が合った瞬間、軽やかに逃げ回っていた冷静さを鷲掴んで支配下に置く。
それは一呼吸にも満たないわずかな時間でなされたが、俺は気付いてしまった。
動揺と沈着の狭間には驚愕が存在したことを。
こいつは、本物だ。
それほど信頼しているわけではなかったが、本能がそう告げている。
クリスの反応からして、皇族か、或いはそれに連なる者であることは間違いない。
どうするべきか。

ヴェストベリ少尉もいるし、外も異変を察知して荒げた声が飛び交っている。
この男が言葉を発するのもよくないだろう。
逡巡している猶予はない。

抗い続けている頭を押さえていた手を離し、代わりに首筋を圧迫して意識を奪った。
抵抗が止んだことを確認して立ち上がり、恐縮する青年士官に向き合う。

「少尉」
「申し訳ございません、私の不手際です。この処分は……」
「不幸にも彼は足を縺れさせて転倒、打ち所悪く気絶してしまった。そうだったな」

最後まで発音する機会を奪い、「事実」の確認をする。

「は？」
「だから案ずることはない、と外の連中にも伝えてくれ」
「……了解しました」

事実の捏造を強要することは得てして知らざるを知る鍵にもなるが、この際は仕方ない。
この明晰で高潔な青年は無闇に真実を吹聴することはないだろう。
だからこそ不測の事態に備えて近くに置いているのだが。

納得はしていないようだったが、それも当然か。

何も知らされないまま従わされる、などというのは俺の最も忌避するところなのだから。
少尉には悪いことをした。
後で手土産でも持って謝りに行くとしよう。

「さて、クリスはこいつを知っているようだったけど？」

今、テントには三人しかいない。
俺とクリス、そして未だ目を覚ましていない皇族らしき男。
男、と言うにはまだ成長が足りないようにも見えるが、生物学的に男性であることは間違いない。
年齢はクリスと同じぐらいだろう。
十六、七で戦場に出ることは珍しいことではないのだろうが、どうにも場違いに感じるのは皇族かもしれない、という先入観のせいだろうか。

「知ってはいるが、皇族ではない」
「皇族じゃない？　なら何で……」

そんな嘘を、と言いかけたときに少年が呻いた。
深い森のような緑の目は開いたが、意識はまだ覚醒していないのだろう、寝惚けたような顔で辺りを見回している。
そうしているうちにクリスの姿を見付けて止まった。

「こんなところで何をしている、ハンス」
「……やあ、クリスティナ」
「答えろ、何をしているのか、何故皇族を騙ったのか、家の者は知っているのか」
「久しぶりに会う従弟にいきなりそれかい？　相変わらずだなあ、君は」

イトコ？
ということは、そうか、母方ならば皇族ではないわけか。
しかし話に聞いていた母方の血統は穏やかな印象を受けていたのだが、ハンスと呼ばれた少年のそれは違っているように思う。
飄々としているようにも見えるが、もっと鋭いもの、深いものを感じる。
怜悧。
若年者に向けた評価としてはどうかとも思うが、一番しっくり来るのはその二文字だろうか。
ただ、嫌な感じではないのが不思議だ。
馬鹿もやるが実は頭の切れる生徒会長、と言えば近いかもしれない。

「戦いに来たわけじゃない、と言ったらわかるかい？」
「……それは家の意思か」
「現時点では僕の独断、としか言えないかな。もちろん僕がここにいることは知らせてない」
「何故皇族だなどと偽った。有無も言わさず処刑されるとは考えなかったのか」
「ヴィッテルスバッハ卿の軍がそんなことしないのはわかってたつもりさ。それになるべく早く話のわかる人に会いたかった。うん、暴れたのはちょっとした気紛れだよ。でも君がいたのは予定外だった。予想外ではなかったけどね」

ここまでの会話を聞いていて、少しだけわかったことがある。
この少年は危ない人種だ。
しかもそれを理解しているような節もあり、つまりより性質の悪い領域へ昇華されていると言っていい。
俺はまだその真意を測りかねている。

「要するに何らかの目的、恐らく何かを伝えるために来た、ということで違いないか」
「ご明察。それが全部じゃないけど、主な目的はそういうこと」
「私に言えない、というものではあるまい」
「クリスティナには、ね」

そう言って今まで無視していた俺を一瞥する。
そこまで邪魔者扱いされているといっそ気持ちいいが、さすがに二人きりにするのは憚られた。
一応、出てようか？　と視線を向けてみると、小さく肩を竦めて首を振る。

「彼は私の副官だ。今言わずともどうせ私が話すぞ」
「そうか。ふん、どうやら信頼しているようだし、君が構わないなら問題ないかな」

素っ気無い風ではあるが、微妙に機嫌を悪くしたようだ。
確かに親しい人が知らない誰かと仲良くなっているのは、あまりいい気分ではないか。

「まあそれはそうと、主な目的というのはね、これからの皇国軍の行動予定だったりするんだけど、知りたい？」

第十九話　往く道を共に

敵の情報を知りたくないか。
少年は事も無げにそう言い放った。
今現在どちらかといえば敵側として存在する少年は、宿題の答えを教える程度の気軽さで裏切りを果たそうとしている。
戸惑いは隠しきれないが、クリスは努めて冷静に疑問を口にした。
「情報はあって困るものではないが、何故そんなことをするのか理由が聞きたい」
「警戒しているのかい？　まあ、賢明な判断だよクリスティナ。もしかしたら僕は偽情報を掴ませて皇国に恩を売ろうとしているのかもしれないからね」

そうだ。
もしそんなことになったら目も当てられない。
先日とは逆にこちらが奇襲を受けるようなことになれば、産声を上げたばかりの俺たちはいとも容易く葬り去られるだろう。
少年は含みを持たせるように俺をちらりと見てからさらに語を繋げる。
「実はその動機もあり得るわけだ。何せオクセンシェルナは君と君の母親によって少なからぬ損害を被ったのだから、そろそろ失地回復に励まないとお家取り潰し、なんてことにもなりかねない」
「貴様！」

引き絞られた弓から射ち出される矢の如く、クリスの体が弾けて少年の首に掴みかかる。
手足を縛られたままの少年はそれを防ぐ手立ても無く、後頭部を強かに打ち付けられて苦痛の吐息を漏らす。

俺は反応できなかった。
捕虜に危害を加えるなど、彼女がそんなことをするわけが無いと高を括っていたのだ。
直前に俺を見た少年の瞳は牽制だった。
こうなるのがわかっていて、わざとやったのか。

「貴様に何がわかる！　母様は！　母様はっ……！」

かつてここまで激昂するクリスを見たことがなかった。
白い顔は上気して赤く染まり、怒りで塗り潰された瞳で眼下の少年を睨み付けている。
口の端から泡を吹きはじめた少年に気付く様子はない。
感情を抑えられないのも痛いほどわかるが、これ以上は危険だ。

「クリス、もう止せ。彼はわざと怒らせたんだ。何故かはわからないけど」
「わざ、と？」

はっと正気に戻り、手を離すと全身から力を失ったかのようにして座り込んだ。
何を言っているかわからない、といった目で俺を見上げる。
「クリスを試したんじゃないか、と感じたんだけど、どうだろう」
四回噎せ込んでから体を起こした少年に投げかけた。

「危うく叔母様に面会の申し込みをするところだった」
「どういうことだ」
吹き上げた怒りが肩透かしを食らって落ち着かないのか、うまく状況が飲み込めていないようだ。
詮も無いか。
俺だってクリスほどではないが混乱しているのだ、当事者たる彼女が自己を回復するのはもう少しかかるだろう。
「意地悪してごめんよ、クリスティナ。でもこれで僕の心も決まったよ」
「何だ、どうなっている」
「僕も君と志を同じくしよう、そう言ってるんだ」
恐らく今のクリスが理解するのは難しいのではないか。
重要なのは「君の母親」から「叔母様」に言い直した部分だ。
そこに真意が隠されていると思う。
すると少年は、気付いた？　とばかりに目を細めるが、一貫して説明しようという気はないらしい。
……俺もひどかったものだが、このぐらいの年齢の男は他人を試すことで己の価値を確認しようとする。
いや、もしかしたら女もそうなのかもしれないが、生憎俺は女になったことがない。
とにかく解決策としては、こちらの推論を展開してみる他はないだろう。
「つまりクリスの戦う理由が知りたかった、そしてそれは君の思惑と一致した。だから共に戦おう、ということでいいだろうか」

「うん、七十点。肝心なところが抜けてるよ」
「肝心なところ？」
「そうさ。共に戦う方法が、ね」

そんなことを匂わせる言動があっただろうか。
この言い方を聞くと剣を持って戦うということではない、ぐらいはわかるが……。
はて、何だろう。

「情報、だな？」
「正解だよクリスティナ。副官さんはだらしないなあ、一番最初のヒントじゃないか」

うむ。
言われようには腹が立つが、ことさらに言い返すのは大人のやり方ではないな。
種明かしをしようとする気を削ぐこともあるまい。

「僕はね、叔母様が大好きだった。年に一度か二度ぐらいしか会えなかったけど、会える日がわかってからは楽しみで寝付けなくて、よくお爺様に怒られたものさ」

訥々と語り始める少年。
既にクリスも落ち着いていた。
手足を封じていた縄を解いたときに小さくありがとう、と漏らして話し続ける。

「クリスティナやルクレティア姉様と遊んでいるときの優しい顔も、クリスティナとした悪戯がばれたときの怒った顔も、湖で溺れそうになったときに泣いてくれた顔も、全部はっきりと覚えてるよ」

クリスが頷く。
俺からは見えないが、もしかしたら溢れそうになる涙を堪えようとしているのかもしれない。

「楽しい時間はあっという間に過ぎて、お別れを言うのが嫌で困らせたこともあったね。今思えば馬鹿なことをしていたけど、当時はそれが何より大事なことだった。気付いてなかったのが悔しいけど、きっと僕の初恋だったんだろうな」

網膜には投影されない何処かを見ていたような少年の瞳が、現実を認識する男の目に変わる。

「でも」

何かを言おうとして口が半分開いたが、わずかな逡巡を経て引き締めた。
まるで、ここから先を話す必要があるか？　と言わんばかりに視線を逸らす。
俺がどこまで知っているかわからなかったのもあるだろう。

しかしそれで十分だった。
彼はクリスと同じ思いを果たす道を、虎視眈々と窺っていたに違いない。
その困難な道を支えると決めた俺が、困難を共にしようと歩み寄る者を無下に扱うことができようか。

「じゃあクリス、手伝ってもらおうか」
「まあ、そうだな。中枢の情報がわかるのは魅力的だ」

もう少し素直に喜んでもいいだろうに。
これも味だと思えば何と言う事はないのだが、クリスは素直なほうが可愛いのになあ。
そうやって自分でも微笑んでいるのか苦笑いしているのかわからないでいると、少年も似た表情で彼女を眺めていた。

「ああ、そうだ。俺は伊藤玲司。こっちの人はレイジの方が発音しやすいみたいだからそう呼んでくれ」
「うん、何か面白い名前だね。僕はハンス・イェルディス・ラルス・アドルフ・ルーペルト・ロニー・ロルフ・レンナルト・オクセンシェルナ。どうしてもと言うならフルネームで呼んでくれて構わないよ。よろしく、副官さん」

一瞬本気で覚えようとしたが、笑顔で左手を差し出してくる少年を見て止めた。
どうやら仲良くやっていくには苦労しそうだ。

「こちらこそよろしく、ハンス」

もちろん、俺も左手を出したのは言うまでもない。

第二十話　舞い込む報せ

ささやかと言うには規模が大きく、盛大と言うには華やかさが足りない宴。

シュトルーヴェ城に帰着してから実におよそひと月を経て、革命の初陣を飾った祝いの席が城内の広間に用意された。

予定では凱旋当日にも酒宴の準備がされていたのだが、残念なことにそれらのほとんどは給仕や女中たちの豪華な夕食になってしまっている。

我々出征組はそれぞれ自分の部屋に辿り着くと、着の身着のままベッドに倒れ込んで翌日の昼まで目を覚まさなかったし、文官や守備兵ら駐留組は捕虜の対応や物資の点検、対外折衝に忙殺されて体が空かなかったからだ。

俺個人のことを言えば、欲求のままに惰眠を貪ろうとしていたところをクリスに叩き起こされ、風船のように漂う意識を懸命に繋ぎ止めながら城中を引き摺り回されていた。

城に戻った五日後になるが、盛夏期には皇族の避暑地としても使われていたリェルグヴァーレの山荘に、ヴィッテルスバッハ辺境伯領、及び近隣四領の領主が参集し、ヴィッテルスバッハ卿を盟主として同盟と連合を約した誓書に調印した。

それに伴い、連名にて皇帝に対し国政の改善を要求する文書を送付、容れられない場合は武力行使を辞さないことも強記する。
しかしそもそも皇帝の許可なく自治領同士が同盟している時点で重罪であり、文書の内容からしても不敬罪、反逆罪、その他諸々を合すれば問答無用で極刑は免れないのだから、性質の悪い宣戦布告と言われても仕方ない。
尤も、既に正規軍とは一戦を交え、あまつさえこれを撃破しているのだから、何を今さら、という感もあるが。
今のところ皇国から反応はないものの、近く大軍で以って相応の代償を支払わせようと勇躍してくるだろう。

これは調印した場所の名を取って「リェルグヴァーレ盟約」と呼ばれ、俺たちはこの集団を単に「革命軍」と名乗ることになる。
余談ではあるが、ある領主が恐らく冗談で提案した「神聖アヴェストリア皇国連合」という名称は、公の場で発言される前に有能なる彼の秘書官によって却下された。

それからは連日、皇国に不満を持つ平民や排斥された元貴族、小さな領地を持つ貴族が、意に沿わぬ現状や看過しえない悪政を打破するべく義勇の拠り所を求めてこの地を踏む。
解放した捕虜の兵士に至っては八割あまりが革命軍への入隊を希望した。
主に俺とクリスは義勇軍の編成、既存部隊への編入を担当していたのだが、現時点でおよそ三万五千人ほどが新たな戦力として加わることになっており、依然その数字は増え続けることが予想されている。

懸念するべきは急激な人員増加による装備や兵糧の不足であるが、実はそれほど大した問題ではない。
流通の規制が厳しくなったものの、幸いなことに周辺一帯は生産

を生活の糧にしている土地だった。
峻厳に聳える山々から散流する川が肥沃な平野を抱き、山間では製鉄が、河岸では紡績が、それぞれ適した土地で農耕が、まるで外界から隔離されることを想定していたかのごとく整備されている。
それこそ他の土地に売るほどであるのだから、当面の兵站に関しては杞憂となるはずだ。
劣悪な税制を敷く皇国にあって領内の民が不自由なく快活に暮らせているのは、偏に領地を治める主の手腕に因るのだろう。

そうした厄介事を抱えている以上、本来ならば延期なり中止なりにしていてもよかったのだろうが、兵を労わずして戦に勝ち得ようか、というヴィッテルスバッハ卿の正論のような、詭弁のような鶴の一声によって祝宴の運びとなったわけである。
きっと仕事を放り出す口実が欲しかったのだろう、と邪推するのは俺だけだろうか。
いや、確かに今日までの激務を鑑みれば、俺たちだって半日ぐらいは気を抜いてもいいのかもしれない。
それぐらいの猶予はあるのだから。

「やあ、楽しんでいるかい、イトウ中佐」

ヘリウムガスを纏ったような気楽さで、他のものよりわずかに装飾された軍服を着込んだ金髪碧眼の男が、壁際に立ち尽くして所在無げにしている俺へと話しかけてきた。
ご婦人方の輪から次の輪へと移る途中にワインでも取りに来たのだろう。
目は薄いアルコールの靄に覆われているが、その奥の光や口調、

足取りには一切影響が見られない。
これも社交の技術というわけだ。
「はい、それなりに」
「それはよかった。強引に開催した甲斐があったというものだよ」
何やら興が乗ったのか、わずかの間、俺を肴に一時の羽根休めをする気のようだ。
二言三言、定型文の会話を交わすと、周りを見渡しながら口を開く。
「それにしてもすまないね。本来なら君も含め、アッテルベリ隊の者たちは昇進して然るべき働きをしたのだが、何せ今のところは内輪もめだからね、誇るわけにもいかないのだよ」
「いえ、俺は元々は軍人じゃありませんでしたから、そういうのはよくわからないですよ。今でも柄でもない地位に戸惑っているぐらいです」
「まあ今はそう言ってくれると助かるが。しかし信賞必罰は世の常だ。いずれ時期が来たら功労に報いたいと思っている」
普段は軽薄で瀟洒な辺境伯が眉をひそめて苦笑いながら溜息を吐いた。
狭い概念的には正しいことが、倫理的には正しくないことを称えるための方便に過ぎないというのは、ヒトが知恵を身につけてしまったが故の功罪なのだろうな、と残して新たな戦場へと足を向けている。
一人を殺せば犯罪者だが、一万人殺せば英雄。
こんなことを言っていたのは誰だっただろうか。
思考の海に沈降しかけたところで、俺を呼ぶ少女の声に意識を水

面上に引き揚げた。

「浮かない顔をしているな」

「そう見えるか？」

「いや、全くそうは見えないが、そう見えたのだ」

怪訝そうに、ほんの少しだけ心配するように覗き込んでくる上官は、最近こうしたことをよく言うようになった。

大体に於いて正鵠を射ているのが何とも気に食わないが、貴様の考えてることはお見通しだ、ということだろうか。

これでもポーカーには自信があったのだが。

「それよりクリス、なんで軍服なんだ？　ドレスとか着ればいいのに」

「……今の私は軍人だ。貴様は燕尾服でも着たかったのか」

そんなものは持っていないが、そう聞かれると積極的に着たいものではない。

しかしクリスのパーティードレスは見てみたかったのだが、などと言ったら何故か現在進行形で不機嫌度を増している姫君に、これも何故か蹴り飛ばされそうなのでやめておこう。

戦争を生き抜くには防衛本能も重要なのだ。

「何か無礼なことを考えていそうだが、ふん、まあいい。ただ立っているだけでは暇だろう。少し付き合え」

俺の返事を聞かないままにテラスのほうへと足早に、いや、彼女にとっては至って普通の速度だが、歩き出す。

特に反抗してみせる理由も見当たらないので、副官という立場上、その職務を全うするべきだろう。

もう夏も間近だというのに、密度の濃い夜気に触れると肌寒く感じる。
土地柄として風の通り道ということもあるし、比較的標高が高いことも影響しているはずだ。
今夜は晴れているが、凪を過ぎたこの時期は日本の梅雨ほどではないようだが雨が多く、夏を越すための水分を大地に蓄えるのだという。
雨自体は嫌いではない。
だがそれも長く続けば億劫になるうえに、この世界のろくに舗装らしいことがされていない道では歩きづらくなってしまう。
水はけのよいアスファルトの道路が懐かしく思えたりもするが、今こうして大地を踏んで生活してみると、とてつもなく窮屈な不自然の中で暮らしていたのがよくわかる。
娯楽としての読書がままならないのは悩ましいが、どうやら俺の気質にはこちらのほうが合っているようだった。

「さて、中佐。何故ここに来たかわかるか？」

テラスの端で振り向いたクリスが含んだような笑みを湛えている。
これが他の世界、他の女性相手なら多少の色気も出ようというものだが、現在に限ればその方程式は適用されない。
その華奢な指に挟まれた封筒も、残念ながら甘ったるい種類のものではないのだ。

「次鋒はいつ頃こちらに到着すると？」

皇国軍の動向。
それは無駄に長い名を持つクリスの従弟によって、事前にある程度知らされるようになっている。

主流からは遠ざけられているとはいえ、オクセンシェルナは大貴族ゆえの情報網を持ち、かなり詳細な事柄にまで精通するらしい。
彼がここを出立してひと月も経っていないことを考えると、そう遠くない位置で得られたものだろう。
つまり、要するに、そう遠くない未来、想定されていた戦いが始まるということだ。

クリスの反応は鈍い。
言い澱んでいるようでもあるし、望んだ答えが返ってこなかった不満のようでもある。
何かを考えるように呼吸ふたつ分閉じていた目を開く。
「次鋒……とは少し違うな。次に来るのは副将だ、中佐」

第二十一話　灯火

大小の問題が山積している。
未だ新たな指揮系統が確立されていないこと、兵の錬度に度外視し得ないばらつきがあること、兵糧が十分とはいえ運用に難が残ること。
俺の夜食をつまみ食いの挙句綺麗に平らげた元世話係が悪びれもせずにいること、俺の部屋の鍵を破り、あまつさえ密かに書き溜めていた手記を盗み読もうとした現秘書官が字が読めないと逆に怒り出したこと、俺の隠しておいた……。
……どうやら小さい問題に限れば、見目麗しく知性溢れるものの、よろしいのは外面だけという迷惑極まりないいたずら猫をおとなしくさせればいいだけのようだ。
それも野生の虎を飼い慣らすより難しいことではあるが。

それはさておき、当面取り掛からねばならない問題として最上のものが存在する。
クリス曰く「副将」をいかに撃退するか、ということだ。

副将。
それはつまり、第二皇子であり、皇国元帥であり、クリスの異母兄にあたるカール・レオナルド・メクレンベルクのことである。

カール・レオナルド・メクレンベルク。
アヴェストリア皇国第二皇子にして皇国元帥。
皇国軍指令長官と統帥本部総長を兼ね、純粋な軍事力に於いては実質的に皇国最大の勢力を誇る。
特筆すべきは血統のみに因って現在の地位を手にしたわけではないということだ。

皇帝アルブレクトは一貫して血族を優遇しなかった。
第一皇子が典礼省事務次官という、血統主義の世界では閑職とも言える立場にいることからもそれが窺えるだろう。
権力を掴もうと画策し、娘を后妃として差し出した大貴族ら外戚も同様である。
地位の安寧は約束されたが、古来それが栄達の同義語となることはない。
皇帝は自分以外に権力を持たせる気がなかったのだ。

しかしある時、漫然と皇族という温湯に浸かっていたカール少年は気付いてしまった。
自らの才能と野心、己がただ優遇されない「だけ」だということに。
与えられないならば力尽くで手に入れればいい「だけ」だということに。

定められた年齢に達するとすぐに士官学校に入学し、賞賛され、或いは疎まれながら首席卒業を果たす。
通常古参兵のみで構成される国境警備軍への着任を志望し、時には神算鬼謀を巡らせ、時には勇往邁進を奮い、その総てに勝利した。
転戦を重ねながら階級を駆け上がり、生者として准将の在任期間三時間という最短記録も打ち立てている。

初陣から五年、二十一歳の誕生日には元帥杖授与式が行われた。
元帥の最年少記録としては父アルブレクトの十七歳を始め、歴代の皇帝、皇子が保有しているが、彼らは初任の時点で元帥であることが多いため、士官学校卒業後の最速記録ということであれば、「虎将軍」イングヴァル・ベルツェリウスの十一年八ヶ月を大幅に短縮するものである。

皇国軍に於ける三長官、すなわち実務レベルで指揮を執る皇国軍指令長官、皇帝の統帥権を代行する統帥本部総長、軍政を取り仕切る軍務尚書であるが、無理矢理に例えるならば日本の警察組織における警視総監、警察庁長官、国家公安委員長に相当するだろうか。
基本的にこれらはそれぞれ兼任されることはないが、例外的に皇族のみがそれを許される。
過去に三職を兼ねた四人は、三人までが後の皇帝となり、一人は戦中に没した。
ほぼ共通の認識の下、いずれは彼が残りのひとつも手中に収め、その前例に倣うのではないか、と目されている。
燦然と輝くダイヤモンドのようなカールの功績を考えると、それが既定された未来と考えることは決して不自然ではない。

彼は自己の才覚と覇気、そしてわずかな血によって、不遇であるべき未来を打ち壊したのだ。

掻き集めた情報を整理する限り、カールは軍事面に於いて比類ない才能を有しているらしい。
ことさらに軍事と限定したが、それは政治方面に特筆するべき関わりが見られないためだ。

成果や失策などではなく、まるで忌避するかのように関わりを拒んでいる。
尤も、自ら軍人であろうとしているのかもしれないし、その為人（ひととなり）がそうさせているのかもしれない。
或いは、「そのように振舞っているだけ」？
……いや、それは今重要なことではないか。

ハンスの情報によれば、彼は直属の近衛兵二千を核に、駐留軍及び周辺貴族の私兵を参集した四万余を戦力にするらしい。
この数字はハンスの予想を根拠にしているが、事前の勢力調査からもそう大きく外れてはいないと踏んでいる。
こちらは人数だけならば倍ほどにもなるはずだが、運用できる物資を鑑みれば実質戦闘に出られるのは恐らく五万に満たない程度になるだろう。
気休めではあるが、単純に数で優っている点では有利になるはずだ。

「彼は今まで勝つべくして勝ってきた。その意味がわかるかい？」
人員配置についての報告書を提出するためにヴィッテルスバッハ卿の執務室を訪ねると、気晴らしの話し相手を仰せ遣った。
ここ数日、一日の大半をこうして机に向かって紙の束と戦っているのだから、それは滅入るのも仕方ないことだ。
優雅な指で落ちかかる前髪を忌々しそうに撫でつけながら書類に目を通す。
その目はまるで、ここにはいない何者かを非難しているようでもあった。

「負ける戦いをしない、ということでしょうか」
「まあ結論はそうなるが、しかしそこに至るまでの過程が問題でね。合理的と言えば聞こえはいいが、なんというか、そうだな、いけ好かないタイプの戦略家なのだよ」
「いけ好かない、ですか」
「極端に言えば、勝つためには何でもやる男だ。それは当然ではあるのだが、しかしそれも人道や倫理の範囲内であれば、という条件付きだろう」

ありていに言ってしまえばよくある話だ。
特権意識を持つ者は、そうでない者を同じ人間だと思わなくなる。
俺の知る過去から連綿と綴られる負の歴史。
視野が狭窄すればするほどに顕著になる、ヒトという種の忌むべき習性。
カールにとっての特権とは、血統によるものではない。
それは彼を形作る要素。
力であり、才能であり、強さ。
無力で無能な弱者には生きるに値しない。
ワラキア公ヴラド・ツェペシュに代表される、狂気にも似た精神構造の一例である。

「まさか、民間人を」
「力を殺ぐには手っ取り早く、かつ味方の損害を少なくできる。確かにアヴェストリアから見れば英雄だろうが、さて、相手から見たら何に見えただろうね」
「内であれ外であれ、民衆を蔑ろにする国は例外なく滅んでいます。歴史がそれを証明していますよ」

そもそも滅びない国は無い。

寿命の長短があるだけだ。
内憂か外患か、それがいつになるかも計れないが、弱者を虐げる国は悉く短命であることが多い。

「さしあたっては、我々が闇を払う種火となるわけだな」

せめて蝋燭ぐらいにはなりたいものだ、と普段よりも幾分精彩を欠く軽口を叩くと、ノックと共に新たな書類が運び込まれてきた。
部屋を出るときに聞こえた溜息は、果たして何に、誰に向けられたものだっただろう。

俺自身のためにも、獅子身中の虫は早めに取り除いておくべきか。
それを再確認し、しかしわずかな諦めを隠しながら、暗雲立ち込める秘書官室へと足を向けた。

第二十二話　甘き私よ来たれ

綿に墨を染み込ませたような雲が幾十にも層を重ね、季節を巻き戻そうとして冷たい水滴を投下させている。
二日前から降り続く雨は一向に勢いを弱める気配を見せず、それはまるで太陽と大地の仲を裂こうとする嫉妬のようでもあった。

しかし夏の厳しさを考えれば、この時期の雨量が少ないとより深刻な問題になってしまう。
そういう意味では自然の恵みとして忌避するべきものではないのだが、都合が悪いときにはそれさえも忌々しく思えてくる。
これも人間の度し難い一面だろう。

また一方では、準備のための時間が少しでも多く取れるというのはありがたい。
急激に膨らんだ組織を統合する作業というのは、どうしても少なからぬ時間を必要としているからだ。
だがそうも言っていられない事情も存在する。
当然、敵側にも同じだけの猶予を与えてしまうことになるし、何よりもこの雨季が終われば本格的に農作業が活発化するのだ。
戦いが避けられぬのであれば、できればその前に決着をつけたいという思惑がある。
勝敗を度外視するにしても、労働力がなければ農業が立ち行かなくなり、ひいては集団全体の基礎体力を削ってしまう。
そういった悪循環に陥ってしまうと、立て直すのにはかなりの時

間と労力を費やすことになる。

確か日本の戦国時代以前には農耕期に戦争を控える、といったような暗黙の了解があったはずだが、詳しいことは覚えていない。

もう少しそういった方面の歴史にも興味を持っておけばよかったかとも思うが、今さら後悔しても遅いだろう。

とにかく今は、あと半月ほどの間にカール・レオナルド・メクレンベルクを打ち破らねばならないのだから。

俺が紙の束から目を上げて椅子の背もたれに体重を預けていると、クリスが湿気を含んでおさまりの悪くなったクリーム色の髪を玩びながら、ここ最近で見慣れてきた灰色の景色を窓ごしに眺めていた。

雨続きで書類仕事が増え、時間に空白が出来てきた午後のことである。

「この雨に乗じて短期決戦を仕掛ける、か……」

子供じみているかもしれないが、未だ意に沿わぬ出来事に対しては寛容になりきれない。

その証拠に、確認のための言葉も不満でデコレートされて口から滑り落ちてしまう。

カール軍は北東に早馬で五日行程の町、ヴァンデルンを拠点と定めたようだが、今のところ大きな動きを見せていない。

その地域は雨季にだけ現れる川がいくつか散在しているため、その確認作業をしていると思われる。

必要にして十分な情報を纏めるのにはあと一週間はかかるだろう。
では、その期を逃さず叩くべきではないか――。
彼らが態勢を整えるよりも早く戦線を展開しようとするのは、毎年の観測を集積している陣営として当然だ。
革命軍上層部も、ほとんどがそのつもりで動いている。
いや、これはヴィッテルスバッハ卿の指示に依っているのだから、即ち全体の意思ということではあるのだが。

「一見、それが最善の策のように見える。俺たちには過去の資料があるし、特に今年が例年と変わるわけじゃない」

そうだ。
頭ではわかっている。
しかし意識の片隅では警鐘が鳴り続けているのも事実。
そのわずかな疑念は既に笑殺されているが、不安要素というものは切り捨てた時にこそ発現し、それは致命傷になり得る一撃であることが多い。

「貴様の懸念もわからぬではない。奴らが事前に情報を入手し、今は擬態でもって我々を欺こうとしているのではないか、と」
「そう、絶対に情報が漏れていない、なんて確証はないんだ」

先日の会議でもこの懸案は具申したが、一顧だにされることなく不採決の憂き目に会った。
漏洩している確証も無いうえ、過ぎる消極は臆病との謗りを免れない、という例のエセインテリ准将の言による。
多少強引ではあっても、勇猛、精悍を旨とする将兵にとって、臆病と言われることは死に等しい。
その論法を採られてはおとなしく引き下がる他なかった。

確かに情報の管理には細心の注意を払っていることだろう。
だが、厳重なプロテクトを誇るコンピュータでも重要機密が流出することは無くならないし、ましてや人の口に戸は立てられない。
実際、俺たちの側にはハンスという内通者が存在しており、同等の可能性を否定するには傲慢が過ぎる。
多くはない可能性であっても、警戒が足りるとは到底思えないのだ。

「私もそう思うが、今回に限れば杞憂ではないか？　内情を知っていれば他にやりようがあるだろう」
「だといいんだけどね……」

こちらの情報が漏れているのなら、これほど中途半端なことはしないはずだ。
速攻でもって混乱を誘ってもいいし、長期戦に持ち込んで兵糧攻めにしてもいい。
ただカールの人となりを聞く限り、採るならば前者の策であろうことは想像に難くないが。
そもそも大兵力を用意できる立場であるにも拘らず、それをしないのは故あってのことなのか。

或いは、何もかも知っていてなお、他の目的で動いているか……？

「……」

背中に得体の知れない悪寒が駆け抜ける。
他の目的があるとして、それがどのようなものかは見当も付かないが、だからこそ感じる種類の「イヤな予感」だ。

俺が巨大な人食い蛇だと思っているそれは、実はヒトを塵とも思っていない竜の類なのではないだろうか。

「どうかしたのか？」

俺はおかしな顔でもしていたのか、怪訝な様子で問いかけてきた。
同時に冷たい感覚も薄れ、突飛なことを考えてしまった頭を振って平静を取り戻す。

「いや、お茶請けに作っておいた大福がベッテに食べられてないか不安で」
「それを早く言わぬか！　厨だな？」

案外知られていないが、普通のうるち米でも餅が作れる。
もち米の澱粉はほとんどがアミロペクチンであるのに対し、うるち米は二割ほどアミロースが含まれているため、それを取り除く加工をしなくてはならない。
そのためには……いや、何を説明しているんだ俺は。

飛び出したクリスには悪いが、厨房の大福は既に完食されていることだろう。
何故ならば、それは巧妙に仕組まれた囮であるからに他ならない。
ひとたび隠されているものを見付ければ、それ以降さらに探すことはしない、という空き巣への対処法である。
俺は項垂れて戻ってくるであろう姫君のため、入念に隠されている真の大福を取りに向かった。

第二十三話　雨の幕開け

なだらかだがそれなりの起伏を持つ大地は、見据えた先が地平線と言えないほどには自然なうねりを造り出す。
辺りには身の丈を越すほどの高木も無く、ただ膝下程度の野草だけがここは自らの領土であることを声も無く主張していた。
しかし晴天ならば一面に広がるであろう野趣溢れる緑も、暗色のフィルターがかけられては本来の色が目立つはずもない。

本来聞こえるはずの軍靴の響きや馬蹄の轟きは、地面をしたたかに打ち付ける雨音によって幾重にも包み込まれている。

生い茂る草は足場の悪化を最小限に止めるとともに、逆に斜面では滑りやすくなるという負の要素も孕む。
これには人馬ともスパイク状の靴や蹄鉄を履くことで対策を講じていたが、多少ながらも機動性を犠牲にしている事実は否めない。
それでも平時ならば三日で済む道程を、この時期ならではの川越えをしたにも拘らず五日で踏破できた。
兵の精強さと同時に、少なくても今は急拵えの指揮系統が的確に働いていることの証左になるだろう。

総勢四万七千を数える革命軍は、この日、カール率いる皇国軍と対峙するに至った。

地形的には、起伏があるものの雨季の川は現れず、両軍が布陣す

るにはここしかありえないと想定されていた地点だ。
欲を言えばもう少し先に進み、前回と同じように渡河直後の不自由を強いる場所を確保したかったところだが、敵もそれを避けようとするのは当然である。
まして常勝を謳う皇国元帥がそうした凡愚を犯すことは考え難い。

俺たちは軍を三つに分け、変則的な三正面作戦を行うことになっていた。
義勇兵を中心とした三万が敵の三万八千を正面に引き付けているうちに、ヴィッテルスバッハ卿率いる一万が挟撃に当たり、残る七千の三個連隊は主席大佐としてクリスが指揮を執り横撃を加える。
兵力の分散という点で正道に悖(もと)るが、天候によって視界の利かない今であれば、各個撃破される可能性をかなり抑えられるだろう。
小集団は大集団を確認しやすく、発見されにくい。
都合よくも敵は一箇所に固まっているようだ。

「ヴィッテルスバッハ卿はうまく後背に回り込めただろうか」
「新参者の俺たちよりはうまくやるに決まってるさ」
「うむ、そうだな」

迂回するために二日前から別行動となった部隊の安否を問うにも、雨の障壁を破る声は大きくならざるをえない。
ここに来て雨脚は強くなる一方だった。
伏兵の存在を隠すには絶好の空模様と言えるが、それもそろそろ限界だ。
冷たく降り続く水滴は徐々にだが確実に体力を奪ってゆくし、いざ戦闘になった時にかじかんで動かないのでは話にならない。

兵たちは出来る限り音を出さないようにして体を温めているが、彼らの駆る馬はそうも言っていられないのだから。
予定では間もなく正面部隊が交戦に入る。

……ことさら雨中の戦いを選択した理由の一つに、決定的な要因があった。
銃火器。
カールはその重要性を早くから見出し、軍事レベルで有効に運用できるようにした第一人者であるという。
以前から戦争に使われてはいたが、単発式であることや命中精度の悪さ、短射程から来る懐に入り込まれてからの弱さが、最前線では敬遠されてきた主な理由になるらしい。
ではどうやって効果的に銃火器を運用したのか。
当然俺は三段構えで回転効率を上げ、敵を寄せ付けない弾列を敷いた織田信長の鉄砲隊を連想した。
実際に長篠の戦いに於いてそれが行われたか、という考察は置いておくにしても、なるほど、理に適っているように見えるのも確かなのだ。
それを告げた時のクリスたちは一様に驚きの表情を見せたものだから、俺の優越感はわずかながらも心地よい刺激を享受したわけである。
要するに、圧倒的な火力を誇る銃火器を数多く揃えているであろうカール軍にとって、火薬の使えなくなる雨は大きなマイナスとなり得るということだ。
単純な兵力ではこちらに分があり、装備も大差ない。
ならば勇猛並ぶ者無きヴィッテルスバッハ兵にとって、負ける要

素など見当たらないではないか。
俺は直前まで拭い切れなかった不安をこうして無理矢理抑え付けたわけだが、それでも咽喉に引っ掛かった小骨のような違和感は決して消えてはくれなかった。

「それにしても私はもっと貴様がごねるものと思っていたが」
「……俺にそんな権限があればそうしてるけど。それに、説得力のある代替案は思い付かなかったから」
「生真面目な奴だ」
「そんなつもりはないけど、まあ、ヒューゴやベッテなんかよりはそうかもね」

呆れたように肩を竦めるクリスに曖昧な表情を向けてはぐらかす。
策が無かったわけではない。
しかしそれは勝率と比例して損害も増えてしまうものばかりだった。
長期戦になれば集団としての体力に劣る俺たちが不利になるのもわかっていたし、やはり何より死傷者が増えるであろう作戦を進言するというのは、俺自身の精神的な体力を必要とするものでもある。
今回の作戦はより短期で、より少ない損害で、という点では文句のつけようがなかった。
ある一点、よりハイリスクになりうる可能性を除いては。

趣味的な歴史愛好者の弊害だと個人的に思っているが、比較的ほぼ同等な条件での戦争は興味を持ちづらい。
少数を以って多数を打ち破るような英雄譚、その際の魔術的な戦

術、戦略、或いは歴史的な敗者側から描かれる美談や群像劇に憧れて歴史に傾倒する、というのは少なからず存在すると思う。
例えば三国志演義や新撰組関連あたりから歴史に興味を持った人もそうした傾向があるのではないだろうか。
つまりは現実としての「戦争」を知らないわけで、寓話になるような衝撃的なできごとの他は一般人とそう変わらない程度でしかない。
賤しくもその代表である俺が、歴史上の英雄のように独創的な思考の芸術を練り上げることはできるはずもなかった。

言い訳をさせてもらえば、俺の興味の中心は「戦史」であって、「軍事史」ではなかったということだろう。
戦争の起きる原因とその結果、さらにはそれに起因する文化、風俗の変遷は熱心に紐解いたが、戦争に勝つための手段を学んだわけではない。
……それが免罪符になるとは思わないが。

「貴様は……」
「戦闘、開始しました！」

駆け付けた伝令の報告がクリスの言葉をかき消し、防音壁を貫いて喊声と地鳴りが届く。
何かを言いかけていた上官に目をやると、この話はまた後で、とばかりに強い意思を湛えて頷いた。

「では、我々も往くぞ！」

馬上で剣を抜き放った指揮官はそのまま天にかざし、一拍を置いて水平まで振り下ろす。
いつの間にか聞こえていたもう一つの轟きに触発されたかのよう

に、音の濁流となって進軍を開始した。

第二十四話　膠着は疑念となりて

小さな丘を二つ越え、やや大きな三つ目の頂まで来ると、ようやく敵味方の判別ができる程度には幽かな影を確認できた。
打ち合い、時には擦れるような金属の音は雨を圧して響き渡り、統制が取れているようでいて実は全体的に調子が外れているだけの雄叫びが大地を揺るがしている。

戦局は想像していたよりも大きく動いていた。
開戦からまだ間もないことでもあり、この時点では膠着しているだろうと踏んでいたが、一息ごとに戦列を押し上げている。
両陣営は互いの高い位置から中央の低い位置――川になるほどではないが――へとなだれ込むようにして戦端を開いていたが、戦意の高い義勇兵によってカール軍の先陣ははじりじりとではあるが後退を余儀なくされているようだ。
恐らく既に後方では殿軍とヴィッテルスバッハ隊が交戦しているのだろうが、ここからは視認することはできなかった。

盾と槍を主な兵装とする白兵戦の場合、日本の「合戦」のような乱戦にはなりにくい。
甲冑をよろった兵が横一列で前面に盾をかざして壁となし、その隙間から攻撃、或いは盾同士をぶつけるようにして押し合うため、

よほどのことがなければ敵味方が入り乱れるということは少ないのだ。
これは乱戦による不測の被害を抑えるためではあるが、故に戦力差が少ない場合は得てして消耗戦になりやすいという欠点もある。
結局はより強い圧力で敵の列を打ち砕いた側が勝者となるのだが、実際はそう単純でもない。
波状攻撃であったり一点突破であったり、或いは擬似後退によって敵戦列を乱すなど、いかに隙を作るかという知略戦の一面も持っている。
つまり普通はこのまま削り合うのではなく、何らかの前哨戦としてこの形を採ることが多い、というところだろう。
ただの力押しで決着するのなら、そもそも戦争など成立しないのだから。

俺たちの三正面作戦は、もちろん混乱を誘うこともひとつにあるが、本来は柔軟な作戦行動を行うために採用された。
敵が三方向に戦列を構えるならば半包囲態勢に移ることができ、正面か後背に向けて突破を図ろうとすれば攻勢を受けない二隊を糾合し挟撃に当たり、側面を抜けようとするならばただ挟撃の餌食となる。
開いている一方に後退しようものならそこは下り斜面であり、数と勢いで勝る全軍を以って殲滅してしまえばいい。
敵にしてみれば、消耗戦になる前にいずれか一方を打ち破って各個撃破、または逆に半包囲を仕掛けようとするのが基本的な考え方になると思うのだが、果たしてどのような手を打ってくるものか。
今のところほぼ同数の兵力であることも手伝って戦況は緩慢に推

移しているが、流れを加速させる一石は時を置かずに投げ入れられる。

「案外押しているな。このまま一気に趨勢を決めてしまうぞ」
「それは賛成だけど、押しているせいで直進するとただ合流するだけだ。念のため回り込んだほうがいい」
「よし、では迂回して丘を下り、側面から攻撃する」

雨避けも無く疾駆する馬上で、鈍く輝く剣を進路に向ける。
ただそれだけで自らの体のように人の波を操っていた。
将器――現代風に言えばカリスマとでも言おうか――その類稀な才能は視界の不良による指揮系統の乱れなどとは無縁であるようだ。

神速と言っても過言ではないほどの速度で敵側面に回り込み、控えめに言ってもけしかけたとしか言えないようなクリスの号令で突撃する。
慌てふためく敵集団を騎兵が一撃離脱によって突き崩し、その隙に歩兵が長槍を駆使して牽制しつつ、重装兵が大盾を並べてゆく。
理想と寸分違わぬ完璧な形で俺たちの戦いが始まった。

普段なら止めても前線に出て行くクリスではあるが、今回はさすがに大人しく後方指揮に徹している。
というのも実は甲冑を着て大盾を構えることができなかったからで、それさえできればすぐにでも飛んでいくのだろう。
俺も試しに着てみたが、あんな重いものを身に着けて動ける人間を女性とは認めない。
つくづく日本人はこういうことに向かないのだなあ、と思ったも

のだ。
決して負け惜しみとかそういった類ではない。
「さて、このままとも思えぬが……どう思う？」
既に俺たちが参戦してから、両陣営ともさしたる被害も無いまま一時間ほどが経過していた。
初撃こそ効果的に機能して優位に立ったが、さりとて敵もやるもので、わずかな時間で立て直して抗戦の構えを取った。
しかしそれ以降も前線には三つの連隊を順に当たらせているが、あまりにも反応がお粗末に見える。
押せば退かれ、退けば押され、まるでこちらを観察しているようだ。
その違和感に、やはりクリスも気付いていたらしい。
「何かを待っている感じだとしか」
「増援か？」
「可能性としてなら、そうだね。でもその気なら最初から大兵力を揃えることもできたはずだし、わざわざ別働部隊を組織するとも考え難いんだけど……」
それは「そうしないことに意味がある」ということでもある。
表面だけをを見るなら、俺たちを討つのにはこの程度で十分、という挑発のようだが、そんな見え透いたことをするだろうか。
示威行為ならば正規軍を伴って数で圧倒するほうが効果的で、かつ風聞するカールの性格に沿うように思えるのだ。
ただし権謀術数は用いても小細工は弄さない、という俺の評眼が正しければ、ではあるが……。
「大外れでない方法としては、有り得るかもしれない」

今になってこの可能性に気付いた自分に憤りすら覚える。
急拵えとは言え、不足の無い戦力を有したが故の気の緩みがそうさせたのか。
戦略家としてのカールが何を以って勝利たらしめようとしているか、ということにまるで思いが至らなかった。
一つの戦場の結果を無視できるほどの「何か」があるとしたら？

「大外れでない、というのはどういう意味だ」
「増援があるとしてもここには来ない、というのはどうかな」
「……シュトルーヴェか！」

寄せ集めの兵を囮に、本命の正規部隊が手薄な城を急襲、陥落させる。
城に残っている人数はそれなりのものではあるが、統率の取れていない集団は良く言っても烏合の衆でしかない。
抵抗らしい抵抗もできずに払い除けられてしまうだろう。
仮にここでカールを打倒、或いは捕らえたならば勝算は見えてくるが、そんなことがわからない敵ではない。
この策を採っているとすればここにカールはいないと見るべきか。
ならば先程からの鈍重な動きにも説明が付く。
あとは補給がままならなくなった俺たちを捻るのも、人質を盾に降伏を勧告するのも自由自在というわけだ。

「もしそうされていたとしたら、俺たちに勝ち目は無い」
「いや、今から戻れば間に合うかも知れぬ！」
「落ち着いて、クリス。カールがそうしようとしているなら、もうひとかけらですら勝ち目は無い。でもそうじゃなかったら？　勝てる可能性を棄てて敵に背を向けるの」
「……絶対に間に合わんのか」

「クリスは俺よりもカールのことを知ってるはずだよ」
「そうだな……そうだ。奴がそんな猶予を残しておくわけが無いな」
動揺と焦りで震えていたクリスに落ち着きが戻ってきた。
諦めの成分もいくらか含まれているが、狼狽しているよりは何倍もいい。
俺の言ったことは詭弁でしかないことはわかっているだろうが、それでも俺たちはそれに縋るしかないのも事実だ。
それにこのまま何事も無く勝てるならば、今のやりとりも妄想に振り回された馬鹿な出来事として笑い飛ばせば済む。
是非そうなってほしいものではあるが。

「ならば、まずは当面の憂いを断つとしようか、中佐」
「敵は持久の構えを解きません。しかし、我々がそれに付き合うというのも間の抜けたことではありますね、大佐」
短い時間の中で活力を取り戻した上官が悪戯に微笑む。
こうでなくてはいけない。
無闇に時間を費やすだけの戦い方がこの少女に似合うはずも無かったのだ。
「前線に伝令！　一時後退、連隊ごとに紡錘陣を組み、敵防衛線を突破せよ！」
……結論を言えばその指示は適切だったのだろう。
高揚に起因する粟立ちは、だが、他の原因に取って代わられるま

でそう長い時を必要としなかった。

第二十五話　止まない雨

長らく続いた雨も終息に向かい、厚く空を覆っていた雲の隙間からは申し訳なさそうな光がこぼれている。
以降は雨も少なくなり、加速度的に気温が上昇していくことだろう。
日本では梅雨明け宣言が出されたからといって誰も安易に信じることはないが、ここでは時季の終わりごろに降る大雨できっちりと最後になるらしい。
にわか知識で理論付けるならば、東風に乗ってやってくる雨雲が西の山脈にぶつかることで雨季を作り上げるため、少し前から南風になるこの地域には雨雲が入り込まないのだ、と納得してみる。
しかし人は科学に頼らなくても、生活に必要なことはどうにかしているものだ。

濡れた軍服は鉛を繋いだ枷のように重く纏わりつくが、その不快感はほとんど気にならない。
何故ならば、俺はそれ以上に重い敗北感と歩みを共にしているからだ。
少しだけ前を行く俯いたままの少女も同様だろう。
いや、或いは同様などと思うのは思い上がりなのだろうか。

今、俺にはかけるべき言葉が見当たらない。

……昨日のことだ。

まだ強く雨が降っていたころ、俺たちは閉塞している状況を打ち崩そうとして一旦後退し、突撃態勢へ移ろうとしていた。

そしていざ、という最中、あまりにも耳慣れない音に鼓膜が掻き毟られる。

慣れてはいないが、記憶の片隅に刻まれた音に似ていた。

それは上方から下方への水の流れ。

特に直瀑と呼ばれる形の滝の音に近い。

その音が向かう先は、はたして滝壺ではなかった。

例年この周辺が川にならないのは、上流にある丘が堰となって流れを押し止めていたからだが、カールはさらに上流からこちらへの支流を作り、同時に本流を遮って強引に川筋を変えたものと思われる。

濁流は途中の木々を圧し折りながら下り続け、それは危険な凶器となって俺たちを直撃した。

俺たちを、と言うが、正確には敵味方無く、だ。

倒木や岩を抱えた流れは速く、気が付くのに少しでも遅れるか、また気付いても場所によっては、比較的密集している陣形であることも手伝って、いとも簡単に同胞であるはずの者まで飲み込んでいった。

軍馬の嘶き、金属の軋む音、張り裂けるような悲鳴。

奔流はそれらを瞬く間に掻き消し、ただ自然の理に沿って低い位

置へと押し流していく。

俺たちは最も下流に陣を敷いていたためにほとんど被害を被ることは無かったが、七千のうち半分ほどが対岸へと渡ってしまっていた。

とは言え、三万の義勇軍は大半が失われ、敵にしても半数までが川に飲まれた中で、ほぼ無傷で切り抜けられたことは幸運と言えるだろう。

何せあのまま前線にいたのなら、どう見ても助からない位置だったのだから。

こちらに川を呼び込む、という策は考えないでもなかった。

ただそれではどうしても味方にまで被害が及ぶし、敵であっても助けを請うものまで殺してしまうのは心苦しい。

さらには下流には農地が広がり、濁流に飲み込まれてしまうと再び開墾するのに余計な手間がかかる、ということもある。

いくつか考えて切り捨てた代替案のうちの、一番初めにお蔵入りした方法だ。

しかしカールはやってのけた。

不審に思っていた「寄せ集め」はこのためのものだったのだろう。

正規軍は一兵も損なうことなく、彼にとっては極めて効率的に勝利へと近付いた。

この際、「寄せ集め」の反感情は表面化しない。

彼らは自らの自尊心によって望んで従軍しているものが大半であり、仮にそうでなくともカールの恐ろしさを肌で感じたからだ。

逆らえば一片の容赦もなく殺される。

それを確信していて反抗できる人間などそう居るものではない。

もちろん火種として燻ることはあるだろうが、存外勝ち続けているうちは沈静化しているものだ。

カールにしてみれば負ける気もないわけで、つまり一向に問題無いということになる。

岸のこちら側には直属であるアッテルベリ連隊三千、義勇軍のうち難を逃れたものが二千。

あちら側には敵の残り一万五千とヴィッテルスバッハ隊一万、そして川を越えた四千。

川幅は目測で五十メートル以上もあり、今や川を越えるのは至難であれば、ほぼ同数での決戦となるはずだった。

川筋を変えたことによる二次的効果――或いは真の狙いだったのかもしれないが――それは元の川が無くなること。

戦場とヴァンデルンとの間に流れ、あわよくばその水際で叩ければ、と考えていた雨季の川。

水の捌けた川は既に川とは呼ばれず、虎視を耽々と光らせていた直属近衛兵二千が騎馬で以ってヴィッテルスバッハ隊の後背を急襲した。

壊乱したヴィッテルスバッハ隊は一息ごとに突き崩される。

わずかな抵抗の後にはヴィッテルスバッハ卿の周囲は敵の槍で埋め尽くされていた。

俺たちはヴィッテルスバッハ卿や捕らえられた仲間を救い出すこともできず、恨めしげに両岸を分かつ川を眺めるしかなかった。

……その後、人質の命を盾に投降を迫られるかと思っていたが、伝えられたのは「人質が惜しくば城に戻れ」というものだった。

実質投降と変わらないようにも思うが、何らかの意図があるものと思われる。

そして今は、怪我人をまとめて城へ戻る途中というわけだ。

雨は上がったものの、負傷者を抱え、馬の多くも失ったことで足は遅い。

十日で着ければ御の字というところだろう。

「貴様の言ったとおり、やはり地理は筒抜けだったようだな」

昨夜以来、必要なこと以外喋らなかったクリスが口を開く。

「いや、それだけでもないか。我らに、私に力が足りなかった。情報の流出を念頭に置いていれば決して読めない策ではなかった。その策を逆用することも、事前に防ぐこともできた。そうでなくても、もっと早く敵陣に届いていればカールを捕らえることもできたはずだ」

俺に向けていたはずの言葉は、おそらく半ばでその役目を終えている。

いつになく饒舌な少女は、そうすることで悔恨の念を吐き出してしまいたいのだ。

経験上、それは一時凌ぎに過ぎないことを俺は知っているが、経験してみなければわからないことでもあり、同じ過ちを繰り返さないための通過儀礼でもある。

人生に於いては後悔を抱えることが肝要だったとしても、少なくとも今は、先を考えなくてはいけないのだから。

「まだ終わったわけじゃない」

ふと口を付いて出たのは、いかにも青臭い台詞ではあったが、口にすることで生まれる希望もあるらしい。
それに共鳴したのか、無理にでも乗りかかろうとしたのか、本当のところはわからないが、クリスは背を伸ばして頷いた。

「当然だ。私はまだ終わらせるわけにはいかぬ」
「……そうだったね。人質をとられているのは難しいけど、何もするなと言われたわけじゃない。何かいい方法を考えないと」
「それが貴様の仕事であろう、まさか今まで考えていなかったのか？」
「それは厳しいな……」

ちらりと振り向いた翠緑の瞳が笑う。
多少の軽口でも、できないのとでは天地の差だ。
まだやれる。
そう思っていなければいられなくても、前に進むためにはただ沈んでいては何もできない。
同盟を結んだ各領に頼るという手もあるし、確率としては隠密に救い出すことも不可能ではなく、或いは全面降伏を「してみせて」もいい。

一般的に、人質を取ったということは交渉する余地があるということだ。
その真意は計り切れないが、簡単に終わるはずの城攻めをしなかったのもそのためではないだろうか。
であれば十日は長い時間ではなくなる。
出来得る限りカールの思考をなぞり、企図するところを汲み出して対応策を練らねばならない。

……それにしても、悲観的な想像というのは何故こうも構築しや

すいのだろう……。

第二十六話　夜は未だ明けず

長かった雨も上がり、例年であればにわかに活気付くはずの城下町は、通年でもありえないほどの静けさに支配されていた。
ただそれも虚無の静謐と言うわけではなく、そこかしこでさざめくような、普段の生活をしつつ物音を立てまいとしているような、そんな不自然さを伴っている。

しかしそれも止むを得ない。
意気軒昂と出陣した軍が大敗し、領主たるヴィッテルスバッハ卿が敵の手に落ちたのだから。
贔屓のプロ野球チームがホームゲーム三連戦で零封を喰らい、エースピッチャーと四番打者が戦線離脱した、そんな時のファンの気落ちに通じるものがあるかもしれない。

一応箝口令は敷いてあるとはいえ、家庭に戻った兵士が家族に口を滑らせてしまうこともある。
そしてそうした話は、どこの世界でも驚異的な速度で広まっていくものだ。
町を見下ろす廊下の窓にもたれていると、筋肉の鎧を纏った大男が赤銅色の髭を不機嫌そうに捻りながら話しかけてきた。

「どいつもこいつも気が早えな。もう辺境伯の葬式でもやるつもりなのかね」
「スヴェン……」

不穏な発言が耳に届いたのか、通りがかった女中が肩を震わせ、早足に離れていく。
だがそれを気にした様子もないのは、この男の凄いところなのか、そうでないのか。

「気持ちはわかりますけど、誰がいるか確認ぐらいしてくださいよ。ただでさえ声が大きいんですから」
「ふん、この陰気くさい空気が性に合わねえんだよ」
「……理由になってませんね……」

それでも気にしてくれたのか、辺りを睥睨しながら壁に背を向けた。
こんな猛獣のような目で睨み付けられたら、急ぎの用事があっても遠回りしていくに違いない。

苦笑を押し殺して外に目を向け、もう少しでまとまりそうな考えを弄ぶ。
カールは何故俺たちを城に帰したのか。
人質を取ってはいるものの、未だ戦力を保有する敵を野放しにして何を目論んでいるのか。
正々堂々と正面決戦をするため？
ありえない。
目的はヴィッテルスバッハ卿だけで、俺たちは見逃された？
そんなわけがない。
反乱分子を徹底的に殲滅するため？
……それしかないように思う。
では、どうやって。

「ちょっといいか」

わずかな沈黙を破ってスヴェンのかすれた声が響く。
声の届きそうな範囲には誰もいなくなっていた。

「俺たちはもう終わりか」
「いいえ」
「勝てるのか」
「……いいえ」
「正直すぎるのも考えもんだな」
「ですよね」

片頬を吊り上げる独特の笑いかた。
今ではそこに様々な感情を乗せていることがわかるが、その笑みを子供に向けると立ち竦むか泣くかする、というのもわからなくはない。
気のいい人食い鬼、というベッテの第一印象評価は、残念ながら的を射すぎていて反論のしようがなかった。
外を眺めたまま話を続ける。

「このままだと遅かれ早かれ、いずれ負けるでしょう」
「どうにもならねえのか」
「……ヴィッテルスバッハ卿や捕虜になった者たちを見捨てれば或いは、というぐらいです」
「それは……」
「無理でしょうね。士気を維持できる自信はないですし、何よりお姫様が黙ってません」
「人質を極秘に救出するのは無理か？」
「一人二人ぐらいなら助けられるかもしれません。しかし捕虜となったのは一万人ほどと想定され、彼らを放っておいてはヴィッテルスバッハ卿が由としないでしょう。結局は堂々巡りです」

どうにか勝てる方法はないか、と昼夜休まず考えを巡らせたものの、出てくる答えは総て「否」。
捕虜を見殺しにしたとしても勝率は一割あるかどうか、という体たらくだ。
仮に連合領に助力を要請できたとしても、そう結果は変わらないだろう。
ならば善後策を採るしかない。

「そこで、スヴェンにやってもらいたいことがあります」
「ま、できることならな」

数日の間にはヴィッテルスバッハ卿が捕らえられた事実がかなりの正確さで認識されるようになった。
領外にも噂は届いているようだから、ほぼ間違いなくカールが意図的に流布したものだろう。
情勢は加速度的に悪化していく。

日和見なものは早々に見切りをつけて無関係を決め込み、そうでなくても無条件に物資を供給してくれる商隊は減ってきている。
利益が見込めないところに資本を投下する商人などいるはずもないし、それに反乱勢力に味方した、と難癖を付けられて今後商売ができなくなる可能性も少なくない。
食料もなしに戦争ができると思っているのは、幼児か無能な貴族ぐらいなものだ。
微細な補給線と城の備蓄から計算すると、三万の兵士を食わせるのはひと月と一戦程度が限界と言える。

「……どうしたものかな」
「奴は何も動きを見せないのか」
「これといって表立ったものはないね」

兵糧攻めというのは攻城戦のオーソドックスと言えるだろう。
しかしそもそも城とはいえシュトルーヴェは特に要塞化されているわけでもなく、確かに難攻たらしめる天然の要害があるために迎撃は容易だが、無防備な城下町を抱えているために篭城には向かないのだ。
万端な準備ができるのならば難攻不落も謳えるが、今のような状態では普通に攻められるだけで厳しいと言わざるを得ない。
そこに敢えて持久策というのは、万全を期すにも程がある。
カールの狙いが俺たち革命軍の完全制圧だとしたらなおさら、ひとつひとつ速攻で以って各個撃破するのが最上と思えるし、彼の気性はそれを是とするように思う。
そう仮定すれば近いうちに何らかの動きがあるはずなのだが、一向にそうした気配を見せないのが不気味さを感じさせる。
或いは俺たちをここに封じて衰弱させているうちに他に当たる、ということも考えられるが。

「とりあえず明後日には同盟の領主が集まって会議することになったから、細かいところは今日のうちに片付けてしまおう。はい、これが今回の損害報告書と新編成の要綱、こっちが備蓄管理班からの明細だから目を通しておいて」
「焦っても仕方ないか……。主な議題としては交渉内容を諮るのだったな」
「まあカールが交渉に応じてくれるかもわからないけどね」
「でなければもう殺されている」

それはそうなのだが、既に殺されているが隠匿されている、とい

う可能性だってある。
当然交渉できるとなれば安否の確認は最優先事項だが、仮に最良の形で交渉を終えることができても無事帰れるという保障もない。
どちらにしろ圧倒的に不利な立場であることに変わりはなく、万の策で備えても足りることはない。

その危険を諫言するべきか迷っていると、重いドアをノックする音で機を逃した。

「入れ」

隙のないさわやかさで敬礼するヴェストベリ少尉だが、どうやらかなり慌てているようだ。
普段は定規を当てたように真っ直ぐ揃える指先が、力みすぎて甲側に反っていることに気付いていない。

「どうした？」
「南展望台が南南東より進軍してくる部隊を確認しました」
「数は」
「およそ四万ほどと思われます」

静かな戦慄がそう広くもない部屋を満たす。
南南東？
同盟しているはずのイェンネフェルト伯爵領から四万もの軍が来るなど、全く想定していない。
まさか既にカールによって攻略されてしまったのか。
それとも――。

「南展望台に行くぞ」

そうだ、まずは現状を確認しなくては。
小鹿のような身軽さで駆けてゆくクリスに気付き、急いで後を追う。
何事も杞憂であってくれたらいいのだが……。

「いや、驚かせてしまったようで申し訳ない」
……まさかとは思っていたが、大軍を引き連れてきたのはイェンネフェルト伯爵だった。
ヘンリック・マティアス・イェンネフェルト。
ところどころ白髪の混じった銀髪を丁寧に撫で付け、俺の目には過度に思える装飾が施された服を厭味なく着こなしている様は、まさに現代日本人が思い描くとおりの貴族といった出で立ちだ。
年齢は四十に届いていないということだが、どこか老け込んだ印象を与える。
イェンネフェルト伯爵を出迎えるために、佐官以上の文官武官は大広間に集まっていた。

「思いのほか早いご到着で、何事かと思いました」
「いや、准将、盟友の危機だ、居ても立ってもおれずに兵を急がせてしまったよ」

守備隊として残っていたエセインテリ准将が現在の司令官代理となっている。
甚だ不満ではあるが、階級のより高いものが上に立つのは普通のことであり、残念ながら他に准将以上の階級を持つ者はいない。
とはいえ、今はクリスが最上位でなくて安堵してもいた。

爵位を持つ者の中にはクリスティナ・エリーザベト・メクレンベルクを知っている者がいるかもしれないのだから、極力目立たないほうが都合がいい。

「それにしてもこのような大軍でおいでになることもなかったのでは？」

「いや、有事の際にはすぐに動かせる戦力があったほうがいいだろう。そうは思わないかね？」

「は、ご慧眼恐れ入ります」

「いや、きみも励みたまえよ」

話し始めるのに「いや」と言うのは癖なのか、直接話しているわけでもないのに悉く神経を逆撫でされているように感じるのは何故だろう。

恐らく生まれついた地位に胡坐をかいている人間に対する反抗心なのだろうが、少なくとも俺は好きになれそうもなかった。

どうやらアルヴィーカからの面々は皆そうであるようだ。

スヴェンなど露骨に唾を吐きたそうにしているのが見て取れる。

「いや、私の歓待に出向いてくれたのは嬉しいが、きみたちにも各々仕事があるだろう。私のことはもういいから持ち場に戻るといい」

そう言ったイェンネフェルト伯のありがたい心遣いによって、俺たちはひとまず解散の運びとなった。

出迎えてもらうのが当たり前だと思っている物言いに新たな苛立ちをおぼえつつも、一瞬でも早くこの場を去りたいと思った俺は根っからの一般人なのだと再認識した。

その後、クリス、スヴェンと小一時間イェンネフェルト伯の気に入らないところを言い合ったのは仕方のないことだと思う。

夜が明けるには、まだいくばくかの時間を必要としているようだった。

第二十七話　胎動

「いたいた、レイジ君！」

イェンネフェルト伯の陰口にも飽き、いささか失われていたやる気を奮い立たせて執務室に向かっていると、見るからに不機嫌そうなベッテに呼び止められた。

普段は几帳面に着こなしているはずの猫が綻んでいるということは、よほど堪りかねているものと見える。

こんな状態のベッテに構うと身の安全が危ういような気もしているが、さすがに名指しされて無視するわけにもいかないだろう。

「どうしたの？　ずいぶん荒れているようだけど」

「そりゃあ荒れもするわよ！　あのビビリ野郎の相手なんかするんじゃなかったわ！」

「それはご苦労様でした」

綺麗に切り揃えられた紅茶色の髪を左右に振り乱しながらも憤慨は続く。

「何百人も衛兵連れて歩いちゃってさ、怖いなら布団に潜ってガタガタ震えてりゃいいのよ！　城の中のこともさ、どこに何があるかとか出口はいくつあるかとかそんなことばっかり聞くんだから！」

「危機意識の高い人なんだろうよ」

あまりにも小物感溢れるイェンネフェルト伯の行動にうんざりし

て溜息を吐く。
伯爵を守るように立っていた完全武装の衛兵たち。
聞いた話では二百人前後、中小規模の学校なら一学年全員ほどにもなる。
そう広くもないシュトルーヴェ城内でいったい何から護衛するつもりなのだろうか。
しかもそれは「城内に入った人数」だけで、城外にもざっと見て二千人、連隊規模の衛兵団が詰め掛けていた。
俺の知る限りでは、いくら同盟を結んでいたとしても許可無く軍を城の敷地に入れるのは常識外れと言える。
通常いくらか離れたところに陣を取り、少数でもって入城するのが礼儀というものだ。
それを制止しようともしなかった准将もどうかと思うが、四万もの兵士が城下町を包囲するように駐留している様はとても気分のいいものではない。
よほど小心者なのか、或いは主であるヴィッテルスバッハ卿がいないのをいいことに増長しているのか。
とにかく、どちらであっても好人物でないことだけは確かだ。

「何よ、あいつの肩持つの？」
「そんな気はベッテの良心ほどもないね」
「ならいいわ。まったく、今度呼ばれても絶対行かないんだから！私を見る目も汚いし！」

……良心がない、はスルーでしたか。
まあ、自覚があるというのはいいことだ。
ただそれ以外に気を取られていて気付いてないだけかもしれない。
気付かないうちに話をすり替えておくのが賢明だろう。

「それで、俺に何か用でもあった？」

「え？　ああ、そうだった。さっきカッセル中佐に今夜クリスの相手しててくれって言われたんだけど、どういうこと？」
「そのことか、実はさ……」

どうやらスヴェンは面倒だったようで、理由も告げず目的だけを伝えたらしい。
真実を隠しつつ大筋をかいつまんで、クリスには聞かせたくない話をしたいんだ、と説明すると、鷹揚に頷いて了承してくれた。
目を細めて薄い唇をを半月型に吊り上げているのが不気味ではあるが。

「うんうん、たまには男だけで話したいこともあるわよねえ」
「……何を想像してるか知らないが多分違うからな」
「はいはい、いいから私に任せなさい」

ひとりで勝手に納得すると、憮然とする俺を嘲笑うかのように、先ほどの不機嫌を忘れさせる軽快さで戻っていた。

夜。
いくら気配が去ったと言っても、先日まで降り続いていた雨の影響は少ないものではなかった。
昼間に暖められた地面は蓄えられた水分を地味に空中へと吐き出し、下がりきらない気温と相まって高い不快指数を維持し続けている。
救いは朝方から吹いてた山風だったのだが、先程からその勢いに陰りが見え始め、生温く纏わり付くだけの不快指数悪化要素としての貌を覗かせてきた。

どうやら風までもが仰ぐ旗を持ち替えて俺たちを辟易させるつもりらしい。

俺は今、クリスを筆頭とする部隊の、だがクリスを除いた主だったものたち――俺を含め佐官以上に任命された十四人である――と会議を行っている。

昼にスヴェンに頼んだ仕事のひとつが、クリスや他の人間には極秘裏にこの場を設けることだった。

もちろん正規の手順を踏んだ公明正大なものではない。

基本的に軍隊における会議の内容などは他言無用であり、内々に秘められるものが多いことではあるが、今回は根本的なところで趣を異にする。

会議、と言うよりはむしろ謀議と言ったほうが正しい。

「……今回の戦、既に勝ち得る術はない、と？」

普段から比較的難しい顔をしているクリングヴァル中佐だが、さらにその風合いを強めている。

それもそのはずで、あなたたちは負けですよ、などと言われて穏やかな顔をしているほうがどうかしているだろう。

例え薄々感付いてはいても、他人に言われると急に不愉快に感じるものだ。

じんわりと噴き出す汗と、液体になるにはあと一歩足りない湿気によって張り付く服も、ここぞとばかりに非生産的な相乗効果を発揮していた。

もしあるなら除湿機を設置したいところだが、コンセントもないこの場所では邪魔な置物でしかない。

なるべく大袈裟にならないように服をつまみ、肌との間に空間を作って気を紛らわせながら話を続ける。

「そうです。このままでは戦っても戦わなくても、最終的な結果は変わりません」

この場合の結果とは、単純に敗戦を意味するものではない。

戦って負ければもちろんのこと、戦わずに交渉で切り抜けたとしても「革命」の芽は刈り取られてしまう。

国を変えることが目的の蜂起である以上、それを志し、達成できる器を持つ人物がいなくてはならない。

戦死、処刑、投獄、監禁……いずれにしても負ければ避けられぬことだ。

ただ手をこまねいていては先は決まっている。

ならば。

「戦えば確実にヴィッテルスバッハ卿のお命は失われるでしょうな」

「そしてなお勝機は遠いままだ」

「しかし交渉の次第によっては皆助かるやもしれぬ」

「仮にそうであっても、助かるのは命だけだろうが……」

クリングヴァル中佐とフェーンストレム中佐が同時に溜息を押し殺したが、やはりどちらも落胆を隠せない。

それぞれが俺の年齢以上の戦歴を重ねていれば百戦して百勝とはいかないだろうが、それでもやはり敗戦というのは慣れることがないのだろう。

考え込むように目を伏せ、何がしかの覚悟を決めようとしているように見える。

「我々が今やらねばならないことは、火種を残すことです。そしてできれば小さいものよりは大きいものを」

息を呑む音が終わると静寂が舞い降りる。

どうやら皆、俺の言わんとするところに気付いてくれたようだ。
渋面を滲ませるものたちには悪いが、ここに優秀な人材を集められたことには満足を覚えずにいられない。
よくもこれほどまでに敏い人間が集まったものだ。

「そうですな、大局を見ればまだここの負けなど取るに足りないものでしょう。そう考えれば最も優先されるべきはアッテルベリ大佐が生き延びることですからな」

一瞬、時間が止まったように感じた。
その言葉の意味を理解できたのは、恐らく俺とスヴェンだけだっただろう。
火種となる重要な人物を逃がす、という共通の認識はできていたと思うが、大多数のものがそれはヴィッテルスバッハ卿であると勘違いしていたはずだ。
もちろん、知らなければ当然のことではあるのだが。
だからこそ、クリングヴァル中佐の発言は、知るものにも知らぬものにも驚きを与えずにはいられなかった。

「何故大佐なのですか？」
「確かに人を惹き付けるものはお持ちだが、指導力や象徴としてはヴィッテルスバッハ卿のほうが優るのではないか」
「対外的な名声と言う点でも比べるべきところは無いように思うが……」

各所から疑問が沸き起こる。
しかし老将は微塵も気を揺るがせず、窘めるように一瞥してから語を次いだ。

「ヴィッテルスバッハ卿がこの土地を守る領主であられる以上、そ

れを放り出しては誰に向かって大儀を唱えることが適うか」
「それはそうだが……」
俺が言えば詭弁にしかならないことだ。
何せ主を生贄にして逃げ出そうとしているのだから、新参者が言っても聞き入れられるものではない。
勇猛を以って鳴らし、忠義の士として名高いアンデルス・クリングヴァルその人の言であってこその重みである。
その決断には想像も及ばない葛藤と苦悩があっただろう。
思わぬ助け舟に感謝しつつ、後を引き受ける。
「今後交渉の場が設けられた場合、ヴィッテルスバッハ卿他一万の捕虜解放を要求する方向ですが、その見返りとして最低でも革命軍の解散は免れないでしょう。これを円滑に成功させるには絶対にヴィッテルスバッハ卿が必要なのです」
全員の不満がなくなったわけではないが、消極的にであっても認めざるを得ない、という様子で頷きあう。
「そして火種となるのは、行方をくらませても差し支えないアッテルベリ大佐ということですな」
「言ってみれば傭兵のようなものですからね、まともな捜査もしないでしょう」
「……大佐の強い意思は我らを照らす光となる。それを疑うものはここにはおりますまい」
とりあえずは全員の了承を得ることができて一安心といったとこ

ろだ。
蒸し暑く感じていた空気の中でも途中からは滲む汗が冷たくなっていたが、クリングヴァル中佐のおかげでなんとか切り抜けられた。
クリスの正体に気付いているような気もしたが、気のせいだったのか。
まあ、もしそうでも軽々しく吹聴する人ではない。
そのうち公表せねばならないことでもあるし、特に問題はないだろう。

「それにしてもイェンネフェルト伯の衛兵はなぜああも殺気立っているのかね」
「まったく、あれでうろつかれているとこちらの気が休まらんよ」

雑談の中から耳に入ってきた何気ない会話。
それがふと脳を強く揺さぶった。
小心者が不安でやっているただの見回りだろう、とも思ったが、彼らの努力によって今城には猫の仔すら立ち入れるような隙はない。
だとすれば何を警戒しているのか。
……俺たちを？

「まさか……」

あまりに突拍子のない想像につい声が出てしまった。

「イトウ中佐、どうしました？」
「……今警備兵はどうしてるかわかりますか」
「はい、今夜は我々がやるから休め、とイェンネフェルト伯が」
「しまった！」

その可能性も考えてはいた。

シュトルーヴェを手土産にカールに降ろうとするならありうる、と。
しかし臆病者のイェンネフェルト伯があえて危険を冒すとも思えなかった。
そうしても確実に赦されると決まっているわけではないのだから。

――もし決まっていたら。
カール側からそう打診されていたら？
イェンネフェルト伯は「間違いなく」それを呑む。
そして他の領主よりも早く到着した理由。
明日には誰かが来るかもしれない、としたら。

「スヴェン！　準備はどうなってますか」
「ああ？　そうだな、七割ってとこだ」
「今すぐ出られるようにしてください」
「何だって？」

俺の声に注目が集まる。
すでに察したのか、クリングヴァル中佐、フェーンストレム中佐は部下への指示を飛ばしている。

「イェンネフェルト伯が今夜裏切ります」

第二十八話　ひとすじの光へ

騒然となる室内。
そんな馬鹿な、という声が上がるかとも思ったが、この部屋にいるものは誰も俺を疑わなかった。
これも俺の人徳……と言うには多少目先が違うだろう。
何よりも、奴ならやりかねない、という共通の偏見が都合のいい流れに身を任せたのだ。
騒がしい空気には少なからず動揺というエッセンスも含まれているが、飛び交う指示や確認はそれを感じさせないほどには的確である。

よほどの聖人君子でなければ嫌いな人間はいるし、特に嫌われる人間というのも、確かに存在する。
俺たちの部隊の九十九パーセントを占める平民にとって、イェンネフェルト伯はその例に当てはまる人物だった。
彼は領民に定則以上の苛政を敷くわけではなく、他と大差ないごく一般的な領主であったが、それは多分に漏れず貴族的な支配とも言える。
自らは何もせずに甘い汁を掻き集め、さらにはそれを見せびらかすように酒宴や舞踏会を開く、というようなことを悪意も持たずに行い、それにわずかな罪悪感も感じない。
首都に近い土地の領主のように、目に留まったからといって鞭で叩いたり、銃で追い立てて逃げ惑う様を楽しんだりはしなかったが、だが、ただそれだけだった。

俺たちの同盟に参加したのも、皇帝に納める税が惜しいとか、どうせその程度の理由だろう。
それが「一般的な領主」であることを考えれば、フレゼリク・ベイセル・ゴトフリート・ヴィッテルスバッハは異端以外の何者かであろうはずもない。

しかし、この場はそのおかげで流れに指向性が付けられたが、まるで煽動したようで気分はよくなかった。
相手が裏切るのは時間の問題で、俺たちの側が圧倒的に弱者だとしても、何かこちらがいじめの首謀者にでもなった気分だ。
昔から何かを一方的に決め付けるのは好きではなかったが、今はそれを気に病んで無為に時を浪費している余裕はない。
当面は早急にクリスの身柄を確保することが優先される。
懺悔は無事に生き延びることができてから考えるとしよう。

「俺はクリスを連れてきます。スヴェンはできるだけ正確に準備の概要を説明しててください」
「面倒な注文だが、やらねえわけにはいかねえな」

ベッテへの説明を怠ったことへの意趣返しのつもりだったが、どうやら既に忘れたことにしているようだ。
独特の表情で笑う大男に苦笑で応じて、自分の仕事を果たすために背を向けた。

滑るように会議室を出て、不自然ではない程度にクリスの元に急ぐ。
まだこちらが気付いていることを悟らせてはいけない。

幾度か擦れ違った衛兵に咎められることはなかったが、警戒の目の奥にはあからさまに嘲笑と揶揄が透けて見えた。
せいぜい今のうちに自由を謳歌していろ、とでも思っているのだろう。
未然に防げなくては誇るべくもないが、どうやら俺の予想通りであるようだ。

クリスが使っていた皇族専用室は封鎖されている。
そのフロアには城の者ならばおいそれと近付いたりはしないために先日まではそこで寝起きしていたが、部外者までもがそうであるとは限らない。
隠れる、という一点を見ればそこが最も安全なのだろうが、もうひとつの理由として、見晴らしを優先した造りのために逃げ場がないというのは致命的だ。
今、クリスはベッテの部屋の続き間に間借りしていた。

「ベッテ、居るか」

気持ち控えめに扉を叩く。
数秒の沈黙の後、内側に人の気配がやってきた。

「誰？」
「レイジだ」
「合言葉は？」
「……遊びに来たんじゃないんだけど」

久し振りに肺から大量の空気が押し出された。
警戒してすぐに扉を開けないのはいいが、そんな遊び心たっぷりな余興に付き合っている暇はない。
無理にでも開けたほうがいいか、などと迷っているうちに鍵を外

す音が聞こえた。

「そんな融通の利かないのはレイジ君に間違いないわね」
「急ぎの用があるときに冗談なんかやってられるか」
「じゃあちょっと入って」
「いや、だから急ぎだって……！」

細く開いた隙間から伸びてきた細い腕に手首を掴まれ、綺麗に逆間接が極まった状態で引っ張り込まれる。
体が廊下から消えた次の瞬間、或いは同時だったかもしれないが、神業の如き速度で再び錠を掛けた。
ああ、そんな不自然な、見る人によってはもしかしたら逢引きに見えなくもない風に引き入れなくてもいいではないか。

「あのビビリ野郎が裏切るのね」

息は吐き切ったと思っていたが、人間の体は意外と余裕を残しているものだ。
酸素を吸うのも忘れてベッテを見やる。
銅葺きの屋根に映る月光をそのまま閉じ込めたような鋭い眼。
外面を繕うためではない本気の目を初めて見た気がした。
ベッテは驚愕の自失から抜け出せずにいる俺に、わざとらしく呆れたような声で問いかける。

「レイジ君、あなた私を誰だと思ってるの？」
「……そういえばベアトリクス・ヤケヴォだったことを思い出したよ」

何故かわからないが、この美人秘書官は大抵のことは何でもできてしまう。

ただその驚異的な能力は、俺への悪戯という非生産的な用途において発揮されることが多いのが玉に瑕だ。
今回はそれが有意義に運用された数少ない事例になるのだろうか。
単に興味本位の諜報活動だった、という可能性も否定しきれないのだが。

ふと顔を上げると、視界の半分ほどまでが乳白色に揺れた。
元が金だとわかる限界まで白銀を混ぜたような、緩く波打つ髪。
思わぬ距離にいた少女は、そのことを意にも介さぬ様子で俺を睨み付けている。

「大体の話はわかっている。貴様も私に逃げろと言うのか」
「俺も？」

他に誰が、と一瞬思ったが、それができるのは一人しかいない。
ベッテの様子を窺うと、手間は省いてあげたわよ、という顔でちろりと舌を出した。
最終的な説得は副官の役目、ということだ。

「クリス、逃げるのは嫌なんだね」
「自分だけ逃げるなど、そんな行為が赦せるわけなかろう」
「その気持ちはわかるよ。でも……」
「ならば私は残る！」

予想されていた答え。
窮地の中自分だけが助かるというのは、どうあっても容認できないだろう。
少女の生来の気質に加え、先日ヴィッテルスバッハ卿を救えなかったことも影を落としこんでいるはずだ。
しかし、だからといって、今は小児病のようなそれを受け入れる

わけにはいかない。
本来は美点であるべきその真摯さも潔癖さも、時に命題を霞ませる欠点となりうる。

「ここで終わらせてもいい程度の決意だったのか？」

俯いたクリスの体が一度だけ大きく震える。
こんなことは言いたくなかった。
もっと巧い言葉があっただろうに、こんな情に訴えるだけの陳腐な言い方しかできなかった。
激しい自己嫌悪の波が押し寄せてきているが、ここで引き下がっては蛇頭なうえに蛇尾にまでなってしまう。
さらにその目を描き忘れることになっては、それこそ目も当てられない。

「言っただろう、国というのは思ったよりも重いんだ。もしかしたらクリスには重過ぎたのかもしれないな」
「……私の器が足りなかったのだ」
「だから、俺たちがいる」
「あ……。しかし」
「力が足りなければスヴェンたち大隊長がいる。技が足りなければベッテやヒューゴがいる。……雑用の手が足りないなら俺もいる」

我ながら情けない立ち位置だが仕方ない。
俺にできることといえばクリスの負担を引き受けるぐらいしかないのだから。
わずかに赤く腫れた目は一心不乱にどこか一点を凝視している。

「でも、俺たちだけでは何もできないんだ。俺たちを導く象徴が、クリスティナ、君がいないと何もできない」

言いすぎかな、と思わないでもないが、俺が恥ずかしいだけで済むなら安いものだ。
たった十七歳の女の子に背負わせるには厳しすぎる現実。
それを受け流せず、受け止め切れなくて溺れかけている少女。
手を貸すことしかできないのに、彼女に縋らなければそれも儘ならないという背反。
それでも俺は助けたい。
偶然この世界に来たのだとしても、この思いだけは必然だと確信している。
そのための労など惜しむべくもない。

「……そこまで言われては仕方ないな……」
「今は生きて、全部終わったら、迷惑をかけた人たちに一緒に謝ろう」
「そう、だな」

短く息を吐いたクリスは、どこか覚悟を改めたように唇を引き締めた。
それでこそ俺たちが祭り上げるに足る女神様、といったところだ。
先程までの弱さが嘘のようでもある。

「……ねえレイジ君、それ、プロポーズ？」
「な、違っ」
「はいはい、からかっただけだから本気にしないの」

不意の悪戯が成功したベッテは鈴を転がすように笑う。
俺はもちろん、クリスまでもが火を噴くように赤くなったことは言うまでもない。

いくばくかの時間を浪費しつつも、落ち着きを取り戻した俺たちは差し当たっての針路を話し合っている。
万が一、この何分かが致命傷になるようなら然るべき処分を検討しなくてはなるまい。
これは俺とクリスの共通意見であり、数的弱者を虐げる民主的な多数決の末にわずか三秒で可決された。

「あとはできるだけ早く、なるべく気付かれずにスヴェンたちと合流したいな」
「それなら心配することないわ。誰にも気付かれずに好きなところまで行けるもの」
「どういうことだ」
「この城にはね、私しか知らない隠し通路が蟻の巣のように張り巡らされてるのよ」
「……道理で」

勝ち誇るように笑うベッテからは見えないように溜息を吐く。
これでは先程の問題は不問にしなくてはならないではないか。
とりあえず、何故知っているのか、何故そんなものがあるか、今まで何に利用されていたのかはこの際無視しよう。
優先されるべきは真相の究明ではなく、あるものをいかに効率よく使うか、という現実主義的なものだ。
無遠慮なノックに、それなりの厚みを持つ扉が悲鳴をあげた。
「さっさと開けろ！　聞こえないのか！」

軋み続ける扉の向こうから、小動物を威嚇するような下卑た声が響く。
自分が圧倒的優位に立っていると信じ込んでいる人間の声だ。
「あら、来ちゃったわね。どうしようか？」
いつの間にか両手に持っていた剣のひとつを俺に差し出しながらベッテが言う。
「それはひとにものを尋ねる態度じゃないね」
「どうするかなど考えるまでもない」
「もう、せっかく和ませてあげようと思ったのに」
年甲斐もなく頬を膨らませたままの秘書官は、渋々と「専用通路」へ俺たちを誘う。
こんなときに軽口を叩くのも俺たちらしいのだろう。
互いに頷き合うと、ひと筋の光も差さない抜け道から脱出を開始した。

第二十九話　理想と業

城を包む雰囲気は、喧騒と表現するには悪意が勝ちすぎ、致命的なことに全体の統率が取れすぎている。
そして本質的には活力と独創性に欠けていた。
だが、だからといって脅威が軽減するわけでもない。
平時には非武装が暗黙の了解だった城内では、剣や槍を携えた兵士が我が物顔に横行している。
その全てが敵であるという現実は、面白くない冗談よりも性質が悪いように思われた。

予定では少なくともあと数日ほどは猶予があったのだが、どうもその見立ては夏休みの宿題計画ほどに甘かったらしい。
おかげで満足な準備もできないままに行動に移さざるを得なくなった。
敵からしてみればしてやったり、というところだ。
しかし、わずかでも予見していたからこそこうして動けているのであって、全面的に後れを取ったということもないだろう。

わずかにしていた準備。
それは俺たちの連隊をまるごと城外に出しておくことだった。
時期的には多少無理があったが、以前から申請していた郊外演習という名目であれば、制度上は何ら不自然なことはない。
臨時司令官である准将はイェンネフェルト伯への対応に腐心していたため、ろくに内容も確かめないまま許可を取ることができたの

も幸いだった。
それなりに融通の利く人物だったら、ご機嫌取りも兼ねて城の警備やら周辺哨戒などに割り振られてしまっていただろう。
尤もそのぐらいの柔軟さを期待できるなら、ある意味それでもよかったのかもしれないが。

部隊は昼過ぎに城を出発し、そう遠くない位置で野営訓練を行っているはずで、表向きは数日間それを続けることになっている。
つまり、万が一城が押さえられた時のための遊撃戦力というわけだ。
それが無駄になるに越したことはなかったが、事態が最悪の方向に転がってしまった以上、本来の目的を遂行するしかない。

「ちゃっかりそんな準備してるあたり、意外とレイジ君って腹黒いのねえ」
「白くない自覚はあるけど、まさか君に言われるとは思わなかったよ」
「何よ、褒めてるのに」
「それはどうも」

俺たちは入念に隠されていた秘密の通路を通って、スヴェンが待っているはずの裏庭へと向かっている。
既に城内でイェンネフェルト伯の兵が動き始めているということは、高い城壁に囲まれているために逃げ込むとは考え難いとはいえ、そこにまで手が及ぶのも時間の問題だった。
一刻も早く合流し、巧妙に隠されていて城の者でも知らないほうが多いが、実は庭師のために作られている出入り口から脱出しなくてはならない。
……この城は忍者屋敷か何かなのだろうか。

「着いたわ」

どうやら目的地に着いたようだが、俺の目には何の変哲もない石壁しか見当たらない。

まさか出口は無理矢理作るというのだろうか。

しかし一メートル四方はある石をどうやって……。

「これ、軽石なの。こんな出口が何箇所もあるのよね」

俺の逡巡をあっさりと無視して石のひとつに手をかけると、軽い擦過音を残して苦もなく押し出されていく。

他の石に比べるとわずかに小さく作られているのだろう、出口を塞いでいた石は見た目とは正反対の音を立てて地面に落ちた。

ね、と笑顔を向けるベッテだったが、俺とクリスは驚きよりも呆れが先に出てしまう。

ともあれ、これで後は抜け出すだけだ。

安全を確認するため、一番手として外へ出る。

裏庭といっても大分外れのほうだったようで、景観のために木が植えられていることもあり、スヴェンたちの姿さえ確認できない。

「大丈夫だ、誰もいないよ」

出口は地面からかなり上、俺の頭より少し高い位置に開いていた。

まあ、あまり普通に触れる高さにあっては、何かの拍子に誰かが気付いてしまうかもしれない。

そんなことをぼんやり考えていると、二人とも無事に降りて服の埃を払っている。

手伝うべきだったか、とも思ったが、何故か今日に限ってクリスまでスカートだったので、これでよかったのだと思い込むことにした。

クリスのスカートに関しては、本人曰く着替えるつもりでいたそうだが、予想より早かった裏切りのせいで着替えが間に合わなかったのだそうだ。
ここに来るまでも定期的に動き辛い、と憤慨していたが、そこまで言うなら始めから穿かなければいいだろうに。
だがそんなことを言うと、ベッテに茶化されるか説教されるのが関の山なので、不本意ながら心に秘めておく。
特に今はそれどころではない、ということもある。

「どうした？」
「ごめん、何でもない。急ごうか」

表面が他のものと似せて造られている軽石を出口に戻し、出来る限り物陰に身を隠すようにして合流地点へと足を進めた。

もし俺に守護霊とやらがいるとしたら、よほど寝惚けているやつに違いない。
そうでなければ憑いているのは気まぐれな悪霊だ。
そもそも俺はそういった霊やそれに類するものを全く信じない人間だが、ここの住人はまず概念として人間霊を考慮に入れていない。
死者に対する畏敬の念や供養に似た習慣はあるが、肉体の死イコール精神の死と捉えているようだ。
幽霊のように実体を持たないものは精霊や妖精といった、人間以外のものとして認識され、死者が蘇るには肉体が必要不可欠と考えられている。
しかし蘇るとは言っても、精神が既に無くなっているため、大雑把に言えばゾンビやグールなどに代表される、身体が動いたとして

も生前と同じとは言えない存在へと変化する。
日本でも死後は妖怪や鬼になる、といったような話はあるが、やはりどちらかと言えば、欧州に近い風土を持っていると見ていいだろう。

というわけで、俺の失態は超自然的な原因による不具合だ、と主張することも叶わない。
スヴェンたちと合流できたのはいいが、どうやら城壁の外に数百人単位の見張りが複数組いるようだ。
俺の見通しが甘すぎるのか、イェンネフェルト伯が思った以上に抜け目ないなのか。
ここに集まることができたのは、先程の会議に出ていた十数人とその副官や直属兵、合わせて百を超えるどうかといったところで、さすがに包囲網を突破するに足りるとは思えなかった。

「これだけ囲まれているとなると、気付かれずに抜けるってのは難しいな」
「いくら木が多いとはいっても、数が違いますからね。野営地に着くまでには全滅です」
「誰か身軽な奴に先行させて、部隊をこっちに呼んだらどうだ」
「それでは時間がかかりすぎますし、そうなると四万対二千では話になりませんよ」

悲観的な返事しかできない自分が嫌になることもある。
見付からずに抜けられる可能性も、不意打ちで混乱を誘って脱出することもできるかもしれない。
だがどちらもリスクが高すぎる。
せめてもう少し時間があれば、部隊との連動を詰めることができていたら。
もしも脱出行が明日だったならば打てる手もあったものを。

しかし、このままではいずれ捕まってしまう。
ならば一か八かでもクリスだけは逃がさなければ――。

「少しいいですかな」
「……クリングヴァル中佐？　どうしたのですか」

いつの間にか俺はひとりで立ち尽くしていた。
中佐が声をかけてくるまで気付きもしなかったのは不覚としか言いようがない。
敵の包囲の只中で我を忘れるなど、まして守るべき上官まで意識の外に放り出しては目も当てられないではないか。
苦虫を噛み潰す思いで視線を巡らせ、クリスの姿を確認して安堵を覚える。

「すいません、呆けていました」
「それはよろしくないですぞ、副官殿」

クリスが横に並ぶとどうしても孫娘に見えるが、或いはそれが俺でも大差はないのかもしれない。
厳しさを彫刻したような顔のつくりにもかかわらず、その温和な雰囲気は先年亡くなった祖父のそれに似ていた。

「姫様は本当に強くなられた」
「……やはり知ってらしたのですね？」
「オクセンシェルナ候とは古くから付き合いがありましてな」

オクセンシェルナ。
確かクリスの母方、ハンスの姓がそれだった。
ならばむしろクリスの正体を知らないほうがどうかしているのだ

ろう。

「こんなところで姫様に怪我でもされたら、オクセンシェルナ候に合わせる顔がなくなってしまう」

「それだけは避けたいと思っていますが……」

「ではそうするとしよう」

「策がおありでしたか」

曰く、優先されるべきがクリスであるならば、他はそのための駒となるのも仕方ない、という。

過半数が一か八かの一点突破を仕掛け、その隙を突いてクリスは手薄なところから安全に脱出する。

恐らくはそれが最善だ。

しかしそれは過半数を見捨てることと同義でもある。

理想という名の魔物は、どれだけの血を飲めば満足するのだろうか。

「その部隊は私が指揮したいのだが、構わないかね」

まるで仲間内で行うカードゲームの親を決めるような気軽さで言う。

だが、相手は堂々といかさまを使うペテン師なのだ。

わざわざ負ける勝負に有為な人物を送り込むわけにはいかない。

「俺が行きます」

「申し訳ないが、イトウ中佐の腕では足手まといだ。私は包囲を抜くつもりなのだからな」

悠然とした中に強い拒絶の意思を感じた。

もちろん兵を指揮した経験のない俺よりも、強靭かつ老練なクリ

ングヴァル中佐が陣頭に立ったほうが生還の可能性ははるかに高い。
しかし仮にそれが俺の十倍あるとしても、果たして一パーセントに届くだろうか。

「……そうですね、俺ではお役に立てなさそうです」

俺は今、絶望的な偽善という形で、少なくない同胞の死刑執行書にサインしたのかもしれない。

第三十話　闇夜の脱出行

シュトルーヴェ城。
領主の居城として造られている以上、それなりの防衛策を講じてある……ように思えるが、風土病的な精神作用の賜物なのか、そこかしこに田舎的な雰囲気が見え隠れしている。
その最たるものは施錠を疎かにする気質であり、そもそも出入り口に扉が無いということも珍しくない。
ベッテの秘密通路にしても、外敵に知られてしまえば致命的な進入経路になり得るのだ。
防犯意識を刷り込まれた現代日本人としては気が気ではないが、十万人を抱える町にもかかわらず悪意ある犯罪は年に一度あるかどうか、という驚異的な治安の良さがそれを助長しているのだろう。
実は城壁に通用口が作られている、というのも、巧妙にカムフラージュしてあるとはいえ、危機意識に欠けること甚だしかった。

だが、それは外の人間には関知できるものではない。
城と言えば堅牢なもの、という先入観を持つ人間は、まさか城壁に穴があるなどとは毛ほども考えないのだ。
それでも過剰なまでの用心深さによって、本来必要でない、外を回ると半日かかる場所にまで人員を配置したイェンネフェルト伯には感心させられる。
ただ闇夜に紛れて通り抜けるだけで済むはずだった俺の算段が見事に打ち砕かれたのだから。

クリスを無事に逃がす。
そのためだけに立てられた作戦を実行するのは気が重かった。

スヴェン、クリングヴァル中佐を中心とした大多数は、陽動と逃走に適した左側の障害物が多いルート。
俺とクリス、ベッテ、フェーンストレム中佐他三人の兵士は少数を利して右側、まっすぐ野営地に向かうルート。
城壁を出た陽動隊は遠くない位置で火を放ち、見張りの目を引き付ける。
見張りが出火を確認するまでにその場を離れた陽動隊は臨機応変に退却し、俺たちはその隙を突いて速やかに脱出する。

これだけを聞けばどちらも大して変わらない確率で生き延びることができるように思える。
確かにこの通り動けばそうなるだろう。
しかし陽動隊は退却しない。
何故ならば、どちらも五割程度の「大して変わらない確率」だからだ。
見付かる可能性は陽動隊のほうが高いが、彼我の戦力差を見れば圧倒的というほどでもない。
一方、俺たちが見付かる可能性は低いものの、たった七人では戦力と言えるようなものは無いに等しい。
であれば陽動隊が囮を兼ねて最初から戦うつもりでいたほうが、総合的な全体のリスクとしては減少すると言える。

とは言え、戦いつつ戦線を抜けられる可能性は限りなく低い。
例え見張りが油断しているとしても、それは最初のうちだけだろ

うから。

風でも吹かない限り大きく延焼することはない、という地点から煙が立ち昇り、やがて空を舐めるような炎を確認することができた。
燃え上がる樹木の爆ぜる音に狼狽とそれを窘める声が混ざり始め、敵の目のほとんどがそちらに向いたものと思われる。

今まで慎重に進んでいた俺たちは、周囲への警戒を続けながらも長距離走と常歩の中間ほどの速度まで足を速めた。
踊るような炎が光源となったことで木々は不安定な影を作り出し、その音とともに俺たちの気配を隠すのに貢献している。
俺の目測ではあるが、見張りは城から五キロメートル程度までしか配置されておらず、そこさえ越えれば後は心配することもないだろう。
しかし、何もない平地の競技であれば二十分とかからずに駆け抜けることもできる距離だが、足場も視界も悪く、身を隠しながらというのは非常に効率の悪いものだ。
立ち止まったり、偵察もしながらとなると、どれだけ急いでも二時間ほどはかかってしまう。

やはりクリスが指揮を執ることで生まれる突破力を頼みに、全員で動いたほうがよかったのではないか。
死地へと向かった仲間を思うと、一度は振り切ったはずの考えが湧き上がってくる。
……しかしそれは、何よりも彼らへの侮辱に他ならない。
今は全体の生き残る確率よりも、クリスの安全を最優先に考えなくてはならないのだ。

感情や感傷に任せて、クリングヴァル中佐の覚悟で作られた比較的安全な時間を無駄にするわけにはいかなかった。

「大丈夫よ、ちゃんとわかってるから」

「何がだ？」

索敵と地形把握のために俺とベッテが先行している。

彼女は夜目が利き、或いは気配さえ探れるのではないかと思わせるほど高機能ではあるが、この状況で単独行動は危険すぎる、というフェーンストレム中佐の進言で俺が同行することになった。

実際俺に出来ることといえば足場の確認ぐらいで、いくら控えめに表現しても足手纏い以外の何者でもないのだが、そんな中でかけられた言葉の真意を測りかねるのは仕方ないことだと思う。

「クリスのことよ。あの子は賢い子だもの、今の状況ぐらい理解してるわ」

「だとしたら猛反対してそうな気がするけど」

「したわよ？　レイジ君が部屋に来る前に」

「こうなることがわかってたっていうのか」

「説得するの大変だったんだから。ご褒美は奮発してもらわないと」

「……敵わないな、本当に」

明確な肯定さえしなかったが、それについては是非を問うまでもない。

もしかしなくとも、クリスは俺などよりベッテを副官に据えたほうがいいのではないか。

ふとそんなことを考えてしまったが、首席秘書官という職務がある以上そういうわけにもいかなかったのだろう。

尤も、今後そうならないと決まったわけではないが。

しかしこれで最大の懸念――援けに向かおうとするクリスを如何

にして止めるか――が解消されたのは確かだった。
少なくとも、状況を悪化させる可能性の芽は事前に摘まれていたのだから。
後方から聞こえる音は劇的にその質を変容させていた。

幾度もの反射を経て俺たちの耳に辿りつく喊声と剣戟。
そう離れてはいないはずだが、茂る草葉に吸収されて実体を無くした音はどこかぼやけていて、まるで安物のスピーカーから聞こえる三流戦争映画のそれに似ていた。
だからと言って現実感が薄いわけではない。
危機感によって研ぎ澄まされた五感はその全てで死を知覚する。
敵か味方かはわからないが、確実に、今もまたひとり、ふたり。
足は既に意識から切り離されたまま前進を続け、何よりも脳が考えることを拒否しているように感じていた。

徐々に遠くなっていく声と音を行軍曲がわりに、もうどれほどの距離を進んだだろう。
誰も口を開かず、重くへばりつくような空気を纏ったまま時間が過ぎてゆく。
皆一様に苦虫を噛み潰したような表情を隠そうとしているが、肉体と精神の疲労はそれさえも難しくしている。
俺の感じているこの嘔吐感は果たして体力的な問題なのか、そうではないのか。

「そろそろ包囲から抜けるはずだな」
「この辺りから視界も開けますが、逆に発見される恐れもあります。

しばらくは慎重に進むのがよろしいでしょう」

本来の距離よりも遠くに聞こえたクリスとフェーンストレム中佐の会話が、鈍っていた脳の感覚を揺さぶり起こす。

ここまで来たらひとまず安心だ。

あとはフェーンストレム中佐の言うように、見晴らしのよくなったところで気を引き締め直さねばならない。

「ねえ、レイジ君。こっちに敵の増援が来る確率ってどのくらいだと思う？」

突然訊かれたことの意味を把握するのに数秒の時間を要した。

どうしてそんなことを訊くのか、と返してもよかったが、特にふざけているわけでもなさそうだ。

可能性のあることは用心に過ぎることはないだろう。

「騒ぎの後に兵を回しても間に合う位置じゃないから、そうだな、ゼロじゃない、ってぐらいだと思うよ」

「そう？」

そのはずだ。

そもそも兵が配置されていることさえ想定外だったのに、何も起こらないはずの場所にわざわざ増援までするわけがない。

だが、最初の前提が間違っていたらどうだろう。

裏に抜けるものがいるかもしれない、と考えていれば兵を敷き、加勢を指示するのは当然のこととも言える。

まさか塀の抜け道が知られていたのか――。

「ゼロじゃなかったみたいだけど、どうしようか？」

途切れた森の先には、一瞬ごとに増える灯が見えていた。

第三十一話　暁闇

引き絞られた弓のような月。
それ自体は特に真新しい感慨を覚えることもないが、それを飾り立てるように煌く星々が神経にわずかな不安の雫を落とす。
子供の頃よく眺めていた天体図には描かれていなかった空。
鮮明な記憶があるわけではないが、それでも知り得ているいくつかの有名な星座すら見つけることのできない現状に、幾度目かと思い返すのも億劫なほど自分の知る世界とは違うのだ、ということを思い知らされる。
人工の光に乏しい、方角によっては全くその存在を確認できない夜空は、逆に作り物めいた美しさを持っているように見えた。
あまりにも美しいものには近寄り難い。
そんな恐怖にも似た思いを抱くのは、決して未知の世界ゆえのことではないのだろう。

だが今は呼吸が重く感じられるような満天の星空、というわけでもなかった。
ところどころが雲で遮られ、目に見える光の粒は半分ほどでしかない。
どこが違う、とは明確に表せない月も最大の光量を発揮するには面積が少なすぎ、周囲は覆い被さるような木々によって映写前の映画館よりも密度の濃い闇を作り出している。
世界は暗く、逃亡者の姿までも同じ色に染め上げてくれるはずだった。

徐々に近付いてくる灯りの数や範囲を見るに、その数は軽く千は超えている。
今現在の戦力では言うに及ばず、囮となった分隊を合したとしてもまともに戦える数ではない。
俺たちはここで身を潜めていればやり過ごせるだろうが、既に戦闘を行っている部隊の状況は「不利」から「圧倒的不利」へと瞬く間に転げ落ちるのは目に見えている。
ゼロではなかった可能性の、その中でもさらに最も悪い状況に展開していた。

増援にはいくつかの種類があり、大別すると勝っているほうのものか、負けているほうのものに分けられる。
それらはさらにそれぞれ積極的なものと消極的なものに分けられ、特殊な場合を除き消極的なものは悪手となることが多い。
悪手に代表されるのが戦力の逐次投入だが、流れが変わるでもなくいたずらに血と時間を浪費するため、今は勝ちたくないが時間を稼ぎたい、などの戦略的判断において実践されることが稀に存在する。
ただほとんどの場合は、できるだけ保有戦力を温存したい、前線よりも自らの保身を優先する、といった愚将によって勝ちを逃す典型的なパターンであると言っても過言ではない。
しかし今回は勝っている側の積極的な増援とみられ、一分の隙もなく徹底的に勝利するための好手となり得る。

イェンネフェルト伯にこれほどまでの戦略的センスがあるとは思えなかった。

それなりに人を見る目は自信があったつもりだが、たかだか二十五年しか生きていない俺が自負するには早過ぎたのだろうか。

「……あれ、本当にあのビビリ野郎の部隊なのかな？」

先程から怪訝な表情を隠そうともしていなかったベッテが、その原因を俺に問いかけてきた。

「どうしてそう思うんだ？」

「何年か前にね、フレゼリク様に聞いたことあるのよ。私がまだここに来たばかりのころ、貴族同士の模擬戦をしたって話」

……かつてこの地方に大貴族が周遊に訪れた際、ヴィッテルスバッハ卿とイェンネフェルト伯が合同でそれをもてなしたらしい。

その席上、何か不都合な事故か事件が起きたが、穏便に模擬戦にて決着を付けようということになった。

同数の兵による模擬戦、言ってみればチェスや将棋を生身の人間で行うという馬鹿げた遊びだが、その本質故に指揮する者の優劣がはっきりする。

結果はヴィッテルスバッハ卿の一人勝ちだったが、それも相手が勝手に自滅したことによる不戦勝のようなものだった、ということだ。

「実際に見ていたわけじゃないから確かなことは言えないけど、話を聞く限り戦術と戦略の区別もつかないような奴だったはずよ」

「それが本当だとすると、例えイェンネフェルト伯の軍だとしても警備の援護とか、そういうわけではなさそうだな」

「何よ、信じられないって言うの？」

「優秀な参謀が付いたかもしれないだろう」

そうは言ってみたものの、自らの眼力を信用するならば、優秀な人間が進んで配下に甘んじるほど器の大きい人物には見えなかった。
とすると、急降下する危機感に反比例して、希望という可能性が浮上してくる。
確かに近付いてくる集団は最大速度で行軍しているふうではない。
ならば考えられる状況はふたつ。

待機していた敵部隊が行動の決断を下せぬまま、優柔不断に進軍してきている場合。
または待機を命じていたはずの味方部隊が、城の異常を察知して独断で動いてきた場合。

そして前者の可能性は、既に「念のため」配置されていた警備兵の規模からすると考えにくい。
イェンネフェルト伯が俺の思うとおりの人物だとすれば、ここにさらに余分な兵力を回すぐらいなら自分の警護に充てるだろうからだ。

「……命令無視も今回は大目に見ないといけないな」

急に緊張感を解いた俺に、そこにいた全員が訝しそうな顔を向けていた。

「それは確かなのか」
「もう少し近付けばわかるだろうけど、ほぼ間違いないと思う」

あれは敵ではなく、味方だ。

野営訓練と称して城外に留めておいた虎の子の戦力。
そもそも今の目的は無事にここを脱出してそれに合流することだったわけだが、図らずもその目的を達成したことになる。
しかもすぐさま取って返せば窮地に陥っている別働隊を救出することも難しくない。

「……確かにそのようです。先陣に見える銀の髪はアスプランド大尉でしょう」

急ぎ確認に向かった兵が戻り、推測と希望的観測がどうやら正しかったことに安堵の息が漏れる。
なにせこの距離では俺には視認することができない。
夜でも明るいことに慣れていたせいももちろんあるが、それ以前に人種として、日本人は夜目が利かない。
全ての日本人がそうだとは言わないが、虹彩の色素が薄い白人のほうが、より少ない光で活動できると言われている。
雑誌やテレビなどでよくサングラスをかけている外国人を見ると思うが、あれは強い光に弱いためであり、決して日本人のように第一義としてファッションのためではないのだ。
このメンバーの中で最も夜目が利く兵の瞳の色が、限りなく白に近い水色であることもその証明になるのではないだろうか。

半ば沈みかけていたクリスの眼に活力が戻り、気だるげだった動作の一つ一つにも鋭さを感じる。
仲間を見捨てずに済んだ。
そう声に出しては言わないが、意に沿わぬことを実行するのはどれほど精神的な負荷を享けたか知れない。
先刻までの状況というのは本来の彼女の性質からすれば選択肢にも上らなかったものであり、その枷を取り払ってしまえば本能を止めておくことなど出来得るはずもなかった。

もちろん、今や俺にはそれを止める術も理由もない。

「すぐに連携を取って引き返す。細かい策など要らぬ、ただ物量で以って押し切るのだ」

「仰せのままに」

フェーンストレム中佐がこんな時にまで寸分の狂いもない敬礼を施し、数少ない部下とともに走り去る。

残された俺とクリス、ベッテも部隊の行動線上に移動しなくてはならない。

ならないのだが。

「どうした、私たちも行くぞ」

足が震え、浮遊感に囚われている。

恐怖や萎縮ではない。

少ないとはいえこれまでも戦場を経験してきたのだから、そういうものではないはずだ。

それにこの感覚は知っていた。

かつて初めて射場に立ったときに、二度目のときに、それからもずっと感じたもの。

「……ああ、わかってるよ」

研ぎ澄まされた緊張が高揚感を押し包み、ひとつだけ大きく呼吸をすると水を打ったように収まってゆく感覚。

武者震い、と名付けられた現象だった。

それからのことはよく覚えていない。
ヒューゴらと合流し、わき目も振らずに木々の間を縫い、慌てふためく敵を打ち払う。
奇跡的に軽微な損傷に留まっていた友軍を助け出し、確実に安全だと思われる場所までひた駆けた。

気付けば俺は怪我をしていた。
少数ながら死者もおり、もう戦えないほどの傷を受けたものもいた中で怪我と言うには憚られるが、大きなものは右腕と左脚に剣で切りつけられたと思しき切創が目立つ。
とはいえ縫合が必要なほどではなく、傷口からの感染さえ気をつければ問題視するまでもない。
部隊には俺の現代医療知識を参考にした道具が可能な限り揃えてあったのも幸いと言えるだろう。
何せ俺が来るまで、この世界には消毒という概念すらなかった。

傷口は消毒し清潔に保つ。
当たり前に思えることだが、それによって破傷風などの感染症は劇的に減少した。
現代日本では子供の頃の予防接種によって発症することも少ないが、ワクチンなどのない時代に於いては致命傷にもなり得る。
それ以外にも衛生管理で防げる病気は多く、例えばペストなどの凶悪な伝染病もある程度予防することができるだろう。
これらはまず俺が手を付けた仕事のひとつでもあった。
俺の知っている程度のことでは薬を作り出すことはできないのだから。

「ようレイジ、お前さん訓練以外で怪我したの初めてじゃねえか？」
「ええ。まあ、今まで慣れてないのもあって突っ込みきれてなかっ

たんです」
「ようやくこれでいっぱしの戦士、ってわけだな」
「俺は頭脳労働だけでもいいんですが」
「がっはっはっは！　何事もできねえよりはできたほうがいいってことだ！」

俺たちは今、シュトルーヴェ城から南東におよそ四十キロメートルほど離れた山あいで休息を取っている。
東の空が白み始めるころにここに辿り着き、既に太陽は中天近くまで昇っていた。
こうして笑いあっているスヴェンをはじめ、クリングヴァル中佐や主要なものにそれほど大きな怪我はなく、これから先のことを忘れてしまうならばほとんどが無事に脱出を果たしたと言えるだろう。
陽動部隊のうち戦闘の中で命を落とした、或いは捕まったものは二十名前後、逃走中に事切れたものが四名。
少なくともしばらくは戦えないであろうものは三十七名。
他はそこまでではなくとも全員がなんらかの傷を負っていた。
数倍する軍勢に囲まれていたことを考えれば、生還率七十パーセント以上というのは驚異的なものと言える。

「自分と、クリスくらいは守れるようにならないと、とは思ってますけどね」
「副官が守られてちゃ話にならんからなあ」
「……鋭意努力させてもらいます」

確かに自分を鍛えるのも必要ではあるが、当面はそれよりも重要なことがある。
果たして負傷者も含めた二千人にもなる連隊全員を引き連れて身を隠すことができるのだろうか、ということだ。
さすがにこの人数では、いくら何でも行商人や旅芸人の一座を装

うことは難しい。
この後、俺たちの受け入れ先を探すか、アルヴィーカのような抵抗組織を作るか、ということになるだろう。
どちらにしても容易に進める道ではないが……。

「イトウ中佐、カッセル中佐、少しアッテルベリ大佐にお伝えしたいことがあるのだが、どちらにいらっしゃるかご存じないか」

横手から、普段見たこともないほどラフな着こなしのクリングヴァル中佐に声をかけられた。
いつ火急の呼び出しがあるかわからない、と休日であっても昼間は軍服を着込んでいるような人物でもあり、その違和感は並のものではない。
こうして希少な状態でいるのは包帯で吊り下げられた左腕のせいであるが、雨季が終わり気温も上がろうかという時間に、それでも肩には上着を羽織っているのだから恐れ入る。

「大佐でしたら負傷した兵を見回りに行きましたが」
「なるほど。では、そうだ、お二方にもご同行願いたい」

ちょうど俺もクリスと相談しようと思っていたところだった。
渡りに船、ではないが、面倒は一度に済ませたほうが後々楽になるというものだ。

「わかりました、行きましょう」

第三十二話　やるべきこと

機敏なカモシカのように動き回っていた上官と対面することができたのは、探し始めてから十分ほどが経ったころだった。
そう見晴らしも悪くない、たかだか二千人あまりの中から探し出すのにこんな時間を取られるとは思わなかったが、失念していたのは動き回る兵たちよりも捜索対象の身長が頭ひとつほどは低い、ということだ。
こんなことなら幾度か目に入った長身のヴェストベリ少尉でも付けておけばよかった、と結構本気で考えてしまう。
結局俺たちが探し回っている、と聞きつけたクリスが出向いた格好である。

「それで、私に話というのはクリングヴァル中佐だったか」
「はい、今後のことで提案がありましたので」

クリス捜索活動の最中、フェーンストレム中佐も一行に加わっていたため、さながら臨時首脳会議といった趣だ。
おかげで兵士たちは気を回したのか、或いは気後れか、声の聞こえるような場所からは離れている。
組織としては上に敬意を払う、と言う点で当然のことなのだろうが、自分がその対象になるというのはむず痒くて仕方が無い。
尤も、クリングヴァル中佐の提案を考慮するならば結果的に好都合ではあったのだが。

「聞こう」
「僭越は承知しておりますが、大佐、ご実家を頼られることは適いませぬか」

それが何を意味するのか。
言ったほうも、言われたほうも理解しているが、だからこそ、急速に張り詰めた空気の意味は重い。

「……アッテルベリは私以外にいない」
「オクセンシェルナのことです、殿下」

嘯(うそぶ)くクリスに、追い討ちとなる一言が投げかけられた。
無造作に組まれていた腕に力が入るのが見え、掴んだ腕には細い指が食い込んでいく。
喋ったのか、という苛烈な視線が送られてきたが、小さく首を振って否定する。
比較的俺が平静を保っていられるのは両者の事情を知っていたからではあるが、このことをクリスに報告する機会を逸していたのは事実であり、非難めいた視線を受けるのは肩身の狭い思いだった。

「そうイトウ中佐を睨まないでやっていただきたい。私は最初から知っていたのですから」

困惑の度合で言えば、全容を把握し切れていないフェーンストレム中佐よりも、なまじ知られぬようにしてきたスヴェンのそれが強い。
幾度かの瞬きを終え、何事かを言いかけたスヴェンに先んじて老将が語を次ぐ。
「オクセンシェルナ候とは旧知でして、実は殿下、殿下にもお会い

したことがあるのですよ」

鳩が豆鉄砲を食らったような――この慣用句の発祥について、そんな稀有な状況がそうそうあったとは思えないが――表情のクリスに、先日俺にした話を繰り返す。

だがその表情も一瞬ごとに理解へと傾き、可笑しさを堪えて納得するように頷いた。

「思い出したぞ。先代のヴィッテルスバッハ卿とともにお祖父様の屋敷に来ていたことがあった」

「……覚えておいででしたか。十年以上も前のことでしたが」

驚きを隠せない様子で目を見開く。

それはそうだ。

十年以上前といえばまだクリスは五歳かそこらのはずなのだから。

小学校に入る前に会っただけの人物をさも当然のように覚えていることなど、果たしてどれだけあるだろうか。

それは知能指数が高いのか、単に記憶力がいいのか、平々凡々たる俺には理解の外であることは確かだ。

「いや、今まで思い至らなかったことが不覚だ。しかしよくも気付いたものだな」

「母君に……エリーザベト様によく似ておられます」

俺はクリスの母親を知らない。

知らないが、クリングヴァル中佐が現実を記憶で上書きしているとは思えない。

ならば少なくとも、普通の親子以上には共通するものが多いのだろう。

俺の想像力ではクリスの髪を長くしてドレスのようなものを着せ

るぐらいしかできないが、だがそれはどこまでいってもクリスであることは変わらなかった。

「……そうか、私は母様に似てきたのか」

自嘲とは少し違う、悲しさと嬉しさをどう融合させればいいのかわからない、といった波動を乗せて、小さな音が耳をかすめた。

一番近くに居た俺でも聞き取るにはぎりぎりの声だったので、他の三人には聞こえなかっただろう。

次の言葉は指揮官としての、クリスティナ・アッテルベリとしてのものだった。

「クリングヴァル中佐の提案を容れよう。いずれ無関係で済むものではないのだ、オクセンシェルナとは何らかの接触を持っていたほうがいいだろう」

「ありがとうございます。具体案はおありですか？」

「密使としてベッテを向かわせよう。彼女なら面識もあるし能力も申し分ない。軍内部に入り込んでいるハンスのこともある、とりあえずは後方支援を頼むつもりだ」

「それでよろしいかと思います」

「では我々の行動については……」

方向性が定まれば、溜め込まれていたエネルギーが奔流のように流れ出すのは当然のことだ。

次々と今後の指針を決める様は感心させられるものがあったが、どうやら今はわずかに足元が見えていないらしい。

「大佐、少しよろしいですか」

「何だ？」

「フェーンストレム中佐とカッセル中佐にも説明したいのですが…

…」

「……任せよう」

一瞬、怪訝な表情を覗かせたクリスだったが、奔流に乗り切れず居心地が悪そうな二人に気付き、少しだけ恥ずかしそうに頷いた。

俺たちの今後について、問題となるべきことがいくつか存在する。

最終目標である平和を取り戻すためには、現体制の打倒、ないし無力化が最優先事項だ。

それが平和的な手段で解決できるものなら望むところだが、先方にその意思がないことがわかりきっている以上、不可能を望んでいても仕方がない。

ではいかにしてそれを達成せしめるかといえば、武力で以ってそれを制するしかないだろう。

しかしそのために組織されようとしていた反皇国同盟は、カールの一石によって瓦解し、産声を上げることなく頓挫せざるを得なくなってしまった。

雌伏を続けているものはいるだろうが、当面の足がかりを失ったのは事実だった。

それに付随することだが、政治的な求心力を持つ人物の不在は組織として致命的と言える。

もちろん上官たる少女の素性を公表するならば問題ではないが、それだけでは大義名分のためのお飾りになってしまう。

今はもっと民衆に近い立場の主導者が必要なのだ。

例えば、悪政から民衆を守っていたヴィッテルスバッハ卿のよう

な。

差し当たっては、不自由でない拠点の確保と、できればヴィッテルスバッハ卿の救出が、俺たちの短期的な目的になる。

「つまり最も効率的な行動はシュトルーヴェの奪還、というわけだな」

「効率だけで言えばそうですが、さすがにそこまで単純な動きでは罠に掛かりに行くようなものです。今の戦力では実力行使というわけにもいきませんからな」

青天の霹靂だったフェーンストレム中佐と、半分だけ知っていたことで混乱したスヴェンに一通りの事情を説明し、改めてこれからの予定を話しあっている。

比較的古く硬い風習を重んじるフェーンストレム中佐がクリスの正体に恐縮していたが、皇女であることは内密にしてほしい、という願いに折れてこれまでどおり接することを誓った。

このとき、ああ、孫娘のお願いというのは断れないものなのだなあ、などと場違いな感想を抱いてしまったが、どうやらそれは元世話係に伝授された交渉術の一端であるようだ。

「確かにまだヴィッテルスバッハ卿の安否も知れず、昨日の今日では警戒も強化されているか」

「それにオクセンシェルナ候との連携も図らなくてはいけません。事を起こすのはそれからでも遅くはないと思いますが」

「しかし遅くなればなるほどヴィッテルスバッハ卿の生命は危険に晒されるだろう」

「いえ、それに関しては確信に近い考えがあります」

ずっと考え続けていた、カールの真意の欠片。

それは自ら手を汚すことなく、民衆の敵意も巧くかわしつつ目的を達成すること。
まだそれだけではないはずだが、少なくともひとつの正解には辿り付くことができたと思う。

「……どういうことだ？」
「恐らくシュトルーヴェにはイェンネフェルト伯がそのまま残るでしょうが、城下の民がおとなしくそれに甘んじるとは思えません。産業的に重要な土地でもありますから、まさか強硬に弾圧などもされないでしょう。ではどうするか」
「人質か。なるほど、ありうることだ。カールが搦め手で攻めてきたのもそう考えれば筋が通るな」

――敬愛する領主を押さえておけば滅多なことはできないだろう――。
個人的な思考に見え隠れする欠片の断片から、よくもそこまで汲み取れるものだ。
……俺には兄弟もいないし科学的にどうなのかは知らないが、半分は同じ血が流れている、というのも影響しているのだろうか。

「ならば確実な時期を待つのがいいだろう。それまでヴィッテルスバッハ卿に不自由な思いをさせてしまうが……」
「出来る限り早急に、ですな」

それはとても難しいことだ。
十分な戦力を整えるには時間と資金が掛かる。
最短でも半年、上手くいかなければ数年がかりになるだろう。
俺がこの世界に来て半年足らず、そう考えれば加速した情勢の波はあっけなく予想を上回ってしまうかもしれないが、しかしそれは、俺たちだけには限らないのだ。

第三十三話　北と、東へ

「東、ですか」
「そうだ。オクセンシェルナは皇都の向こうにあるのでな、海路のほうが早く安全だろう」

大雑把な印象になるだろうが、アヴェストリアの国土はちょうど宮城県に似たような形をしている。
違うのは北部がすぐに海であること、太平洋側北部には東に陸続きの大陸があるということ、総面積が日本の四倍から五倍にもなるということだ。
それを踏まえて細かい位置関係を説明するならば、今俺たちのいるヴィッテルスバッハ辺境伯領は白石蔵王の辺り。
俺が倒れていたアルヴィーカは作並周辺で、皇都は多賀城付近、問題のオクセンシェルナ領は石巻といったところか。
北部、西部が山、東側が平野で海に面しているなど、おおよその地形も似通っているようだ。
尤も、これらは正確な測量に基づくものではないから、雑多な資料の整合性をどの程度信用するかによって多少以上の誤差が発生するだろう。

陸路でもって警備の厳重であろう皇都を迂回するとしたら極端な遠回りとなり、ただ往復するだけで半年は掛かりそうだ。
ならば海路で、というのは十分に納得のいく選択ではあるのだが。

「海上の安全というのはどの程度確保されるものですか」

これは海難事故だけを指しての疑問ではない。

今まで山間部での生活しかしていなかったため、航行の技術や軍事的にどの程度の規制があるのかが全くわからなかった。

それこそ現代でも船舶の越境警備には穴があることを考えれば大したことはないだろうが、例えば常に海上を哨戒しているかいないかではその意味は大きく異なる。

「この辺りの海は一年を通じてそれほど大きく荒れることはない。仮に荒れても適切な判断さえできれば転覆するほどの事もないだろう」

どうやら比較的強い気圧変動、台風やそれに類するものもないようだ。

台風は発生しないということはないだろうから、うまく針路から外れているのだろう。

「人為的な面では、皇国海軍は大型艦が五隻、大型艦一隻を旗艦とする船団が四つ。それぞれ中型の高速艦が主戦力でおよそ三十、それに小型艦と輸送艦で総数は二百から三百程度。総数は千を越えるな」

「その全てが皇都に？」

「いや、一船団は南部に駐留し、残りの三船団は皇都を拠点として交代で哨戒任務に着いているため、常に皇都にいるのはふたつだけだ」

「大型船が一隻余ってますが」

「それは皇帝専用の総旗艦だ。親征でもなければ動くことはない」

とすると哨戒任務中の船団に当たりさえしなければある程度自由

に航海できるということか。
確かに余計な人目につかない分、海路のほうが安全かもしれない。
「ともあれ、風の気分にも左右されるが、三月もあれば往復できるはずだ」
「わかりました。では護衛の人選も進めておきます」
ベッテに護衛が必要かどうかは考えどころだが、何か人手が必要になるかもしれない。
それに知人とはいえ、貴族に面会するのに単身というわけにはいかない、ということもある。
訪問の内容が内容だけに、万全は期して然るべきだろう。

これでオクセンシェルナへの連絡には目処が立った。
しかしそれが実を結ぶまでの間、特別表立って行動できないのは変わらない。
そうなると厄介なのは、俺たちも含めた兵の潜伏先が確保できない、という事実なのだ。
一度各々散開して後日集合、というのもひとつの手段だが、それでは火急に対応できなくなるうえに機密漏洩の可能性も出てきてしまう。
理想は近辺にアルヴィーカのような集落を作り、順次要塞化して拠点とする、といった先も見据えたものが望ましい。
だがそれに適した土地では目標になりやすく、またシュトルーヴェのように守りの硬い地形というのもそうあるものではない。
やはりどこかで妥協しなくてはならないだろうか。

「提案なんだけどよ」
先程から何かを考えては頭を振るような動作を繰り返していたスヴェンが口を開いた。
俺もクリスも老中佐たちも行き詰っているのを見かねたのだろう。
「北の山中にいいところがある。ちょっと遠いが、そう簡単には見つからねえ」
「アルヴィーカでは遠すぎるぞ」
「そんなに行かねえよ。こないだアルヴェーン伯を追い返しただろう、あの辺りの山ん中に廃村がある」
「その辺りなら街道を外れると滅多に人は入りませんな」
「ああ、派手に要塞構えたって気付かれやしねえだろうよ。移動に向かないようにも見えるが、川を使えば海まで二、三日で着く」
想定していた地域とはかなり離れるが、これはもしかするとさらにいいポジションかもしれない。
後々を考えるとより効果的でもある。
何故最初からその可能性を考慮しなかったのだろうか。
遠くない将来、皇国に抗おうとするならばそこ以外考えられない、とも言える。
古来より領土の境界は山か川であることが多かったのだから。
「……確か山間の街道は一本しかありませんでしたね？」
「そうだ。平野まで下れば他にもいくつかあるがな」
「なら拠点はそこに作ることを薦めます」
「何を思いついた？」
「もちろん説明しますよ」
……かつて豊臣秀吉の逸話の中に墨俣一夜城という件があった。

一夜にして敵の目の前に前線基地を作る、という魔術的な逸話である。
方法としては川の上流で木材を切り出し、それを下流に流して現地で組み立てる、という実に単純なものだ。
しかし当時は現地調達が普通であった木材を他所から運び込み、さらにある程度組みあがったものを流すことで、現地での作業時間を大幅に短縮したことは特筆に価する。
ただ現在に於いては、この話は江戸時代の創作ではないか、というのが通説となっているが、この際は史実かどうかが重要なのではない。

これを応用して、一夜は無理だとしても短時間で河川流域を制する。
準備は山奥で行うために察知されず、いざ行動を起こすとなれば皇国の対応前に制圧は完了するだろう。
まだそれを実行するには早過ぎるが、準備としては決して早くない。
そしてその作業を行う人員も、既に確保されているのだ。

「……というように、敵の意表をついて下流の街道に要塞を設置することができるかと思います」
「……なるほど。確かに先のことではあるが、その発案は興味深い。カッセル中佐、今の人数でそうした作業は可能か？」
「多過ぎるぐらいだな」
「よし、ならば兵たちには悪いが少しばかりの間、土木作業に従事してもらうとしよう」

オクセンシェルナとの連携ができれば、この布石が無駄になることはないはずだ。
対皇国としての決定打にはならないかもしれないが、それ以外に

でも十分な交渉材料となりうる。
今できることで役に立つのならばやっておくべきだろう。

こうしてスヴェンの指揮する大部分は北へ、俺やクリスを含めた数十人は東へ、それぞれ別れて行動することになった。
別れる直前になって聞いたのだが、廃村はスヴェンの故郷であるらしい。
もともと傭兵を生業とする一族で、十年ほど前の戦で戻る人間が居なくなったのだそうだ。

「よかったんですか、スヴェン。そんなところに俺たちが踏み込んでしまっても」
「がははは！　いらねえから捨てられたのさ。そこをどう使おうが勝手だろうよ」
「しかし……」

知らせるかどうか迷っていたじゃないですか。
そう続けようとしたところで思い切り背中を叩かれた。

「いいんだ。くたばった奴らも、出て行った奴らも、みんなこの国をよく思っちゃいなかった。俺らが使ってやれば本望ってところだ」
「はい……」

その時は普段どおりに豪快な物言いだったが、村のことを話す時はどこか無理に振舞っているように見えた。
恐らくできることなら足を踏み入れたくはないのだ、と勝手に憶測しているが、その正誤は俺なんかが検める必要もないだろう。

スヴェンの言葉どおり、本望だと思ってもらえるようにするしかないのだ。

「おい」
「はい、どうしました大佐？」
「それだ、しばらくはそれをやめろ。どう見ても軍人らしくない貴様はいいが、皆がそうではないのだからな」
「……クリスも見た目は軍人に見えないけど」
「わかったのか、わからないのか、どっちだ？」
「わかりました」

しかしクリスはいいとしても、クリングヴァル中佐やフェーンストレム中佐をどう呼べばいいのだろう。
そう気軽に名前を呼ぶわけにもいかないのではないのだろうか。
まあ、公共の場ではあまり名前で呼ぶような会話をしなければいいだけだ。

「そういえば貴様、港町は初めてだったな？」
「こっちの世界ではそうだね」
「どこでもそうだと思うが、港のある町は活気があっていい。シュトルーヴェもなかなかだが、他の土地の人間が行き交う様は独特のものだ」

俺たちの世界では寂れてしまったところも少なくないが、それも栄えていた時期があったからこそだ。
多くなりすぎたものは力の弱いものから順に淘汰される。
それは自然の摂理であり、当たり前のことではあるが、どこか物悲しさも感じずにはいられない。
果たして本当に弱いことが悪いのか、または強くなりすぎるものが悪いのか。

どちらもそれぞれの主観に於いては正しいことだが、同時に反対の意味も持つことになる。

「今の状況では不適切だろうけど、楽しみだと思ってるよ」

苦笑を向けた俺に、少女も同じ表情で応えてくれた。

第三十四話　林の中で

北に向かうスヴェンたちと別れてから十日。
俺たちは順調に東へ進み、明日には港町セルヴェスヴィークが見えるだろうというところまで来ていた。
主だった士官や、特に秀でた能力を持つものを中心とした編成だったこともあり、通常よりもかなり早く到着できたと言えるだろう。
ただ、五十人あまりの部隊では目立ちすぎてしまうことを恐れ、十数人単位で四つの分隊に分かれて移動している。
どうやら俺の率いる集団が最初に町へ入ることになりそうだ。

電話や電信のないこの世界では、情報の広がる速度は人の足に頼るところが大きい。
幸い先日から集め始めた近隣の情報にシュトルーヴェ陥落の報は届いておらず、ひとまずは危険を回避しつつ目的を達することができそうだった。

十日前。
俺とクリスは鐙がぶつかるほどに寄せられた馬上で、ここから町までは別行動になるため予定針路について話し合っていた。
これほど近付くのは単に馬蹄の音や風で会話がしにくいためだが、相乗りすればいいのに、というベッテの冷やかしを黙殺したのは言

うまでもない。
二、三のやりとりで階級順で最上位にあたるクリス、続いてクリングヴァル中佐、フェーンストレム中佐、そして俺の四人が、それぞれ独立してセルヴェスヴィークを目指すことになり、話題はいくつかの懸案事項へと移ることになる。

「イェンネフェルト伯が俺たちのことをどれだけ問題視するかだけど……」
「まあ、手配書が回るほどではないだろう。カールの手前、自らの失態を公に晒すとも思えん」
「それはそうだ。そういえば、船の手配って簡単にいくものなのか？」
「ちょうどオクセンシェルナへ向かう船があればいいが、そうでなければ一隻雇うことになるな」

現在、俺たちの財政状況はかなり逼迫している。
ある程度の期間があればそれなりに対策もできただろうが、予定よりも早い行動によって活動資金の調達までは間に合わなかった。
持ち出せたはいいが任官して間もない俺とクリスの蓄えは微々たるものだったし、売れば金になるとわかっていても兵装や軍馬などは手放すわけにも行かない。

そんな中で正に千金の働きをしたのはベッテであった。
こんなこともあろうかと！　と言って取り出した大粒の宝石は、直前に私財のほとんどをつぎ込んで購入しておいたらしい。
使う用事もなかったからとは言うが、二千人をひと月食わせて余る貯蓄を持っていたことに驚いた。
自分のものはクリスのものだ、と強硬に押し付けられ、この際のことであるから丁重に使わせていただくことにしたが、それも大半は北に向かう大多数のために割り振ることになった。

よってこれから先運用できるのは持ち出せた個人資産だけだ。
それでも生活に支障が出ることはないが、加えて船を雇うほどの余裕があるかと言えば、縦に振る首は持ち合わせていない。

「金が無くて立ち往生、というのはあまりにも格好がつかないな」
「そう構えることもない。私たちには優秀な軍師がついているのだから」

そう言うとひと呼吸ぶんだけ、悪戯っぽい視線を俺に向ける。
もしかして俺を錬金術師か何かと勘違いしているのだろうか。

「船があることを祈ろう」

……普段は信じていない神でも、祈られればそう悪い気もしないのではないか、と思う。
結果的には、それが通じたのかどうか、いささか判断に困るところである。

深くはないが、広範囲にわたって季節柄の下草を茂らせた木々の群生は、俺たちの足を鈍らせるには十分なものだった。
この林を抜ければ、セルヴェスヴィークは目と鼻の先らしい。
しかし日が落ちかかっていることもあり、今夜は少し開けた場所を見繕って野営することになった。

暖を取るわけではないが、上昇気流と二酸化炭素に反応する虫を遠ざけるために火を焚き、少し離れて半数が休み、もう半数は見張

りのために周囲を警戒している。
以前の俺なら、こんな天幕も張れないところで草を背に寝るなど耐えられなかっただろう。
だが人間とは慣れるものだ。
はじめの頃こそ戸惑ったが今では全く気にならないし、不測の事態に備えて脳の一部を覚醒させたまま休息をとることなど当たり前のようにこなせるようになった。
果たしてこれが進化なのか退化なのか定かではないが、わかることはただ必要な技能だということだ。

「……使わないに越したことは無いんだけどな」

目を閉じていた俺は、見張りのうち何人かの気配が変わったことに気付いた。
緊張しつつ周囲へはそれと悟らせないように体の神経を繋げていく。

盗賊だ。
世が乱れれば、自らを生かすために他者から奪うことを厭わないものも出てくる。
故郷を追われたもの、職を失くしたもの、両親を亡くしたもの。
だが、これらについては手を打つ余地がある。
救えないのは、他者から金を、物を、命を奪うことに酔っているものたちだ。
彼らは己の快楽のために焼き、殺し、犯す。
前者の罪が軽くなるわけではないが、後者はより重い罰を受けるべきだろう。

そして、この辺りでは後者のみが跋扈しているという報告があった。

領地的には管轄外とはいえ、ヴィッテルスバッハ卿の影響が及ぶ土地で前者が生産されることは少なかったのだ。

「ランツ兵長」
「はい」

何気なく目が覚めたふりをして、見張りに当たっていた中の一人を呼び寄せた。
イェスタ・ランツ。
シュトルーヴェから脱出する際にヒューゴを確認した、限りなく白に近い水色の瞳を持つ兵士だ。
小柄だが俊敏で、目と耳がよく、周囲の情報を分析する能力は他の追随を許さない。
そうした隠密行動向きの能力を買われ、今回も俺たちと同行している。

「何人に囲まれている？」
「正確ではありませんが三十人ほど。西側に半数、残りは周囲を包囲していますが、東にはほとんど配置されていないようです」
「……小賢しいな」
「ですね。町に近い東側には罠があるのでしょう」

こちらの人数は十四人。
正規の訓練を受けた兵士にかかれば問題なく処理できる人数差ではあるが、万が一ということもある。
このまま正直に三十対十四の戦いをする必要は無いだろう。

「みんな動けるか？」
「もちろんです」
「よし、まずは薄い北を破り、そのまま回り込んで本隊の後背を突

き、東に押し込もう」
「後背からの攻撃に少し角度を付けたいのですが」
「そうだな、馬が動線にかからないように動いてくれ」
「了解」

大きな動きをすることなく戦闘準備を終え、じりじりと近付いてくる盗賊の気配に集中する。
多めの荷物を持った俺たちを行商人あたりと勘違いしているのだろう。
必死に隠そうとはしているが、漏れ出してくるいやに下卑た匂いの殺気は消せるものではない。

俺が目で合図を送ると、ランツが焚き火を蹴り崩す。
一瞬にして周囲は緞帳を落としたような闇に飲み込まれ、突然の事態に動揺と狼狽を重ねる盗賊は浮き足立つ。
灯りが消えるのと同時に行動を開始した俺たちは、三十秒もかからずに北側でうろたえていた七人を昏倒させ、その二分後には後背から矢を射掛けた後突撃し、全く被害を受けることなく鎮圧に成功した。

「伸びていた十六人、罠に掛かっていた十二人、計二十八人の捕縛、完了しました」
「ご苦労様。ちゃんと何人かは逃げたな？」
「はい。五人が逃走中ですが、ランツ兵長他三名が尾行中です」
「ではランツ兵長が戻り次第移動する。それまで警戒しつつ待機」

三十人程度とはいえ、単一では大きい部類に属する盗賊団がこれほどまで統率が取れていないというのは解せなかった。
このぐらいの集団になれば、少なくとも一定以上の能力を持つものがいるはずだからだ。

そうでなければただのごろつきは徒党を組んだりしない。
こいつに従っていれば甘い汁が吸える、と思えるほどの打算は必要だろう。
だがこの集団にはそれがない。
つまり考えられるのは、彼らはさらに大きな集団の一部だった、ということだ。
それを確認するためにわざと数人を捕らえず、アジトまでの道案内をお願いしたのである。

なければそれが一番いい。
だが、同程度ならまだしも、百人から数百人単位の組織があったとしたら、後続の分隊だけではなく近隣の治安にも関わることになる。
できればなるべく派手な行動は起こしたくないのだが、そうも言ってられない。
要は俺たちだと知られなければいいのだから、下手に宣伝しなければ大丈夫だろう。
もし最悪の予想が当たってしまうと、俺たちが合流しただけでは力が及ばないかもしれないが……。

「ランツ兵長が戻りました」

縛り上げた盗賊たちを身動きできないように一人ずつ木に括り、野営の後始末を終えた頃になってその報告がやってきた。
恐らく二時間はかかっていないと思われるので、仮にアジトがあったとしたら、いくら遠くても十キロメートル以内ほどになるだろう。

伝令のすぐ後にランツも顔を出した。

「どうだった」

「中佐のお考え通りでした。規模は二百前後、かつて砦だった場所を根城にしているようです」

「こんな予想は当たらないほうがいいんだがね。距離は？」

「方角は南西、早馬なら余所見をしている間に着きますよ」

どうやら回り道をしたようで、その言葉振りからすれば四、五キロメートルといったところだろう。

この世界は距離や時間の単位が定められていない。

なので大雑把に捉えるしかないのだが、大抵の場合距離は馬の足が基準になっている。

しかしそれも時間の概念が明確ではないので、その感覚を身に付けるまで苦労したものだ。

……早めに距離と時間の概念を確立させなければいけないな。

「やはり他の分隊も集めなければ話にならないか。よし、有事に備え二騎一組で伝令に向かってくれ。集合場所は北西のはげ山だ」

それでも盗賊は俺たちの三倍にもなる。

ただの有象無象ならばどうにでもやりようはあるが、先刻想定していたような指導者がいるとすると、一筋縄ではいかないだろう。

砦に篭られでもしたら手も足も出なくなってしまう。

最低でも野戦に持ち込まなければ勝機は生まれないし、単純に数で押されても分が悪い。

「……トロイの木馬とか……無理だな、時間が足りない……」

俺は次第に明るくなる東の空を見上げ、どうにか活用できる知識

がないか考えを巡らせていた。

第三十五話　盗賊討伐

目先の目的を最重要とするならば、こんなところで時間を浪費するのは得策とは言えない。
だが大局を見れば、易々と看過しては大きな禍根となるかもしれない。
本来であれば当地の領主が解決するべき問題なのだが、ちょうどこの一帯を治めるブルムダール子爵は「何もしない領主」として有名であり、その渾名の通り定められた権限から逸脱した徴税や暴力は行わないが、一方で犯罪者の取り締まりに対してもことさら無視を決め込むのだった。

「話は聞いた。すぐに正面から叩き潰す」

東から昇る太陽が五合目までを登りきった頃、俺たちを除けば、集合場所に最も近いところにいたクリスたちの部隊が一番手で駆けつけた。
恐らくすべての部隊が集まるのは正午あたりになるだろう。
それにしても、到着して開口一番に放った台詞が先程の速戦案とは、クリスの性分を考えるならば、まったくらしいという他ない。
民衆に及んでいるであろう、及ぶであろう被害を看過しえない、という真摯な思い。
それは賞賛されて然るべきことではあるが、しかし現実問題、こちらは被害を受けるわけにもいかず、そのうえで三倍する敵を倒さなければならないのだ。

「叩き潰すのに異存はないよ。ただその方法が問題なんだ」
「所詮雑兵の集まりだろう。数だけを恃みにする下種には力の差を思い知らせればよい」
「二百人からの集団に統一された指揮系統が無いとは思えないよ」
「ただ勝てばよいというわけにはいかぬのだ」

研ぎ澄まされたエメラルドの切っ先には極低温の炎が揺らめいている。
ここは譲るわけにはいかない、そういう意思を隠そうともしない瞳。
言いたいことはわかるつもりだ。
正義を示すのに詐術まがいの勝利を収めても、一時的な対症療法にしかなりえない。
ほとぼりが冷めた頃にまた活動を始めるだろう。

今の世の中に於いて、盗賊やそれに類するものは風邪のようなものだ。
薬で中和している間に回復を待つことはできるが、根本的な対策とは言えず、気を抜けばまた発症する。
病原菌を駆逐できない以上、体を健康に、屈強に保つことが最大の予防となるのだが、今の体力ではそれも難しい。
ではどうするか。

病原菌……人の弱い心と言いかえてもいい。
それに脅しをかけるのだ。
体に近寄ったらただでは済まさない、と。
そのためには絶対的な格の違いを提示しなくてはならない。
小手先の技術で丸め込まれて負けただけだ、という言い訳をできなくさせるのだ。
だが。

「俺たちが名乗るわけには行かない以上、示威行為の効果は望めないかもしれない」
「わかっている」
「一時的な処置とするなら、手段を選ぶ必要は無いことも」
「無論だ」

一瞬だけ、逡巡との境を彷徨った瞳が力強い光を湛えた。
理想と現実の狭間で、ほんの少しだけ理想の側に足を踏み込んだのだ。
理想を追わぬ革命家は居ない。
愚直なまでに自らの信じる道を往かねば、開ける道も開かないのだから。

「……わかった。じゃあ作戦の説明をしよう」
「……貴様、謀ったな？」
「俺の一存では正面決戦なんかできないからね」

太陽が中天まで到達するにはまだいくらかの時間を要する。

総勢五十六名、うち非戦闘員二名。
対する盗賊団は推計二百に届くかどうかといったところ。
単純計算するなら、こちらは一人当たり三人から四人を相手にしなくてはならない。
しかも今回は正面決戦というおまけつきである。
「正面決戦とは言っても、ただぶつかるだけでは話になりません。

作戦の要は力の違いを解らせることです」
「しかし、この戦力差で勝つことがそのまま力の差、とはなりませんかな」
「確かにそうなのですが、負ける側というのは都合のいい言い訳を思いつくものですから」

フェーンストレム中佐の意見も全く正論なのだが、この際は相手に正論が通じるかどうか、という問題があった。
夜襲して火責め、小分隊になったところを各個撃破、他にも時間を使えば兵糧攻めや潜入して内部崩壊を誘うなど、いくつか効率的な勝ち方はある。
だが、そうした戦い方では狙う効果は生み出せない。
不機嫌を隠そうともしないクリスが、つまらなそうに例を挙げる。
「負けたのは数に差がありすぎてちょっと油断したからだ、もう一度やれば負けるはずが無い、とな」
「……なるほど。戦術的な勝利でも戦略的に価値が無ければ意味がないというわけですな」

想定したよりも早く全員が集結し、それぞれの集団を率いていた四人は予定外の会議を始めていた。
基本方針は話し合うまでもないことだが、それを達成するには相互の意思疎通が欠かせない。
戦闘に限ることではないが、柔軟な連携をすることができるのは互いに意図するところがわかっていればこそである。
当然それは、この場に於いても例外となることはない。
例外なのはクリスの不機嫌さであるが、主に俺の発案に因っているであろうことは疑う余地がない。
「実は、戦力という意味ではそれほど悲観してはいないんです。数

は違いますが、こと集団戦の錬度には大きな開きがありますし、なによりこちらは全員が騎兵ですからね。然るべき戦場を選定できるならそう負けることはないでしょう」
「すると必要なのは、いかにして敵を引き摺り出すか、ということになりますな」
「はい、ですがそれはさほど難しくもありません。盗賊という動物は逃げる獲物を追う習性がありますから」
「我々の人数が少ないことを逆手に取る、と。……しかし、それは小細工になるのでは」
「敵本拠地の周りも開けてはいるんですが、逃げ込まれると厄介なので、一戦で決着を付けるための布石ですね」

自分でも空々しいとは思うが、こればかりはどうしようもない。
布石であることは間違いないが、万が一逃げることになった場合を考えた結果だ。
森に囲まれた敵地では騎兵であることが最大の枷となる。
勝率が変わらないのであれば、退却線を確保できる場所のほうがいい。
それに盗賊が総出で現れないということだって十分あり得る。
砦に近いほど増援に対処する時間が短くなるというのも、敵地戦を嫌う理由のひとつだった。

説明するときにこの消極的な背景は伏せていたが、納得のいかない様子を見るに薄々勘付いてはいるのだろう。
それでも俺は、いくら不満を待たれようとも、生き残る確率を増やす準備を怠るわけにはいかないのだ。

過去、この周辺は侵略戦争の最前線だったことがある。
正確に言えば、「最前線だった」場所は他にも無数に存在し、ここもその中のひとつに過ぎない。
北方で力をつけたアヴェストリア皇国は、その勢力を拡大するために南方へ版図を広げ、その拡大に応じて「かつて最前線だった場所」を量産していった。
土地だけが広がり無抵抗のままに併呑された地区も少なくなかったが、それよりも圧倒的に多数を占めたのは対話の機会も与えられぬままに蹂躙された邑や集落だ。
彼らの大半は自らの平和を守るため、周囲の小勢力と連合するなどして侵攻を食い止めようと立ち上がり、その全てが失敗に終わることになる。
とは言え、易々と敗れたわけではない。
侵略戦争の後期には一大反抗連合が組織され、二十年もの長きに渡って抗戦した。
皇国側の補給線が伸びきっていた、という側面もあるにはあるが、要所に建設された砦や要塞が最大限に機能したからだ、と言われている。
現在では特に堅固に造られたのだろう一部が現存するのみだが、そのほとんどは軍の駐留施設などとして管理されており、若干の感傷と皮肉を感じずにはいられない。

盗賊の本拠地、というともっと入り組んだ森の中や天然の洞窟などを連想してしまうが、それはやや高台に鎮座して近付くものたちに睨みを効かせている。
ここからは見えないが後背に川が流れ、なだらかに広がる平野は裾の際まで遮蔽物も無い。
つまり今身を隠している林から出れば、およそ一キロメートルほども離れた砦から丸見えなのである。
知らなければこんなにも目立つ建物が盗賊の塒だとは思わないし、

例えばそれに油断した旅人を襲撃することも容易いだろう。
視界の悪いところならありうる、討伐にやってきた集団に不意打ちを喰らう、ということもなくなる。
「俺たちは何も知らないふりをして、ここで休憩を始めるわけだ」
「そして盗賊が現れたら逃げるふりをして、平原に誘い出すのだな」
まだわずかに険のある粒子を身に纏っているが、その棘の毒はかなり薄まったようだ。
目前に迫った戦いへと意識的に集中させているのだろう。
こういうところの切り替えはさすがと言う他ない。
しかし、準備も整い、後は行動するだけとなったところで不審な動きに気が付いた。
「……まずいな」
「どうした？」
「盗賊がこっちに向かってきた」
俺たちはまだ身を隠しており、気付かれてはいないはずだ。
その証拠に五十人ほどの盗賊たちも何かを警戒している様子はなく、方向も少しずれている。
手には武器を携えていることから、これからどこかに「仕事」をしにでも行くのかもしれない。
「見過ごすわけにはいかぬ。行くぞ」
「……わかった」
予定とは変わってしまうが、悪くない。
同数程度なら間違っても負けるはずがないし、ここで敵の戦力を

削れば後々も楽になるだろう。
増援が来る前に片付けて、迫る増援は予定通りに対応してもいい。
図らずも各個撃破の好機となったわけだ。

「せっかく立てた貴様の作戦もふいになってしまったな」
「まあ、ね。臨機応変なんていうのも、たまにはいいじゃないか」
「よく言う」

あとわずかで射程距離に入る盗賊に向けて、クリスの目配せを受けた数十人が弓を引き絞った。

第三十六話　海賊と盗賊

引き絞られた弓は満月のようだった。
号令と共に月齢を進めた弦は瞬く間に元のかたちへと戻り、研ぎ澄まされた矢は大気を切り裂いて弧を描く。
その尖端は盗賊たちの進路をふさぐように大地を穿ち、その歩みを止めることに成功した。

何が起きたのかも正しく把握できず、ただ浮き足立つ集団は自らの隙を隠そうともしない。
第二射と同時に突撃した俺たちは、ほぼ同数である以上、個々の技量で劣る盗賊程度に負けるはずもなかった。
個人的なことだが、俺はこのとき初めて敵を打ち倒したという実感を得ている。
手に残る重い感触には露ほどの歓喜も達成感もなかったが、特に深い安堵があったことだけは忘れないだろう。

「おかしいな、見えないはずはないのに、仲間がやられても反応がない」
「奴らの仲間意識などその程度かも知れんぞ」

手早く戦闘力を失った盗賊たち全員を拘束し終えたものの、砦に動きがないというのが不自然だった。
吐き捨てるようなクリスの意見も可能性としてはありうるが、それよりも体面を気にするこの手の集団が、目の前で唾を吐いた俺た

ちを放っておくということは考え難い。
状況を見る、というらしからぬ選択をしたとすると、未だ二倍以上の人数を保有しているにしてはあまりに消極ではないか。
「……考えられる理由としては、今、砦には人がいないとか」
「よほどでなければそんな馬鹿な真似はしないだろう」
「まあ、彼らは軍人じゃないからね」

通常、軍事的な拠点には対外戦力と守備戦力が配置される。
いくら外で戦果を挙げたとしても、戻る場所がなくなってしまっては元も子もないからだ。
他にも食料の輸送や補充人員の派遣などにも関係するため、将の考え方によっては精鋭部隊が守備に当たることも珍しくない。

しかし一方では、奪われたら奪い返せばよい、と考えることも可能ではある。
戦力を分散させることを嫌う場合の極端な例、としても説明は付く。
まして相手は盗賊であり、こうした例外的な積極策を採っていても何ら不思議ではなく、むしろ彼らの性質を鑑みれば正しい選択であるかもしれない。
「喋るかどうかはわからないけど、とりあえず聴いてみよう」
「うむ……そうだな」

結論としては、俺の予想は半分ほど当たっていた。
聴き出すのには時間がかかるかと思われたが、保身のために半ば

自棄になっていた盗賊たちは聴いていないことまで垂れ流してくれた。

ここにいる以外の仲間は全て、別の場所で武力行動中であること。
彼らはその伏兵として移動しようとしていたこと。
それは他の一団との縄張り争いであること。
その一団は海賊のくせに地上でも我が物顔で横行していること。
海賊は義賊的な集団であり、その暴力の標的は彼らのような盗賊や悪徳貴族であること。
海賊のリーダーは女性であり、かなりの美人であること。
それに比べて彼らのリーダーは切れ者ではあるがむさ苦しい男であること……。

話が進むにつれて、情報提供なのか愚痴なのか判然としなくなる。
まだ話し足りない様子の男を制止して、情報収集を切り上げた。

「その海賊とやらは我々の力にはならないものか」

引き出した情報を脳内で吟味していた上官は、考え込んだままの姿勢で唇だけを動かした。
ただ黙っていれば芸術品のように繊細な少女であるが、わずかでもその内側を知るものにとっては、希少価値を有する外側ですらも彼女のごく一部でしかないことを思い知らされている。

「敵の敵は味方、ですか。今現在は利害が一致するので問題ないでしょうが、その後も、となると簡単ではないと思いますね」

「問題は海賊の目的ということか」
「そうです。彼らの敵は何なのか、それがわからないことには交渉のしようもありません」
「……よし、ではまず話を聴くとしよう」

少なくとも盗賊の討伐に関してなら味方であり、その後のことはそのときに決めればいい。
どうやら民衆に悪事を働く集団ではなさそうだし、懸念材料だった盗賊への牽制効果という点では、より明確な上位勢力がそれを引き受けてくれるならば願ったりというものだ。
楽観に過ぎるか、と思わなくもないが、行動しなければ幸運が転がり込むことなどあるわけがない。

「ランツ兵長はいるか」
「はい」
「二人選んで想定地点の偵察へ。私たちは森の中を曲進して盗賊の先陣を叩く」
「心得ました」

恐らく戦闘の規模としてはそう大きいものではないだろう。
伏兵に置くはずだった人数が五十人あまりということは、盗賊と海賊の戦力差もそれほど開いてはいないはずだ。
とすれば俺たちの戦力が乾坤の一擲になることは想像に難くない。

拘束した盗賊によれば、森の向こう側で展開した本隊は徐々に海賊を見通しの悪い場所へと引きずり込み、後発の伏兵が横撃をかける、という作戦を立てていたらしい。
ならば俺たちは、その策を有効に利用してやろうではないか。

広葉樹が多く、その葉が太陽を遮るせいで薄暗くなっている森を慎重に進む。
いくら経験しても慣れることのない空気を感じ取ったのは、偵察に出たランツ兵長と合流して間もなくだった。

状況としては、順調に盗賊たちの策が進行しているようだ。
軍隊同士の戦争のように陣形がどうこうというものではないが、乱雑な混戦の中でも一進二退を着実に繰り返す様子は、聞いたように盗賊のリーダーがそれなりの指揮能力を持っていることを窺わせる。
それに比べると海賊側はただ漫然と攻め続けているだけで、特筆するべきものは見受けられない。
現時点での大勢は、伏兵がいなくなっている、という事実を除けば盗賊側が二歩か三歩ほど優勢であると言えるだろう。

「私たちにとっては好都合なのだろうがな……」

クリスは興が冷めたように口を開き、形のいいあごに指を添わせた。
仲間に引き入れるなら優秀な者のほうがよかった、といったところなのだろうが、それも過ぎれば話し合う機会そのものが無くなってしまう。
こちらとしてはなるべく高い利率で恩を着せたいのだから。

「予定通りならそれに越したことはないですよ」
「わかっている」

既にほとんどの海賊は森の中に引きずり込まれており、退却が困

難と思われる奇襲地点へ徐々に近付いていた。
ただ俺たちの標的は海賊ではない。
予定地点より少し前、海賊たちが自由に動けるぎりぎりのところで盗賊の後背から打って出る。
罠に嵌めようとしている者は、自らが嵌められる可能性を失念していることが多い。
そのときの驚愕は普通に嵌められた者の比ではないだろう。

二つの集団は秒読みができるほどまで接近する。

「……違う」

小さくつぶやいた声が耳に届く。
待機している兵たちが今か今かと指示を待っている中で、指揮官はその役目を放棄したようだった。

「どうしました」
「やつらは自力で勝つつもりだ。見ろ」

言われるままに視線を前方に投げかけると、戦況が大きく動く瞬間に遭遇した。
血気に逸って前進していたはずの海賊たちが、急遽反転し整然と退却を始めたのである。
一瞬だけ呆然と見送った盗賊たちは、それまでの作戦も忘れ、鬼の首を取ったような歓声を上げながら追撃していく。
中腰だった姿勢を正し、遠ざかっていく声と背中を確認した。

「……これで勝敗は決まりましたね」
「先ほどは不満に思ったが、なかなかどうして、優秀な将ではないか」

「嬉しいのはわかりますが、おかげで交渉は難しくなりましたよ」
「そんなことはない。むしろこれでよかったのだ」

有為の人材を恩で縛ることにならなくてよかった、と彼女は言う。
確かに協力を取り付けるだけなら恩を売ったほうが効率的な交渉ができるだろう。
ただ恩を買ったほうはどうしても引け目を感じてしまうはずだ。
ニュートラルな関係で協力体制が取れれば、どちらかが互いを裏切らない限り、恒久的に続く信頼関係になりうる。

「それにしても中佐、また不発だったな」
「まるで私が占い師のように言わないでください。戦わずに済むなら外れたほうがいいですよ」

才能として凡百であることを自覚している俺にしてみれば、相手のあることを完璧に予測するなど叶うべくもないが、確かに、もっと戦わずに済む方法を優先して模索するべきだったかもしれない。
最近は効果的に勝つことばかり考えていたように思う。
それも必要なことではあるが、人間であろうと思想であろうと、戦って無傷で済むものなどないのだ。
今さらながら気付けたのは幸運だった。
これから先は、さらに視野を広く保つことが重要になるはずなのだから。

第三十七話　傭兵と海賊

瞬く間に盗賊を追い散らした海賊たちは、よく訓練された動きで整然と戦後処理を行っていた。

兵の統制を図るということは、忠誠心や従順さがあればうまくいくというわけではない。

それらがあることを前提として、兵士ひとりひとりが考えて動き、最善を尽くしてこそ最大の効率が上がるものだ。

なかには兵の個性を考慮せず、ただ機械のように従順であればよい、という指導者もいるのだろうが、俺はそうは思わない。

確かにシステムとしての効率だけならそれが正しいのだろうし、失っても替えがきくというのはその利点の最たるものだろう。

ただ人間を運用するにあたって、有機物を無機的に構成するというのはどこか無理があるように感じる。

二十や三十の仕事ができる人間もいるのに、全体の基準が十だから、と全員にそれだけの仕事しかさせないのは果たして効率がいいと言えるのか？

組織というのは有機的に運用してこそ、その真価が発揮されると思うのだ……。

「どこぞの軍隊くずれなのですかな、賊にしておくにはもったいない動きをする」

「或いは傭兵か。どちらにしろ有能であることは間違いあるまい」

日頃から軍に調練を施す立場でもある老中佐たちからは控えめな感嘆の声が漏れる。
事実、素人に毛が生えた程度の俺には、俺たちの部隊と比べても練度に大きな差があるようには見えなかった。
熟練の技によって有機的な運用を得意とするふたりは、わずかな動きを見ただけでそれと見抜いたようである。

「しかし大佐、この状況で交渉ができるでしょうか」

どうやら海賊たちはここから先に進み、盗賊たちの砦へと向かうようだ。
義賊的な活動をする、ということだから、不法に貯め込んだ食料や貴金属などを接収するのだろう。
そこに訪問したのでは、悪い意味で同業者かと疑われるのは想像に難くない。
そもそも問題であった盗賊は、現状で俺たち以上の効果的な対抗者によって叩きのめされている。
この海賊たちが治安の守護者に足るという確証さえ得られれば、特に接触を持つ必要もないのではないだろうか。
だが俺たちの上官は何を言っているのだ、とばかりに首を傾げる。

「何故私たちが海を目指しているか忘れたのか、中佐」
「海路でオクセンシェルナ領へ向かうためですが……。ああ、迂闊でした」

なるほど、これは文字通り、渡りに船だったのだ。
民間の定期船か、それがなくとも商船などに話をつけて航行するつもりだった。
しかしそれらは、万が一軍隊の検閲にかかってしまうと袋の鼠になってしまうだろう。

それも確率で言えば大きな賭けではないと踏んでいたのだが、これを無視して動けるに越したことはないではないか。

彼らは海賊、と言うからには海上での活動が本分であり、であればこそ船は持っていて当然だ。

色よい交渉ができればそれを貸してもらえるかもしれない。

「そして機は今だ。全隊、前方適正地に布陣せよ」

何万人へと伝える号令ではないために張り出した声ではなかったが、木々に身を潜めた兵たちを動かすには十分だった。

名工の手による鐘は、小振りでも驚くほど広い範囲にその音を響かせるものである。

或いはこの声量であっても大軍を律することができるのかもしれない。

俺たちが姿を現したことによって、海賊たちの警戒が指向性を持ったものに変化する。

殲滅したはずの盗賊が予備戦力を隠していたか、と身構えるのも当然だろう。

だが、その緊張が落ち着くまでにそう長い時間はかからなかった。

俺たちは見るからに盗賊らしくないし、緊張した空気を破るように一組の男女が交渉を求めて進み出たからだ。

もちろんその男女の名は、伊藤玲司とクリスティナ・アッテルベリという。

クリスは全ての武装を解いたが、俺の腰には鞘に収めたままの剣

がぶらさがっている。
とはいえ、槍を持っている相手にしてみればどちらも丸腰のようなものだ。
見るものが見れば、俺には獲物の不利を覆すほどの技倆があるはずもないことぐらいわかるだろう。
情けない話だが、武器を外そうとしたところ、剣くらい佩いていなければ武人に見えない、と言われたゆえの処置である。
むやみに刺激を与えてしまうよりはいいのだが、釈然としない思いが残るのは何故だろうか。

「我々は流れの傭兵団だ。盗賊を退治していただいた礼がしたい。代表者にお目通り願えるか」

まだ立場を明かしたくないゆえの苦しい設定だが、まあ、体裁の落としどころとしては適当だ。
話し合いのきっかけにするなら問題ないだろう。

見事なまでに黒々と日焼けした男たちが、胡乱な訪問者の用件を後方に伝えているようだ。
その腕や首周りを見れば、太陽の光を遮るもののない場所で汗を流しているのが見て取れるほど、男たちは屈強だった。
ヴィッテルスバッハの兵たちも日々欠かさない鍛錬によって引き締まった体をしているが、馬に乗らねばならない彼らは極端に筋肉を付けることを嫌う。
機動力を身上とした軍において、鈍重は悪ですらあるのだ。
一方、いくら体重が増えたところで船足に影響が出るとも思えない海の人間は、帆を張り、櫂を漕ぐことに必要な筋肉を十分に身に付けることができるだろう。
肩は隆々と盛り上がり、腕は丸太のように太い。
その体から生み出されるであろう破壊力はいかほどのものか。

そんな大して楽しくもない想像で身震いをしたところで、正面の人垣が割れ、長身の女性が歩いてきた。
俺と同じか、やや低いぐらいではないだろうか。
腰まである黒い髪は先端近くで結わえられ、一歩足を進めるたびに左右に揺れる。
他の男たちと同じように日焼けした肌は躊躇なく露出され、非常に女性らしい曲線とあいまって、健康的な色気を惜しみなく振り撒いていた。

「あたしに話があるって？」

俺たちの目前で歩みを止め、嵐の大海を思わせる深い灰褐色の瞳を投げかける。
その視線は忌避するでもなく、威嚇しているふうでもないが、襲い掛かる高波を前にしたような威圧感を感じずにはいられない。
顔には出ていないと思うが、呆けていたのは間違いないだろう。
クリスの声が聞こえなければ意識を掴み直すのにかなりの時間を要したはずだ。

「私は傭兵団の代表、クリスティナ・アッテルベリだ。こちらは参謀のレイジ・イトウ」

紹介されたことに気付き、慌てて頭を下げる。
目を上げると、鋼色の視線にぶつかった。

「何か？」
「ああ、珍しい名前だな、てのと、傭兵にしちゃ線が細いな、と思ったんだ。なるほど、参謀ね……ああ、気に障ったなら悪かった」

両手をひらひらさせて苦笑する。
どうやら思ったことをそのまま喋って後悔する性質らしい。
気にしていない、という意味を込めてもう一度、軽く頭を下げた。
「あたしはセルマ、セルマ・ヴァーサ。代表者、なんて柄じゃないんだけどね」

まるで友人に愚痴をこぼすように溜息を吐く。

「どういうことか聞いても？」
「頭領は陸に上がるの嫌がってさ、仕方なく副頭領のあたしが指揮してるわけ。目が届かないぶん好きにはやってるけど、本当は交渉ごとなんかしたくないんだ」
「我々も畏まった話がしたいわけではない。ただ礼が言いたかっただけだからな」
「そりゃあ助かる」

快活に白い歯をこぼして笑うさまは、夏場に小川を見つけたときの爽快感によく似ている。
果たして本当にこの女性が先ほどの洗練された戦闘を指揮していたのだろうか。
確かに、ガキ大将がそのまま大人になったかのような印象は受けるが、とても戦闘という血なまぐさいことに従事しているふうには見えない。
そういう意味では我が上官殿も、方向性の違いこそあれ一軍を束ねて戦場を駆け回るようには見えないのだが。

「それにしても、あたしらはあんたらに礼を言われるようなことをしたつもりはないんだけど」
「盗賊を退治しようにもなかなか手を出せずにいたのだ。感謝する

のに他の理由がいるものか」
「でも傭兵でしょ。誰かから頼まれてたものを掠め取られたらいい気しないんじゃない？」
「重要なのは結果であって過程ではない」
「……ふうん、楽して報酬を受け取れるってこと？」

急激に体感温度が氷点下まで滑り落ちた。
氷まじりの嵐を秘めた瞳が、研ぎ澄まされた刃のように俺たちを切り刻む。
雰囲気の変化に気付いた海賊たちもじりじりと重心を下げて瞬発の備えを始める。
なるべく虚偽を廃した端的な返答は、誤解を生むには十分すぎた。
だが、それをいささかも意に介した様子でもなく、隣に立つ少女は言葉を紡ぐ。

「私の望む結果とは、民の安寧が保たれることだ。傭兵だからとて義勇なきものと見られるのは心外だ」

海賊の副頭領は微動だにせずクリスを睨み続けた。
嵐の旋風は沈静化の兆しを見せ始めたが、未だ氷点下からの回帰は叶わない。
次いで何かを考えるように小さく首を傾げ、さらに困った猫のように眉根を寄せる。
二、三度、発音を躊躇うように紅の唇を開いたが、意を決したように桃色の舌で舐め潤してから声帯を震わせた。

「……もう少し簡単に言って」

第三十八話　海への糸口

壊滅せしめた盗賊団は、大きな町が一冬を越すに足るほどの財産を溜め込んでいた。
これらはもともと奪われたものであるから、元の持ち主に返すべきである。
しかしなかには既に所有者を失っている貴金属なども含まれ、無作為に町村の出入り口などに放置することも憚られた。
おそらく俺たちだけでは対処に窮していただろう。
そこは手馴れた海賊たち、有形の財は無形の金貨や銀貨に換え、周辺の町や村で大盤振る舞いの飲み食いをした後、余分に過ぎるほど金の詰まった皮袋を置いて帰るのだった。
荒っぽいマネー・ロンダリングのようだが、そうするのが最も角の立たない方法なのだ。
換金した貴金属や高価な布などは、後々船に積み込んで他国まで売り払いに行くのだという。
収支を考えればまるっきり損かぶりさ、とは海賊の副頭領、セルマ・ヴァーサの言である。

「うちらは食えるだけ食うのがお手当てみたいなもんさね」

売るにも運ぶにも難儀するのは食料だった。
そこで、重い皮袋を持って四方に散る集団とは別に、盗賊の砦に残るものたちはここで酒盛りを始める。
ある程度保存が利くものは大概、酒の肴と相場が決まっているの

だ。
むっつりと押し黙っていた屈強な船乗りたちも、酒が入れば地上であることも忘れて歌い出す。
元来陽気な性質である彼らは、今日出会ったばかりの傭兵団でもわけへだてなく肩を組み、杯が渇くことを許さない。
傭兵団の正体たる城の正規兵も、そんな空気に中てられて相好を崩し、わずかに残っていただけの警戒心を手放して騒ぎを加速させる。
酒気に満ちた乱痴気騒ぎは空が白むまで続けられた。

目を覚ますと、既に太陽は中天から離れていくところだった。
まわりには未だ惨劇の後のように倒れ伏す男たちが重なるようにして呻いている。
気温が高く、潮気の混ざった風のせいで体中がべたついていて気持ち悪い。
確か裏手に川があったはずだ。

「おや、おはようさん」
「おはよう、セルマ」

途中、外壁にもたれて足を投げ出している美女に声をかけられた。
昨日と同様、肩やら脚やらを剥き出しにしているが、残っている酔いのせいか合わせが雑なようだ。
若干顔色が優れないところを見ると、濡れた髪を乾かしているうちに動くのが億劫になったのだろう。

「今そっちに行くとクリスとベッテに何されるかわからないよ」
「……それは怖いな」

どうやら水浴びをしようと思ったのは俺だけではなかったらしい。

偶然楽園に迷い込んだまま出てこられなくなるのは、まだ御免こうむりたい。
適当な場所を見繕って、壁際に腰を下ろす。
気だるげな空気がひとまわりすると、視線も動かさずにセルマの口が開いた。

「あんたらが悪い奴じゃないのはわかったけど、昨日のは本気で言ってたのかい？」
「冗談であんなことは言わないよ」

会話の機会を得た俺たちは、彼女に向けて反皇国活動の概要をかいつまんで説明した。
とりあえず南方に一大勢力を築きたいこと、下準備に動いているスヴェンたちのこと、盟主たるヴィッテルスバッハ卿を助け出さねばならないこと、新たな後ろ盾を得るために海路を往かねばならないこと。
冗長な言い回しではなく率直に目的を伝えたのは、彼女の為人が率直さを旨としていることを感じ取ったためだ。
説明は歩きながらすることになった。
俺たちが先導し、海賊がその気ならば一網打尽にできるような隊形でもって。
話の合間にはセルマからの質問や疑問点について丁寧に回答し、時折虚空を睨むように考え込んだり、小さく頷く彼女に、かなり正確な形で伝えることができたように思う。
笑殺するでもなく、真剣に検討している様子を見るにつけ、俺たちの判断は間違いではなかったのだと確信させられる。
砦に到着したために返事は先延ばしにされたが、一定の期待感は持つことができた。
そして今、その続きを聞くことができるのだろう。

「……なら、あたしとしては協力することに問題はない。いや、進んでやらせてほしいぐらいさ」
「本当か」
「もともと御上には目を付けられてるならず者の集まりだ、それが変わるってんならあんたらみたいに話がわかる奴のほうがいい」
「違法は違法で困るんだけどね」
「そういうふうに言う奴のほうが窮屈じゃないだろ？」
「なるほど」

真珠のような歯を零して快活に笑う。
今は窮屈だから、ゆるくなるならそっちがいい。
単純、と言えば考え無しのようで印象が悪いが、個人の感情としては単純であればあるほど真理に近いように思われた。

「まあとにかく、あたしは賛成だけど、問題はうちの頭領さね」

どういう問題なんだ？　と聞き返そうとすると、裏手のほうからクリスとベッテが歩いてきた。
普段の態度や言葉遣いを見聞しているととてもそうは見えないが、遠目からだと「ああ、主人と従者なのだな」と納得できてしまう。
声が聞こえなければ、甲斐甲斐しく世話を焼いているようにしか見えないのだ。
ふと俺たちに気付いたベッテが、いかにも手抜きな身振りで挨拶らしき所作を向ける。
互いに何か通じるものでもあったのか、いつの間にか不良秘書官との友誼を成立させたらしいセルマも似た動きで手招く。

「レイジ君も水浴び？　ちょっと遅かったわね」
「意図的に遅くしたんだよ。見物料に何を取られるかわかったものじゃない」

「そんな小賢しい子、お姉さん好きじゃないなあ」
「あれ？　あたしはてっきりレイジのほうが年上だと思ってたけど」
「それはそれよ」

クリスは呆れたようにベッテの肩を叩きながら、俺に向けたその目で「そんなことをしたらただではおかぬ」と牽制している。
だからそんな気はないというのに。
視線による意思疎通を試みたが、納得してもらえたのかは今ふたつばかり自信がない。
そうした様子を含み笑いを浮かべて観察している元世話係は、あえて無視することに決めた。
どうやら世話されていた側も似た方針を打ち出したらしい。

「何を話していた？」
「協力を仰ぐにはひと手間かかりそうだ、というようなことを」
「うちの奴らもぼちぼち起きて集まってくるでしょ。面倒だから歩きながら話すよ」

海賊の頭領オーロフ・ヴァーサは、誤解を恐れずに表現するならば「正義の人」となる。
彼らの海賊団はもともと地域住民に対して不干渉の姿勢を保っていたが、その真意は住処のそばで騒がれても面倒だ、という至極当然の利己主義によってであった。
どこの誰に襲われたかわからないから泣き寝入りをするのであって、拠点が明確であるなら抵抗や報復が起こらないわけがない。
ならば相互不干渉という立場を取り続ける限り、比較的安全に生業を謳歌することもできた。

しかしオーロフは前頭領から姓を享け、新たに組織を運営させるにあたって大きな変革を実行する。
今まで無視していた地域との交流を深め、標的とする収入源は人々に危害を加えるもののみに限定したのだ。
当初はそんな行動を訝しがっていた住民たちも、不当に徴収された物資などが還元されるに至ってその態度に一貫性を持つことになる。
海賊は悪徳役人や貴族から金品を奪い、別の形に変えて地域に投下する。
貴族たちは海賊を捕らえようとするが、住民は知らぬ存ぜぬで尻尾は掴ませない。
腹を据えかねた権力者が集落ごと焼き打つようなそぶりを見せれば、別の角度から攻撃を加えることでその目を逸らす。
こうして彼らは海岸沿いの地域で人々の守護者となり、実質上支配することに成功したのだ。

つまり何が問題になるかというと、対症療法ながらうまく機能しているところに、わざわざ乱を起こそうとする俺たちが歓迎されるだろうか、という点だ。
私見ではあるが、多分に排他的である海賊という集団を改革し、地域との和合を果たしたオーロフ・ヴァーサなる人物は人格、器量ともに卓越した指導者に違いない。
その優れた指導者は、果たして率先して外患を取り込むものであろうか。

「……しかしそれは恒久的なものではない」
「ああ、目と鼻の先には海軍の一、ブランデンベルク侯爵の艦隊が駐留してる。それは今に始まったことじゃないけど、牽制されてるのは確かだわね」
「それでは悠長に構えているのは危険ではないか」

「頭領が言うにはね、皇国の意向には逆らい難い、でもブランデンベルクの心情はあたしら寄り、ってんで本格的な軍事行動は起こさないだろうってさ」
「何ともあやふやなものだな。それでは薄氷を踏んでいるのと変わらぬ」
「……そんなことあたしに言われてもねえ。そりゃもっと気楽に動けたほうがいいのは間違いないけどさ」

不毛になりかけているクリスとセルマの議論は終わる様子を見せない。
クリスとしたらどうにか足掛かりを見つけたいのだろうし、セルマも意地悪く意見を躱しているわけではない。
いずれ破綻する膠着であっても、勝機もなしにそれを破ることは自殺行為と言える。
もちろん聡明な上官のことだ、それはわかっているはずだが引っ込みがつかなくなっているのだろう。
頃合を見て助け舟を送り込む。

「セルマ、やっぱり本人と話してみないとわからないよ。機会を用意してもらえないかな」
「……それは構わないけどね。断られても恨まないでおくれよ」

助けると睨まれる、なんて理不尽な状況に慣れるというのは喜ばしいことなのだろうか。

彼女らは話を通すために一足先に住処に向かう。
視界が開ければ海岸まで見渡すことができ、左手に望む港町セル

ヴェスヴィークで待っていてほしいということだった。

第三十九話　海原を臨みて

近隣の地形を把握している海賊たちは夜の闇であっても迷うことは無い。
というのも、常日頃から海上の指針として星読みに慣れている彼らである、風や海流に左右されない道程は昼間に街道を往くのとさほど変わらぬ平易さなのだろう。
一方、地理に不慣れな上、星による方位測定もたどたどしい俺たちは、慎重を期して宵の密度が薄くなるのを待って行動を開始した。
林を抜ける頃には瞬くごとに空が明度を増し、水平線から顔を覗かせる太陽は、そこに海があることを主張するように波を白くきらめかせている。
風向きによって強く潮の存在を感じさせる懐かしい匂いが鼻をくすぐるようにもなっていた。
少し目線を手前に移せば、くすんだ赤を基調とした建造物群が頭を覗かせている。

「あれがセルヴェスヴィークか」
「そうだ。漁業と海路物流によって栄えていた、大陸有数の歴史を誇る町だ」
「……栄えていた、ね」

ここに至るまでの道中、ある程度の歴史については聞かされていた。
歴史を紐解くことが趣味とは言っても、ただ漫然と無感動に脳の

肥やしにするわけではない。
むしろ、学生時代などはそうすることでしか歴史を語れないお偉方に幼稚な反感を抱いたものだ。
はっきり言って「歴史の教科書」ほどつまらないものはない、と思う。
そこに生きた人々をないがしろにして、出来事だけを詰め込むことに何の意義があるのか。
ただ、そう遠くない歴史の現場に立つと考えてしまう。
はたしてそれも善し悪しではあるまいか、と。

港町セルヴェスヴィーク。
かつては南国との流通のほとんどがこの港を通り、船旅に必要な物資の供給やひと山当てた商人が落としていく金で溢れかえるほどに潤っていたのだという。
富豪のために造られた城のような迎館もあれば、木戸銭で足りるようなあばら屋まで。
各地で絶賛された銘酒を取り揃える店から、安く雑味があれど人情溢れる地酒を扱う店もある。
港には大小取り混ぜていくつもの船が停泊し、縦帆のもの、横帆のもの、複雑に組み合わされたものなど一貫性を持たない。
それらは多種多様な人間が集まっていることを意味し、またそれらを満足させようと、競うように需要の隙間を埋めていった。
両手の指でも数え切れない宿は常に満室で、立ち並ぶ酒場は連日の仕入れに四苦八苦し、港に浮かぶ船影は一日たりとも同じであったことはない。
荒くれ者の男たちは女を口説くために身を粉にして働いて金品を貢ぎ、娼館で働く女たちは意中の男を振り向かせるために精一杯着

飾った。
商人はいいものを安く多く買うために交渉を重ね、趣味人は高価な美術品や芸術品を買い漁る。
町は発展を続け、漁業だけに頼っていた四百人そこそこの時期から十数年で、定住するものだけで八千人を越すまでに膨らんだ。
その流れは枯れることを知らぬ湧き水のごとく滞ることを知らず、世界の中心であるかのような繁栄は未来永劫にわたって続くものだと思われた。

今からおよそ二十年前。
領土的野心にかられたアヴェストリア皇国が侵略を開始する。
その目的の一端はセルヴェスヴィークの富を独占するすることだった。
名目としては、国家に所属していなかった港町を他国から保護するため仕方のないことだ、ということらしい。
皇国の当時の人口は百三十万人ほどだったが、わずか八千人が生み出す利益はその数年分に匹敵したという。
だが、金も気骨もあるセルヴェスヴィークの住人であっても、単純な数の暴力にはさからうことができなかった。
公式な記録では無血占領、および任意による上納、とあるが、その実態が武力占領であり強制徴発であったことを疑わずに済ませる材料は見出し得ない。
この後、アヴェストリアは潤沢な資金を獲て破竹の進撃を見せる。
数年間の一進一退を余儀なくされていた戦線を、わずか二ヶ月で押し切って見せたのだ。
その裏には反皇国連合を影で支えていたセルヴェスヴィークの凋落があったと言われるが、当然公的にはそうした事実はない……。

俺たちは、繁栄の名残を匂わせる港町に足を踏み入れた。
かつては町の象徴でもあったはずの迎館は補修もそこそこに利用され、着飾った人々で賑わっていたはずの中央通りも、喧騒はそのままに気品や優雅さを放り捨てている。
恐らく堅固に作られた建造物は占領の際、後に憂いを残すことのないように破壊されたのだろう、もとは小綺麗な店だったと思われる構えは整備もされぬまま安い居酒屋になっているようだ。
よく見ると上等の布だったであろう幟か飾り布が品書きを書き付けられて潮風になぶられていた。

「……戦後にここを復興させて交易収入を得ようとは考えなかったのか？」
「戦争には技術の向上がつきものだ。造船や食料の保存技術などが飛躍的に進歩したために、ここは交易点としての価値が無くなったのだ」
「なるほどね」

航続距離が伸びれば自ずと便利な場所も変わってくるということか。
今も漁業が栄えていると言えるのかもしれないが、以前の規模に比べればささやかなものだろう。
だがこの町の住民はそんなことを気にもしていないようだ。
それはそこかしこから溢れてくる笑い声や怒声で窺い知ることができた。

「しかし、これでは全員が休める宿があるとは思えぬな」

当面の問題が凛とした音で耳に滑り込む。

絢爛たる輝きが失われ、歴史の片隅に名を追いやられようとも、そこで生活を営む人々は存在する。
客観的に見れば、この町は「平均以上の漁港」としての機能は十分に保っているように見えた。
ただ、ここを拠点として漁業を生業とし、それを売ることで生計を立てている人々は、よそからの客で商売になることなど想定していないのだろう。
外からの船がなくなったこの町は、小さな旅籠でさえ懐古趣味の旅人や気まぐれな商隊だけでは立ち行かないのだ。

「無理にでもセルマについていったほうがよかったかな」
「……私もそう思い至っていたところだ」
「仕方ない、クリスとベッテだけでもどこかに泊まれないか探してみよう」
「勝手なことを言うな、今さら分散して憂いを囲うこともあるまい。野宿のほうが気楽というものだ」

まあ、そうかもしれない。
なるべく一箇所に固まっていたほうが何かと対応しやすいだろう。
苦笑がちに頷いて了承の意思を伝える。
しかし、仮にも一国の姫が野宿に慣れるというのはいかがなものだろうか。

「では野営の準備を。ランツ兵長、指示を任せる」
「はい」
「あとは……町の近くで野営するんだ、責任者に話を通すぐらいはしないといけないな」
「それは私とベッテでやろう」
「頼む」

なにしろ五十人以上が寝食するとなれば、おこす火もそれなりの数になる。
立ち上る煙で火災などの異常だと思われては申し訳ない。
さて、それほど長く待つことは無いと思うが、食料の補給はできるだろうか。

結論を言えば、その必要は無くなった。
準備を始めようかというときにセルマから言伝を受けた男の訪問があり、彼らの拠点へ招かれることになったからだ。

セルヴェスヴィークから海岸沿いを南下し迷路のような岩場を越えると、帆を畳まれた船が並ぶ入り江があらわれた。
内陸からは複雑な岩礁に遮られ、外洋からも湾に蓋をするように伸びた半島が存在を隠蔽している。
まさに天然の隠れ家であった。
目に見えるだけでも二十を越す船を横目に、入り江の最奥に鎮座する石造りの建物へ向かう。
その大きさは、十分な余裕を持つバスケットコートが二面入る体育館ほどもあるだろう。
一切の装飾を省き、窓も出入り口も小さく、ただ堅牢であることを目的として造られているようだ。
俺はこれによく似た建造物を、つい最近も目にしている。

「……この造りは、あの砦と同じだな」
「気付いたか。まさか皇国に知られていない施設があったとは」
「でも、これでは戦争には向かない」

思うに、ここは造られた当時から現在と同じ目的を持っていたのではないか。
用途は異なるが、公に知られぬための隠れ家として。
おそらくは地域の要人なり戦えないものを収容していたのだろう。
そうでなければここまで「篭城に適した造り」である理由がない。
普通、砦や要塞が拠点として作られる場合には、ある程度の大きさの扉が必要になる。
武装した兵隊や馬、武装の一式なども屋内で管理するため、それらが滞りなく出入りする程度には口を広げてやらねばならないからだ。
城であれば他の場所に待機、保管でもいいのだろうが、最前線となることを義務付けられた建造物で悠長なことは言っていられない。
もちろん例外もあるが、それは篭城、或いは時間稼ぎを念頭に置き、攻勢にはほとんど寄与しないというイレギュラーなものに限られる。

つまりここは、絶対皇国側に知られてはいけない場所なのだ。

「招待された、ということはそう警戒されているわけじゃないのかな」

兵士は外に残し、階級で上位の四人、俺とクリス、クリングヴァル中佐にフェーンストレム中佐、それと今回運んでもらう予定のベッテが交渉に臨むことになった。
人ひとりがやっと通れる扉をくぐり、用心を重ねて複雑に作られた通路を抜けて会議室らしき場所に辿り着く。
何度も階段を昇降し、その間に曲がった角は両手の指には収まらない。
俺は果たして建物のどの辺りにいるのか、全く見当もつかなくなっていた。

「君たちが国家転覆を図っているという自称傭兵団か」
室内に入ったところで明らかに空気の質が変わる。
氷点下の嵐を思わせたセルマのそれに似ていたが、はっきりと違う。
高波を前に干上がった海岸で独り立たされているようだ。
「訂正を要求しよう。我々が図るのは、よりよい国家の設立だ」
「詭弁だな」
「オーロフ！」
以前と同様、こうした空気に一歩も怯まないクリス。
聞き覚えのある名を叫んだのは壁際に立っていたセルマ。
一秒が何倍になったのかと錯覚するほど長く感じた短い時間は、オーロフと呼ばれた、おそらく海賊の頭領であろう男が興味を失くしたように視線を外すことで終焉を迎えた。
「ふん、気骨だけはあるようだ。だが今回は望みを聞いてやることはできん」
緩んだ空気が再び凍りつく。
門前払いではないが、これでは交渉も何もあったものではない。
しかし、役割的には俺がどうにか突破口を作らなければ立つ瀬が無いというものだ。
「理由を窺ってもよろしいですか」
「……俺の家族をわざわざ危険に晒すわけにはいかないし、負ける確率が高い勝負には乗りたくねえ、ってのはまぁ建前上あるわけだが」

だが、それだけではない、と。
というか打算的な考え方も建前でいいのか。
なるほど、確かに海賊というには毛色が違うようだ。
セルマに聞いていた話ではこちらの話も聞かずに追い返すような人物とは思えなかっただけに、この対応というのはそれどころではない何事かが……。

「どうやら海軍がここを目指しているらしい」

第四十話　虚名、勇躍

「そういうわけなんでな、お前らに構っている暇はない」

海軍がここを目指している？

陸からも海からも見通すことのできない、この秘匿された隠れ家が暴かれたというのか。

それは偶然か、密告か、地道な調査によるものか。

「待て、オーロフ、あたしはそんな話聞いてないぞ」

「本当についさっきだ。沖に出ていた監視船からの信号でな、大型艦一隻を旗艦とした船団が南下中だ」

「でも、ここがバレるなんてことあるはずないし、そもそもブランデンベルグは攻めてこないんだろ？」

「落ち着け、まだ客が出て行ってない」

急なことで冷静さを欠いたセルマがオーロフに詰め寄っていたが、控えめに受け取っても皮肉としか思えない表現で窘められ退く。

だが、その顔には不満と不安を練り合わせた化粧が色濃く塗りつけられている。

そうだ。

確か彼女は海軍からの大規模な攻勢はない、と断言していたはずだ。

その情報源であるはずのオーロフは超然としていて、真意を汲み取ることはできない。

敵は敵である以上、万が一も常に想定していた、というところだろうか。

「……火急のわりにはずいぶん悠長に構えているのだな」

今まで黙っていたクリスが口を開く。

交渉、というか頼みごとをしに来たにしては横柄な言いようではあるが、そこは俺も気になっていた。

「お前らは海ってものがわかってないな。急げばいいというわけじゃないんだ」

「そうか。では我々が船に乗り込むぐらいはできそうだな」

「おい、今はどちらの立場が上なのか、わかってて言ってるのか」

「気の短い男だ。わからぬか？　手を貸そうと言っているのだ」

これはまた際どいことを企んでいる。

単純に考えれば、海戦の経験がない俺たちが船に乗り込んでも足手纏いにしかならないだろう。

そんなことがわからない少女ではない。

俺はとてつもない嫌な予感が背中を這い回る感覚に身を捩る。

案の定、一瞬の静寂を破ったのはオーロフの笑い声だった。

「馬鹿なことを言うな、お前らなんか邪魔になるぶん積荷よりも役にたたねえよ」

「なに、文字通り手を貸すわけではない。二千の手勢で三万五千を打ち倒した、その頭脳を貸してやろうというのだ」

……まるっきり嘘ではないところに悪意を感じるのだが。

その作戦を考え出したのはこいつだ、とばかりにクリスの視線が伸びると、一斉に全ての意識が俺に向けられる。

仕方ない、機会を得るために多少の辱めは甘受しよう。

「そうか、お前らシュトルーヴェの残党か」

「話は早そうだな」

シュトルーヴェが堕ちたことは、まだこの辺りでは詳しいことが伝わっていないはずだ。

それだけで広域にわたる迅速な情報網があることを裏付けていた。以前の交戦記録もかなりの精度で保有しているようでもある。

その情報がどういうものかはわからないが、少なくともクリスの発言が誇大であることは気付いているだろう。

頭領は俺に向き直ると、相談を持ちかける風に訊ねてきた。

「頭脳の見解を聞いてみたい。今までの話で敵の目的は何だと推測する」

一応確認の意味でクリスを見遣ると、小さく頷くのが見えた。

「……それなりの数の船団で、急襲するでもない、という状況から考えると、まだこの場所は特定されていないものと判断します。演習でないとするならば、おそらくこの辺りだ、という目星はついているため、反応を引き出すための威力偵察ではないかと」

「なるほど、それはもっともだ。とすると俺たちはどうしたらいいと思う」

「このまま隠れているのも一案ですが、見つからない可能性がないわけではないことから、鼻先を叩きに出るのが最善と思われます。ただ……」

「ただ？」

「暗黙の中立を保っていたはずの軍が何故、今になって仕掛けてきたか、というところが腑に落ちません」

表情を観察するに、ほぼ同じ回答を持って問いかけてきたようだった。
最後はわずかに眉根を寄せたが、それが何を意味するかまでは読み取れない。
すぐに感情の波を鎮めたオーロフによって俺の疑問は解決する。
「先日掴んだ情報によれば、精彩を欠くブランデンベルグに業を煮やした中央が、切れ者の査察官を送り込んできたらしい」
ならばやはり、近々こういうことが起きるであろうことは想定していたわけだ。
セルマは知らなかったようだが、常に情報を共有しているとも限らない。
奔放な彼女のことだ、ここにもあまり帰らないのではないだろうか。
「いいだろう、ここに来た五人だけでもいいなら乗せてやる」

そして俺たちは海上の人となった。
今は入り江から東へ向けて出発し、陸地と海の境界が曖昧に見えるほどまで沖に進んでいる。
海賊の陣容は特徴的な偏りがあるようだ。
船はほぼ全てが小型であり、一隻につき十二、三人が乗り込んでいるが、操船だけならば三人で事足りるという。
二本の帆柱に縦帆が張られ、小回りを最優先とした形になっている。

縦帆の船は横帆に比べて速度は出せないが、帆の面積が少ない分方向転換や向かい風を切り上がるのに向いているのだ。
海賊という生業を考慮するならば、機動性に重きを置くのは必然と言えるだろう。
もちろん小型であることの弊害も存在する。

「……レイジ君、私やっぱり歩いて行こうかな……」
「今さら思わぬ弱点とか要らないから」

実は船に乗るのは初めてだというベッテは、襲い来る船酔いと戦っていた。
運動神経、特に平衡感覚にも優れているはずの彼女がこれほど弱いとは思わなかったが、きっとそのうち慣れるだろう。
慣れてくれ。

「それで、海軍に勝つ当てはあるのですか」

監視船からの報告によると、海軍は大型艦一隻、中型艦八隻、おそらく総員は三百人程度と想定された。
対してこちらは小型船が十六隻、二百人である。
あえてこちらの船は「船」としているが、それは装備の差によるものだ。
海軍の船はあきらかに戦闘を想定して建造された「艦（いくさぶね）」なのだが、海賊の船はどこにでもある船に武器を持った人間が乗り込んでいるだけで元が戦闘用ではない。
これは民間船のふりをして獲物に近付くための小細工であるから、体制として仕方のないことではある。
だが、対海軍までを想定しておくとすると、戦力としてはいささかどころではなく頼りなく思う。
船の数で上回るとはいえ、その利点を発揮しうることが可能なの

だろうか。

「海軍の船は舷側にある弩(いしゆみ)がほぼ唯一の武装だ。それを掻い潜り、乗り込んでしまいさえすれば負けることはない」

「船首か船尾から向かえば被害は少なく済むでしょうが、相手も簡単にはやらせてくれませんよね？」

「ただ突っ込むとでも思ったか？　いいだろう、軍師殿にも俺らの策を検めてもらおうか」

単純に聞いてみただけだったのだが、迂闊だった、気を悪くさせてしまったかもしれない。

しかし、こうして船に乗ってみるとオーロフの異質さがより浮き彫りになる。

俺は船乗りやそれに類する職業の人間と直接の交流を持ったことがなかった。

知識としては映画やドキュメントもののテレビ番組で見聞きした程度のことしかわからない。

それでも先日知り合った、今も甲板を動き回る海賊たちの印象は、予想していたものとそれほどの差異はなかった。

日に焼け、屈強で、無骨な、だが一度気を許せば気さくでもあり大らかな、海の男。

一方、俺が受けたオーロフの印象は違う。

日には焼け、屈強と言って不足はないが、どうしても無骨には思えない。

気性に関してはまだ警戒を解かれていないせいもあり言及するまでの情報は持ち合わせないが、何かが違う。

他の海賊は、セルマも含めて「気性に合っているから」船に乗っている。

ところがオーロフは「船に乗るべくして乗っている」。

……明確な表現ができないのは歯痒いが、船に乗るオーロフ、と

いう図は他に抜きん出て絵になるのだ。
「いいか、今、俺たちはこの辺りにいる」
海図を広げ、隠れ家の入り江から東北東に向かって指を滑らせて二度叩く。
図面の正確さを真に受けるとすると、隠れ家とセルヴェスヴィークの距離を倍したほどだ。
俺の感覚と計算がまともに通用するならば、陸からおよそ二十キロメートル沖の位置になる。
「海軍はおそらくこの辺り」
指が現在地から約五十キロメートル北西に進み、少し突き出た半島を掠めて海岸沿いを示した。
形としては、海軍を頂点に、俺たちとセルヴェスヴィークを結ぶ線を底辺とした二等辺三角形が成り立つ。
「そして、ここ」
戦うべき二者のちょうど中間辺り、先ほど掠めた半島の先端近くでぐるっと指を回す。
「ここは海に隠れた岩礁が広がっていてな、戦艦が通れる海路は一本しかない」
「……しかし小さく吃水の少ない海賊の船なら、ということですか」
「そうだ。回り込んで船尾につくことができる。それだけじゃない、風は北から吹いてるんだ」
「旋回もできない」
「ご名答、なるほど大言壮語をぶち上げるだけはある」

ぶち上げたのは俺じゃないんだけどな。
このとおりに話が進めば問題ない。
問題は、おそらく指揮を執っているであろう新しく着任した切れ者がどれほどのものなのか、だ。

十六隻の船は、帆に北風を孕み切り上がっていく。

第四十一話　流儀

風はほぼ真北から、波の先を絶え間なく飛沫かせる程度の強さで安定している。
船は半ば風に向かっていくように走っているため、肌で感じるほどには速度は出ていない。
船室から出た俺は、伸びた髪を風に弄らせながら進行方向に意識を飛ばす。

もし俺が敵の指揮官だったら、わざわざ緊急避難の利かない航路を取るだろうか。
海賊の本拠地が正確に掴めていない以上、彼我の距離差を測って安寧を信じることはできないのだ。
それを探ろうとしているから危険を孕む海岸沿いを南下しているのではあるが、特別見逃すような地形があるわけでもない、大きく回り込んだところで差し支えない場所で敢えてリスクを負うことはないのではないか。
まがりなりにも近辺を治めている海軍であれば岩礁の存在を知らないわけも無いだろうし、仮に新任者がそれと知らず艦を進めたとしても、部下はこの海の者、耳に入れて判断を仰ぐくらいはするだろう。
だとすると――

「……罠？」
「だろうよ」

背後から聞こえた声に驚き、振り向くとオーロフが立っていた。
ついさっきまでの俺と同じ方向を、さほど興味があるようには見えない視線で眺めている。

「……それと気付いていて向かうんですか。先程それも聞きたかったですね」
「まあ罠だとして、だ」

片足を引く、という最小限の動作で体ごと俺に向き、嫌味を無視するような口調で続ける。

「例えばどういう策があると思う」
「そうですね……」

頭の中で創造した俯瞰図にいくつかの動線を描いてみる。
まずは逆手を取る方法。
進軍を遅らせて先に俺たちを誘い込み、通れるとはいえ多少動きの制限されたところを包囲、殲滅する。
次に成功と思わせて掌を返す方法。
部隊を二つに分け、先遣隊が時間を稼ぐ間に後詰めが急襲する。
伏兵の可能性。
既に俺たちの回り込む先に大兵力を展開し、網にかかるのを待っている。
さらに交戦しない可能性。
空振りさせて気勢を削ぎ、密かに後をつけて本拠地を暴こうとしている。

「すぐに思いつくのはこんなところでしょうか」
「よくもすらすらと思いつくものだな。まあおそらく、その中でも

二つに分ける方法で来るはずだ」

まるで悪戯小僧の悪知恵に感心したような苦笑を噛み殺し、一転して神妙な顔を作り断定した。

「最も危険度の高い作戦だと思うのですが」

「そうじゃない。これは海軍の船団が隘路を抜けるときの規則のようなものだからな、相手がそれなりにやる奴なら、わざわざ警戒させる準備はしないだろうというだけさ」

なるほど、餅は餅屋、最初からそこを狙っていたわけだ。

先遣隊だけでも潰せば足止めはでき、進軍するためには後処理をしなくては通れない。

海軍側からすれば、追い風での単純な速度なら面積の広い帆を持つ自分たちが有利であり、故に先遣隊もそれほどの被害は負わないだろう、という目算に違いない。

しかしそう考えると、逆にこちらの分が悪すぎる。

足が遅いのは変わりようがない事実なのだから、わずかに機を失しただけで全滅もあり得るのだ。

これが海賊の戦い方、と言えばらしいのだが、極論するなら俺たちが乗っていないときにやってもらいたい。

「……オーロフ・ヴァーサ、あなたは今日の戦、勝つだけで満足ですか？」

「不満はないが」

「完勝して、結果的に利益も付くというのはどうでしょう」

ここまで来ると悪知恵というよりも悪巧みなのだろうが、生き残る確率と、彼らからの信用度を共に上げるまたとない好機である。

噂先行で張りぼてのまま、というのも据わりが悪いし、それなり

の戦果を献上しようではないか。
　オーロフは訝しむ様子を隠そうともせずに俺を見つめていたが、両目に打算の光を閃かせると、ひとつ頷いて口を開いた。
「採用するとは断言できないが、軍師殿が必勝と言う策、聞かないわけにはいかないな」

　本格的に北上を始めてからおよそ三時間ほどが経っただろうか。
　俺の感覚なので正確なところは保障できないが、船の速度は時速十キロメートルか少し遅いぐらい、とすると三十キロメートル弱移動したと計算できる。
　方位で見るならば、目的地である岩礁地帯から五キロメートルほど北東、というところだ。
　ここからは南西に転進し、海軍と併入するように岩礁を目指す。
「距離的には海軍のほうが近くなっているだろうが、沖のほうが風は強い。おそらく予定通りに行けるだろう」
「これがちゃんとした罠なら、あちらもある程度合わせてくれるでしょうしね」
「そうだな」

　俺の茶々を首肯するオーロフ。
　しかし周囲の海賊たちは、数瞬の間をおいて俺の一言を理解すると、驚きを露にして口を開閉させている。
「話してなかったんですか？」
「話した気になって忘れていた。いいかお前ら、これは敵の罠だ」

こういったことには几帳面そうな印象だったのだが、そうでもないらしい。
こんなとき真っ先に突っ掛かるだろうと思われたセルマは、もはやあらぬ方向を向いて我関せず、という姿勢を打ち出していた。
「しかしだ、俺たちはこの敵の罠を逆手に取り、ぬか喜びするだろう海軍に痛撃を加え、嘲笑を投げつけて帰航する。あまりにその様子が鮮明に浮かぶものだから、帰ってどう祝うかばかりで詳しい状況を説明するのを忘れていた。許せよ」
この戦いは万全だ、負けるはずがない。
そう言い切ると、浮ついていた空気に芯が入り、信頼という熱を帯びてきた。
方法は半ば煽動のようだが、狼狽の池に足を踏み入れそうになった部下を立ち直らせ、鼓舞するという意味では成功に違いない。
「さて、そこでどうやって出し抜いてやるか、ということなんだが」
一瞬だけオーロフの瞳が俺を捉え、うまくやるから心配するな、とでも言うように笑いの形に動かす。
「おい、シェル、海軍の艦一隻でうちの船何隻分の値段になるかわかるか」
「一般的な中型艦なら二十隻分くらいが相場ですね」
シェルと呼ばれた、他の海賊に比べると細身の男が特に考え込む様子も見せずに答えた。
おそらく金銭管理など事務系統を任されている人物なのだろうが、オーロフとは違った意味で、この男も海賊らしくはない。

「そんなものか。つまりな、うちの船を二隻ばかりくれてやるから、かわりにそちらのを何隻かよこせ、というわけだ」

何の変哲もない使い古しの銅貨を、新造の記念金貨と取り替えろ、と言っているのである。

もし銀行でそんなことを言ったら、最高級の苦笑と最大級の丁寧さで謝絶されるだろう。

万が一この取引が成立することがあるとすれば、銅貨に希少価値が伴い、相手が好事家である場合に限られる。

ただの古銭を使ってくすね取ろうとすると、偽造するなり嘘八百で丸め込むなり、それなりの労力を覚悟しなければならない。

しかし、今回はそうした暗黙の約束事を遵守する必要はない。

おもむろに銅貨を投げつけて怯ませ、その隙に飾られている金貨を奪い去ればいいのだ。

……というようなことをより具体的に、作戦としての細部までをオーロフが説明していく。

俺の一般的な海賊に対する先入観から、あまり回りくどいことをするのは難しいのではないだろうか、と心配していたが、杞憂でしかなかったようだ。

適度に柔軟性を保ちながら適切な指示が飛び、受ける側も要求に対して滞りなく応える。

そういえば、初めて彼らに遭遇したときも目を見張るほどに整然としていたのではなかったか。

ひと通りの指示を出し終えた頭領は身振りだけで俺を指し示し、人の悪い笑みを作ってから、からかうように話し続けた。

「これを考えたのは向こうの軍師殿でな、なかなか海賊の流儀をわかっている」

「本物なら何も与えずに奪うところでしょうけど」
「何、俺らは物の価値ってものをよく知っているだけさ」

成功したときの名誉はくれてやる、だから責任も被れ、というところだ。
こうして悪びれもしないオーロフを憎めないのは、やはり人徳のなせる業か。
クリスに向けられる忠誠とはまた違う、人の上に立つ者特有の能力、カリスマの一種なのだろう。

「さあお前ら、ひと仕事始めるぞ！」

オーロフの声は、各所から巻き起こる喊声に飲み込まれていった。

更新停止のお知らせ

お付き合い頂いていた読者様方にはご迷惑をおかけしますが、勝手ながら「皇國記」の連載を停止させていただきます。

およそ二年に渉って書き続けていましたが、このまま続けても思っていたとおりの物語にはならないと判断したためです。

現在基本骨子から再構築を行っており、大幅な改稿を進めています。

連載再開、或いは一括掲載は早くても一年後ほどを見越しており、その期日は現時点では不明瞭としか言えません。

何がしかの進展があった場合、再度お知らせすることになると思います。

更新をお待ち頂いていたうえ、このような形で中座してしまうことをお詫びいたします。

可能ならば若輩者の愚行、と笑って赦して頂ければ幸いです。

二〇一〇年二月六日　真崎優

※二〇一〇年一一月七日

長い間お待たせしており申し訳ありません。

今後改訂版を掲載するにあたり、既存の文章を削除する可能性がございます。

万が一「現状のものを読みたいが今は時間がない」「このままが

好きだ」「何はともあれ残しておきたい」という方は、お手数ですがテキストファイル等への保存をお勧めします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3845d/

皇國記

2010年11月8日13時24分発行